

小 学 校

平成 2 5 年度

研究開発委員会指導資料集

国 語
社 会
算 数
理 科
体 育
道 徳

外国語活動

平成 2 6 年 3 月

東京都教育委員会

〔 目 次 〕

小学校国語研究開発委員会	1
小学校社会研究開発委員会	2 1
小学校算数研究開発委員会	4 1
小学校理科研究開発委員会	6 1
小学校体育研究開発委員会	8 1
小学校道德研究開発委員会	9 9
小学校外国語活動研究開発委員会	1 1 6

＜小学校国語研究開発委員会＞

研究主題・副主題

「〔伝統的な言語文化に関する事項〕に係る教材及び指導法の開発
～伝統的な言語文化に出合い、昔の人のものの見方や考え方に親しむための指導の工夫～」

研究の概要

学習指導要領の改訂に伴い、〔伝統的な言語文化に関する事項〕の指導が示された。伝統的な言語文化を生涯にわたって親しむ態度の育成の重要性和同時に、教員の指導力向上が求められている。本研究では、児童が伝統的な言語文化に出合い、昔の人のものの見方や考え方に親しむことができることをねらいとして、伝統的な言語文化に関する児童と教員の意識調査から課題を明確にし、発達段階において必要な「話すこと・聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」における教材及び具体的な指導法の開発を行う。

I 研究の目的

平成 20 年 3 月告示の小学校学習指導要領では、小学校国語科に〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新たに設けられた。これは、平成 16 年 2 月の文化審議会国語分科会答申や平成 17 年の文部科学省の読解力向上プログラム、平成 20 年 1 月の中央教育審議会答申を受けたものである。また、東京都教育ビジョン（第 3 次）においても、主要施策として国際社会で活躍する日本人の育成を掲げ、我が国や郷土の伝統・文化、歴史についての理解を深め、尊重する態度を養う教育を推進することが求められている。

小学校では平成 23 年度から〔伝統的な言語文化に関する事項〕の指導が始まったが、指導法の確立や教材の研究が十分ではなく、指導が個々の教員の力量や経験に負うところが多いという実態がある。また、教科書教材の文章を音読するだけの学習や、文章を現代語に訳すだけの学習を行うなど、児童が伝統的な言語文化に興味・関心をもったり親しんだりしているとは十分に言えない状況がある。

そこで、本研究開発委員会では、児童が伝統的な言語文化に対してより高い興味・関心をもつ教材を開発し、適切かつ効果的な指導を行うことにより、児童は伝統的な言語文化への興味・関心を高め、昔の人のものの見方や考え方を知り、親しむことができると考えた。

ついては、伝統的な言語文化に関する児童と教員の意識や指導法の実態を明らかにし、児童が伝統的な言語文化により親しむための教材の開発や効果的な指導方法について明らかにし、提言する。

II 研究仮説

様々な伝統的な言語文化に触れ、言葉を味わい、作品世界を自らのものにすることで、昔の人のものの見方や考え方に親しむことができる。

伝統的な言語文化は、各時代にわたって表現し、受容されてきた言語芸術や芸能などを幅広く指している。本研究では「言葉を味わう」とは、音読や読み聞かせ等によって言葉の響きやリズムを感じ取ることと捉えた。また「作品世界を自らのものにする」とは、伝統的な言語文化の特徴を生かした主体的な言語活動を通して、作品の情景や作者の思いを想像し、自分が考えたことを書いたり表現したりすることと捉えた。このように、児童が伝統的な言語文化に出合い、主体的に言語活動を行うことで、「読みたい」、「もっと知りたい」などの興味・関心を高め、昔の人のものの見方や考え方により親しむことができると考えた。

Ⅲ 研究方法

1 基礎研究

学習指導要領「国語」の目標及び内容、国や東京都の教育施策について理解を深め、「伝統的な言語文化に親しむこと」について、児童が作品を読んで「おもしろいな」、「もっと読みたい」といった言葉が導き出される様子であると捉えた。教材と指導法の開発のために、以下のように教材化の可能性を検討した。

- ・昔話や神話、伝承では、原典等にあたり児童が読むにふさわしい文章や書籍を見いだした。
- ・ことわざや慣用句、故事成語は、日常生活との関連を踏まえた教材の検討を行った。
- ・古文、漢文、近代以降の文語調の文章は原文と解説した文章を読み、教材化を図った。

2 調査研究

伝統的な言語文化に関する児童、教員の意識と指導の在り方について実態調査を行った。児童、教員共に質問用紙による回答とし、対象は都内公立小学校の中から抽出した全8校の第2学年、第4学年、第6学年の児童と国語科の指導経験のある教員である。質問項目は以下のとおりである。4段階評定尺度法、複数選択法を取り入れた。

- | | | | | | |
|------|-------|----------|-------|---------|-------|
| 【児童】 | ・興味関心 | ・意識 | ・学習経験 | ・日常的な取組 | ・教育環境 |
| 【教員】 | ・意識 | ・指導の取組状況 | ・評価 | ・課題 | など |

3 開発研究

児童が伝統的な言語文化により親しむためには、教材との出会いが重要である。昔話や神話等は、伝統的な言語文化との出会いとして読み聞かせによって楽しさを実感させることが適切であると考ええる。作品の選定に当たっては、伝統的な言語文化のよさを味わうという観点から、創作童話でなく、昔話の原典等にできる限り忠実な内容の本を選択することとした。短歌や俳句、ことわざや慣用句、故事成語については、辞典やそれらを扱った図書、カルタ等から選択し、資料としてワークシート等に表して教材として提供することが望ましいと考えられる。古文や漢文、近代以降の文語調の文章、古典について解説した文章は、今後、さらに十分な開発を要する言語文化である。これらは、江戸時代の作品や、明治時代の言文一致が通常の文章として出版されるようになる前の文章が含まれる。

指導法については、児童に「話す・聞く」、「書く」、「読む」という言語活動を主体的にさせることが重要である。児童は伝統的な言語文化に触れ、理解した上で、言葉を味わい、昔の人の思いを感じ、ものの見方を追体験することができる。伝統的な言語文化における指導においての言語活動には、音読、ワークシートに読み取った内容や表している意味の記述、思ったことや感じたことを作品にするなどの活動が考えられる。児童が知っている話と原文や原典を比較する活動や作品の意味を踏まえての短文作りや感想文などの活動もある。

伝統的な言語文化の学習については、まず音読により「読む」学習を通して作品世界に触れることが重要である。古文、漢文などの原典で学ぶ場合には、辞書を使用せずに、副教材として現代語訳を活用する。作品の概要を感じ取り、それをどのようにまとめるかを考えて学習活動・言語活動を設定すればよい。教材となる作品によって、その学習活動が変わってくるが、国語科の学習として、言葉の学習になっているかどうかが重要な観点である。

IV 研究構想図

〔伝統的な言語文化に関する事項〕に係る教材及び指導法の開発

～伝統的な言語文化に出合い、昔の人のものの見方や考え方に親しむための指導の工夫～

研究の背景

- ・各教科等における言語活動の充実
- ・生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する必要性
- ・伝統的な言語文化の指導の重視

【東京都教育委員会の教育目標】

- ・互いの人格を尊重し、思いやりと規範意識のある人間
- ・社会の一員として、社会の貢献しようとする人間
- ・自ら学び考え行動する、個性と想像力豊かな人間

【東京都教育ビジョン(第2次)】

重要施策 2 7 日本の伝統・文化に対する理解の促進

【東京都教育ビジョン(第3次)】

主要施策 3 思考力・判断力・表現力を育成し、時代の変化や社会の要請に応える教育の推進

関連施策等

- ・文化審議会答申
- ・文部科学省「読解力向上プログラム」
- ・中央教育審議会答申
- ・東京都教育ビジョン(第3次)

研究の目的

児童が伝統的な言語文化により高い興味・関心をもつ教材の開発と伝統的な言語文化に関する教員の指導力の向上を目指す必要がある。本研究では、伝統的な言語文化に関する、児童と教員の意識や指導法の実態を明らかにして、児童が伝統的な言語文化により親しむための魅力的な教材の開発や効果的な指導法について明らかにする。

研究仮説

様々な伝統的な言語文化に触れ、言葉を味わい、作品世界を自らのものとすることで、昔の人のものの見方や考え方に親しむことができる。

基礎研究

- ・昔話や神話、伝承の原典を探す
- ・ことわざや慣用句、故事成語の教材化
- ・古文、漢文、近代以降の文語調の文章と古典について解説した文章を読む
- ・先行研究の分析

調査研究

伝統的な言語文化についての教員の指導の実態、児童の実態(第2学年、第4学年、第6学年)の意識調査を行った。

○児童(2196人)・興味・関心・意識・教育環境等 ○教員(149人)・意識・実践・評価・課題

開発研究

教材の開発	指導法の開発
○教材となる作品の開発・選択 ・昔話、神話については、原典等を探し、できる限り忠実な本を選択する。 ・ことわざや慣用句、故事成語は、各辞典や扱った図書、カルタ等から選択し、資料としてワークシート等に表して、児童に提供する。 ・近代以降の文語調の文章、漢文では、韻文・散文、多岐にわたって扱えるものがあり、児童の興味・関心を喚起するものを教材とする。	○教材との出合わせ方 ・児童が身近に感じられたことや共感できるものを選び、単元の初めに効果的に教材を提示することで、親しみがもてるようにする。 ○親しませるための効果的な指導方法 ・「読む」「書く」という言語活動を主体的に行わせることによって、伝統的な言語文化に触れ、言葉を味わい、作品世界を自らのものにする。そのことにより、昔の人の思いや考え方に親しませることができる。

研究成果の活用

開発した教材及び指導法の工夫を全学年において、活用し、普及・啓発を図る。

V 研究内容

1 基礎研究

児童が「伝統的な言語文化に親しむ」姿をどのように捉えるか、学習指導要領「国語」の目標及び内容、国や東京都の教育施策について理解を深めた。「伝統的な言語文化に親しむ」姿を児童が作品を読んで「おもしろいな」、「もっと読みたい」といった言葉が導き出される様子と捉えた。次に、児童がより高い興味・関心をもつ教材を開発するために、発達段階を考慮しながら、教材化の可能性について検討を行った。

2 調査研究

(1) 調査研究の概要

伝統的な言語文化に関する児童と教員の意識と指導の在り方について、都内公立小学校における児童と国語科の指導経験のある教員を対象に調査を行った。

(2) 調査内容 【児童】・興味・関心、意識、学習経験、日常的な取組、教育環境等

【教員】・意識、指導の取組の状況、評価、課題

(3) 調査方法 4段階評定尺度法、複数選択法を取り入れた質問紙調査

(4) 調査対象及び対象人数 都内公立小学校8校の児童及び国語科指導経験がある教員

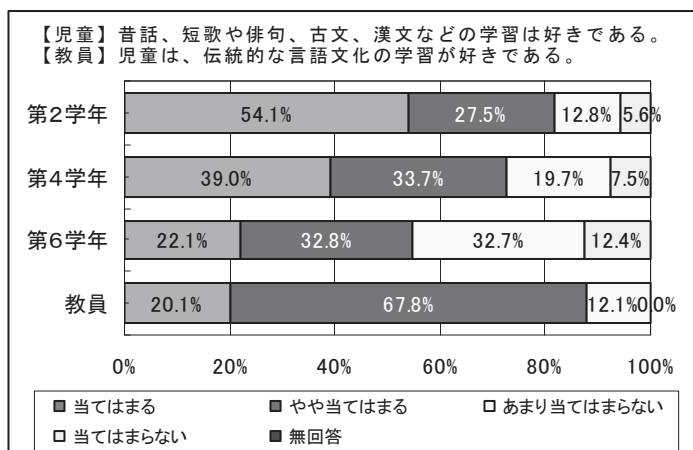
【児童】 第2学年：734名 第4学年：730名 第6学年：732名

【教員】 149名

(5) 調査時期 平成25年7月

(6) 調査研究の結果

ア 伝統的な言語文化の学習への興味・関心について

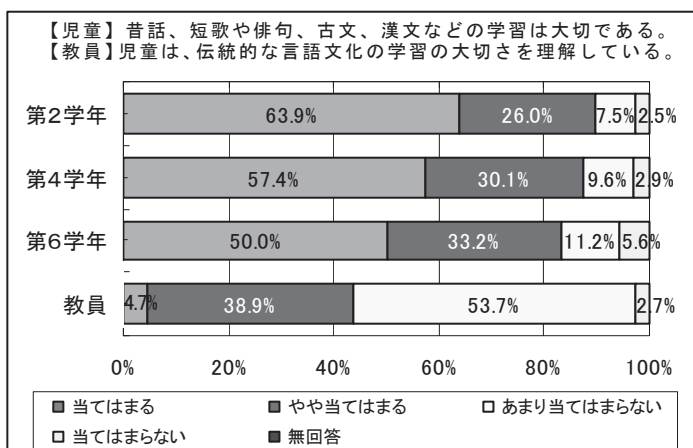


「伝統的な言語文化の学習は好きである」という設問について、「当てはまる・やや当てはまる」と肯定的な回答をした児童の割合は、第2学年で81.6%、第4学年で72.7%、第6学年で54.9%となっており、学年が上がるに従って減少している。

教員は「児童は伝統的な言語文化の学習が好きである」という設問について肯定的に捉えている割合は、87.9%であった。

このことから、児童と教員の意識には差があることが分かった。中学校の研究開発委員会でも生徒、教員に同様の調査を行ったが、生徒と教員の意識に差がある同様の結果が見られた。

イ 伝統的な言語文化の学習への意識について

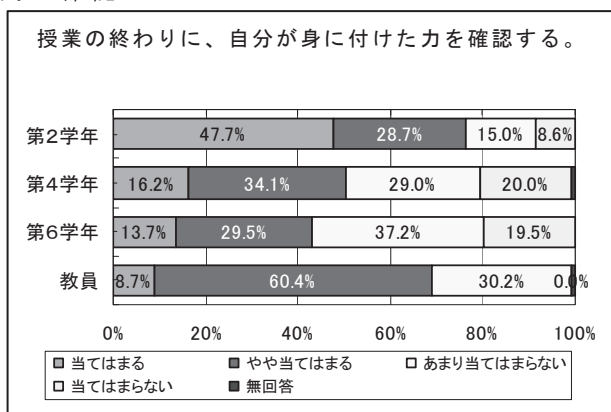
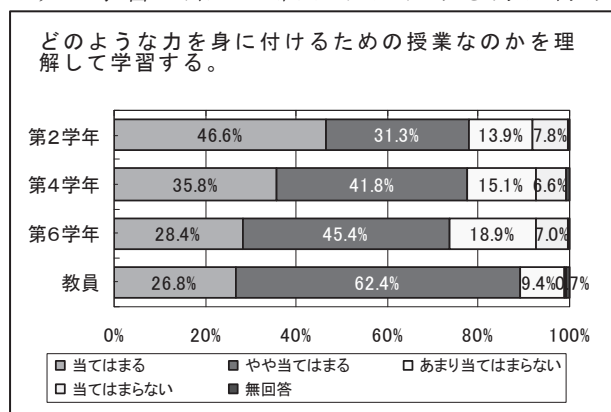


「伝統的な言語文化の学習は大切である」という設問について、肯定的な回答をした児童の割合は、第2学年で89.9%、第4学年で87.5%、第6学年で83.2%となっており、学年が上がるに従って減少するもののどの学年も80.0%は超えている。

教員は「児童は伝統的な言語文化の学習の大切さを理解している」という設問について肯定的に捉えている割合は、43.6%であった。

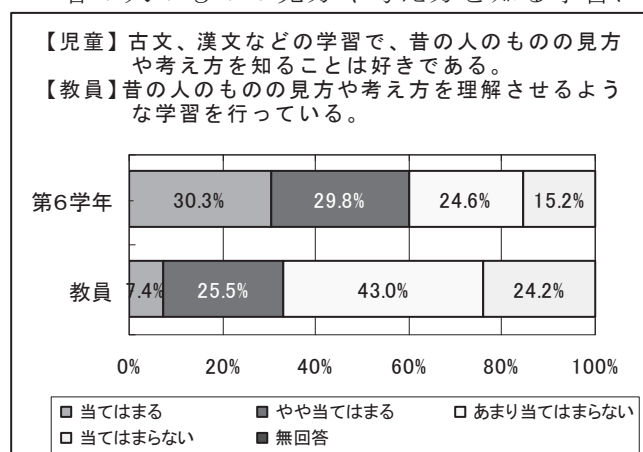
このことから、教員が思っている以上に、児童は伝統的な言語文化の学習は大切であると思っていることが分かった。

ウ 学習の始めと終わりににおける身に付ける力の確認について



「どのような力を身に付けるための授業なのかを理解して学習する」という設問について、「当てはまる・やや当てはまる」と肯定的に回答した児童は、どの学年も70.0%を超えており、教員の割合は89.2%であった。「授業の終わりに自分が身に付けた力を確認する」という設問について、「当てはまる・やや当てはまる」と肯定的に回答した児童は、第2学年で76.4%、第4学年で50.3%、第6学年で43.2%であり、教員は69.1%の割合であった。児童には、授業の終わりに自分が身に付けた力を意識させるような指導の工夫が必要である。

エ 昔の人のものの見方や考え方を学ぶ学習について



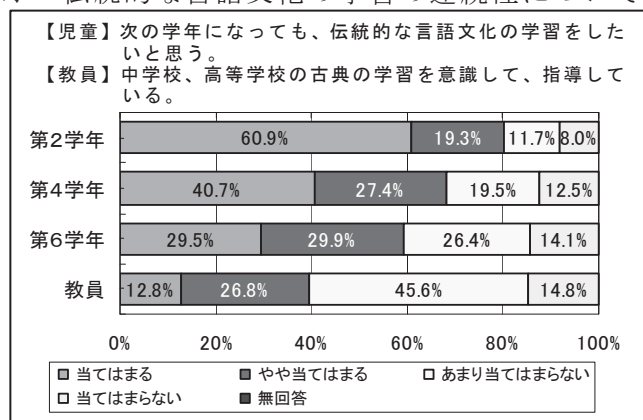
「古文、漢文などの学習で、昔の人のものの見方や考え方を学ぶことは好きである」という設問に対して、肯定的に回答した第6学年の児童は60.1%であった。

「昔の人のものの見方や考え方を理解させるような学習を行っている」という設問について、肯定的な回答をした教員は32.9%であった。

「昔の人のものの見方や考え方を学ぶ」ことは第5学年及び第6学年の指導事項となっているため、調査を行った教員が当該学年を担当していないことも考えられる。

しかし、児童の実態から、昔の人のものの見方や考え方を知ったり親しんだりする学習の工夫が必要であると考えられる。

オ 伝統的な言語文化の学習の連続性について



「次の学年になっても、伝統的な言語文化の学習をしたいと思う」という設問について、「当てはまる・やや当てはまる」と肯定的な回答をした児童の割合は、第2学年で80.2%、第4学年で68.1%、第6学年で59.4%となっており、学年が上がるに従って減少している。

また、「中学校、高等学校の古典の学習を意識して指導している」という設問について、肯定的な回答をしている教員は、39.8%であった。

伝統的な言語文化を継承していくためには指導者が中学校、高等学校での学習を意識し、発達段階に応じて、児童の興味・関心を継続させるような指導の工夫が必要である。

(7) 調査結果からの考察

本調査により、児童は学年が上がるに従って伝統的な言語文化の学習への興味・関心が低くなることが分かった。また、教員が思っている以上に、児童は伝統的な言語文化について大切であると考えていることが分かった。さらに、授業の終わりに身に付けた力を確認することや昔の人のものの見方や考え方に親しむ学習の大切さ、次の学年に向けて興味・関心が継続するような指導の工夫の必要性が明らかになった。

そこで、これらの結果に基づき、興味・関心が高まるような教材を見だし、児童が伝統的な言語文化の学習が大切であると考えている実態を踏まえ、学習の終わりに身に付けた力を確認することができ、学習したことが日常生活に生かされるような単元構成を工夫することが必要であると捉えた。また、意欲を持続させて次の学年でも学習してみたい指導法の工夫を開発することが課題である。

3 開発研究

(1) 教材の開発

児童の興味・関心を高めるための教材の開発として、教科書に掲載されている教材を参考として、発達段階に応じたふさわしい教材を見いだすこととした。そのためには、児童の興味・関心に応じて、主体的に学習することができる教材を選ぶことが必要である。

教材開発に当たっては、原典等のよさを味わうという観点から原典等の内容に忠実であることを大切に、日常生活に生きて働く内容を含んでいることを重視した。

以下のように、教材開発における観点を発達段階ごとに示す。

低学年	中学年	高学年
○読み聞かせや、音読にふさわしいものであること ○現代作家等の創作でなく、原典の内容にできるだけ忠実であること ○児童の理解や記憶が曖昧な構成や内容の物語（昔話・神話）でも適切な理解に資することができる文章が載っている絵本であること ○地域の図書館で調べたり地域等の語り部から聞き取ったりして文章に起こすことができる口承文芸等であること	○情景を思い浮かべたり、リズムを楽しんで音読や暗唱したりできること ○日常生活を振り返り、生活に生きて働く内容を含んでいること ○作品をイメージして映像や絵画として表現しやすいこと ○創作等の「書くこと」に生かすことが考えられる作品であること ○自分の生き方の参考にすることができる内容を含んでいること	○内容の大体を理解することができ、音読ができること ○当時の人のものの見方や考え方が、表れている作品であること ○作者や筆者の感性等に共感できたり、自分の考えをもつことができたりする作品であること ○児童に新たな発見を感じさせたり、感嘆させたりする内容を含んでいること
例）・動物が出てくる昔話（犬、きつね、さる、うさぎ、ねずみ等） ・話が短いもの ・話がおもしろいもの ・内容に興味をもてるもの	例）・自分の経験や体験に合った故事成語、ことわざや慣用句の選定 ・イラストなどで分かりやすく紹介している図書の活用	例）・児童の生活や体験に即した短歌、漢詩、近代詩 ・意味が分かりやすいもの ・作品に作者の思いや考え方が表れているもの ・音読に適しているもの

(2) 指導法の開発

伝統的な言語文化の指導を行う際には、身に付けさせたい力と目指す児童の姿を明確にして、目的、相手に応じて指導過程を工夫する必要がある。また、児童が興味・関心に応じて主体的に学習できるような教材との出合わせ方や単元を貫く言語活動を設定することが大切である。そこで次の2点で指導法の開発を行った。

ア 単元構成の工夫

伝統的な言語文化の学習に児童が興味・関心をもって取り組み、学習の終わりに身に付けた力を確認するためには、主体的な学習活動の工夫及び学習したことが日常生活に生かされるような単元構成が必要である。そのためには、教材の特徴と児童の実態に合わせ、興味・関心が高められる学習活動の工夫が大切である。

以下のように、単元構成の工夫例を示す。

単元構成の工夫	留意点
身に付けさせたい力及び目指す児童の姿の明確化	・伝統的な言語文化における既習事項や児童の興味・関心等児童の実態を把握し、単元全体を通して身に付けさせたい力を明確にする。 ・具体的な児童の目指す姿を明確にする。
伝統的な言語文化の特徴を生かした言語活動	・昔話や神話、伝承、短歌や俳句、ことわざや慣用句、故事成語、古文、漢文などの言葉の特徴やリズムを生かした言語活動を行う。 ・伝統的な言語文化の特徴を生かして、言葉との関わり、人との関わりを作る。
主体的な学習活動の設定	・単元全体及び終末の活動を提示し、学習に見通しがもてるようにする。 ・伝統的な言語文化に興味をもち、自ら集めたり調べたりする場を設定する。
日常生活とのつながり	・日常生活との関わりをもたせる ・自己を見つめる学習活動からこれからの自分に生かせるようにする。 ・日常場面との関連を想起させる活動を行う。 ・日常生活との関連を図り、読書活動につなげる。

イ 伝統的な言語文化の特徴を生かした言語活動の工夫

伝統的な言語文化の学習において、児童が興味・関心を持続させ、生涯にわたって伝統的な言語文化に親しむためには教材との出会いが大切である。伝統的な言語文化には、昔話や神話、伝承は音読や読み聞かせにおいて関心を高められるもの、短歌や俳句などは作品を読み、言葉を味わい、作品世界をイメージすることができるものなど特徴によって適した言語活動がある。伝統的な言語文化の特徴を生かして言語活動を工夫することによって、児童は主体的に学習に取り組み、作品を味わい、昔の人のものの見方や考え方に親しむことができると考える。

以下のように、伝統的な言語文化の特徴を生かした言語活動例を示す。なお、言語活動は発達段階や教材の特徴により、組み合わせて扱うことも考えられる。

		伝統的な言語文化の特徴を生かした言語活動例	関連する領域例			指導事例
			話・聞	書	読	
昔話や神話等	ア	内容を理解するために読む（読み聞かせ、音読）			○	低学年
	イ	登場人物への手紙を書く		○		低学年
	ウ	登場人物別の図鑑、人物録を作る		○	○	
	エ	ストーリーに応じた紙芝居、ペープサート、劇化の活動を行う	○		○	
	オ	お気に入りの登場人物に関する批評・感想を書く、紹介する	○	○	○	
	カ	「わたしは語り部」：他学年の児童に読み聞かせを行う			○	低学年
短歌、俳句等	ア	素敵な表現選び（ワークシート）：短歌や俳句の中の素敵な表現をまとめる		○	○	
	イ	表現されている世界をイメージして、掛け軸や絵画等に表す		○		
	ウ	イメージ世界の翻案（本歌取り）		○		
	エ	短歌や俳句を創作して句会を開く	○	○		
	オ	一つの観点や軸に沿って短歌や俳句を集める（例）古今集の四季等 花鳥風月ごと、食べ物ごと等）		○	○	
故事成語、ことわざ、慣用句	ア	お気に入りの「○○○」を選び、その内容と気に入った理由を書く（ワークシートの活用）		○		中学年
	イ	わたしの「座右の銘」を探す（自らの振り返りと選んだ理由と今後の生き方を考える）		○	○	中学年
	ウ	「言葉のアルバム作り」として、似た内容のものを集めて1冊のアルバムにする		○	○	
	エ	短文、短作文を作り、発表する	○	○		
古文・漢文	ア	音の響きを味わい、内容を理解するために読む（音読）			○	高学年
	イ	お気に入りの古文や漢文を選び、気に入った理由を書き、昔の人のものの見方や考え方と自分の考え方を比べる（ワークシートの活用）		○	○	高学年
	ウ	表現されている世界をイメージして、絵画等に表す		○	○	
	エ	現代詩（自作）への翻案（特に漢詩）		○	○	
	オ	文体を模倣して、随筆、紀行文等の創作を行う		○		
	カ	落語、講談、歌舞伎等を演じる	○		○	
	キ	作者や登場人物についての人物批評を行う		○	○	
古典について解説した文章	ア	理解に役立った内容をまとめる		○	○	
	イ	昔の人のものの見方や考え方を知り、調べたことや共感した文章をまとめ、討論をする	○	○	○	

VI 指導事例

低学年 第2学年 「動物が出てくる昔話を紹介する事例」

1 単元名 「おすすめの昔話を1年生に紹介しよう」

教材名 日本の昔話全5巻（福音館書店）他

2 単元の目標

- ・日本の昔話に関心をもち、楽しんで読む。（国語への関心・意欲・態度）
- ・昔話のおもしろかったところを書くことができる。（書くこと）
- ・登場人物の行動をとらえ、想像を広げながら楽しんで読むことができる。（読むこと）
- ・昔話の話のおもしろさや表現のおもしろさに気付くことができる。
（言語についての知識・理解・技能）

3 単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	書く能力	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
・昔話に関心をもち、楽しんで読もうとしている。 ・おすすめの昔話を選んで紹介しようとしている。	・おすすめの昔話について選んだ理由を書いている。	・登場人物の行動を捉え、場面の様子を想像しながら聞いたり読んだりしている。	・昔話の話のおもしろさや表現のおもしろさに気付きながら読んでいる。

4 研究主題に迫るための手だて

(1) 単元について

伝統的な言語文化の中で、昔話は児童が最も親しみやすい学習材である。昔話は、人の生き方や自然などについて、人々のものの見方や考え方が語り継がれたり、読み物になって現代まで伝わったりして、長い歴史の中で受け継がれてきたものである。人間の生き方についての、人間が自分を取りまく自然や動物たちの中で何とかして生き抜いてきたことについての、過去から現在へ向けてのメッセージのようにも受けとめられる。

本単元では、昔話の中から動物の登場する話を教材とした。まず、昔話に親しんで読み、さらに、昔話に登場する動物たちの行いや話の展開から、日本では古くからそれぞれの動物たちがどのような存在として捉えられていたものなのかということにも気付くことができればと考えた。

また、学習のゴールに、おすすめの昔話を選び紹介するという言語活動を設定することで、児童が主体的に昔話を読むことができるようにした。紹介の相手は1年生とした。紹介する際には、昔話に登場する動物ごとにまとまってブースを作り、1年生がそれぞれのブースを回って紹介を聞くことで、動物ごとの特徴も感じることができるようにした。おすすめの昔話の紹介で作った資料は最後に、図書室で「昔話のなかまたち」として動物ごとに掲示し、全校生に向けての読書案内とする。

(2) 教材について

教材として準備する昔話は以下の観点から選定した。

- ・伝統的な言語文化という観点から、できるだけ昔話の本来の姿をとどめていると考えられる話
- ・日本の昔話によく登場する動物の中から、児童にもなじみのある犬、きつね、さる、ねずみ、うさぎが登場する話
- ・昔話特有の語り口調や言い回しが含まれている話
- ・おもしろさや温かさを感じて読み終えることができる話

(3) 本単元において身に付けさせたい力及び目指す児童の姿

本単元では、おすすめの昔話を選び紹介することを通して、昔話をもっと身近に感じ親しんでほしい、と考えている。また、昔話には、古くから口伝えされてきたことによる独特の語り口調や言い回しがある。昔話の話のおもしろさとともに、こうした独特の表現にも気付かせ親しみを感じさせたり、昔話の中に読み取れる先人のものの見方や考え方に気付かせたりしたい。

本単元での「昔話に親しんで読む」という姿は、以下のように考えた。

- ・読み聞かせを楽しんで聞いている。
- ・登場人物の行動を中心に想像を広げる。
- ・自分から進んで昔話を手にとって読む。
- ・好きな表現を声に出したり、動作化したりしようとする。
- ・好きなところを友達と交流したり、紹介したりする。

(4) 具体的な手だて

「伝統的な言語文化に関する事項」に係る教材及び指導法の開発における具体的な手だて	
教材の開発	・昔話の中で、動物の出てくる話を複数選択し、教材として読むことができるようにした。 ・複数の話を読み比べる中に、その話に出てくる動物が昔話ではどのように捉えられていたものなのかが気付けるようにした。
指導法の開発	【単元構成の工夫】 ・昔話を複数準備して、読み比べをする設定とする。 ・児童になじみのある動物を取り上げ、学習を重ねる展開とすることで、児童が予測や期待をもって学習に臨んだり、学習の流れを理解し、より毎回の昔話の内容に集中して読むことができるようにする。 ・主体的な学習をうながすゴールの学習活動を設定する。 【伝統的な言語文化の特徴を生かした言語活動】 ・教材との出会いは、主として読み聞かせによって行い、児童が作品に触れやすくする。 ・昔話独特の表現やリズムに気付くことができるよう、おもしろかったところを音読する活動を取り入れる。 ・人物の心情ではなく、人物がどのような行動をとり、どのような結果に至ったかを捉えさせるようにする。 ・昔話や神話、伝承に含まれている価値、昔の人たちの知恵や生きるための工夫などにも気付かせられるようにする。 ・日常生活とのつながりとして、毎日の学級の音読の中で、「秋の七草」、「春の七草」、「月の異名」、「十二支」、「いろはうた」等を取り上げて暗唱することとした。日常的にも伝統的な言語文化への興味・関心を高められるようにする。

5 単元の指導計画（6時間扱い）

時	学習活動	◎研究主題に迫るための手だて ■評価規準（観点：評価方法）
1	○おすすめの昔話を選び、1年生に紹介することを知る。 ○犬が登場する昔話の読み聞かせを1冊聞き、感じたことをカードにメモする。 ○犬がしたことをつかみ、犬に対しての感想を書く。 ○犬が登場する他の昔話を読む。	◎犬が登場する昔話（「花さかじい」、「犬の足」、「ももたろう」）を読み、犬の行動について自分の感想をもち、犬への手紙が書けるよう犬の行動を確認する。 ■おすすめの昔話を進んで紹介したり、友達の紹介に興味をもって聞いたりしようとしている。（関心・意欲・態度：観察）
2	○きつねが登場する昔話の読み聞かせを1冊聞き、感じたことをカードにメモする。 ○きつねがしたことをつかみ、きつねに対しての感想を書く。 ○きつねが登場する他の昔話を読む。	◎きつねが登場する昔話（「きつねの玉のとりあい」、「しっぽのつり」、「きつねとうさぎのけんか」）を読み比べ、きつねの行動から、昔話できつねはどのような存在であったのかを考えさせる。 ■登場人物の行動や会話に着目して内容の大体をつかみ、感想をもっている。（読む能力：作品）
3 本時	○さるが登場する昔話の読み聞かせを1冊聞き、感じたことをカードにメモする。 ○さるがしたことをつかみ、さるに対しての感想を書く。 ○さるが登場する他の昔話を読む。	◎さるが登場する昔話（「さるかに」、「さるじぞう」、「さるのいきぎも」）を読み比べ、この単元でこれまでに読んだ犬やきつねの描かれ方との違いについて比較の視点がもてるよう助言する。 ■登場人物の行動や会話に着目して内容の大体をつかみ、感想をもっている。（読む能力：作品）
4	○うさぎ、ねずみが登場する昔話を読む。 ○うさぎ、ねずみがしたことをつかみ、ねずみに対しての感想を書く。 ○この単元でこれまでに読んだ昔話の中から「おすすめの一冊」を選ぶ。	◎1年生におすすめしたい、お気に入りの昔話を選べるように、これまで感じたことを書いてきたワークシートを見て振り返らせるようにする。 ■昔話を様々に読んで好きなものや興味あるものを選んでいく。（読む能力：観察）
5	○おすすめの一冊を紹介する準備をする。 ○紹介する昔話のおすすめの理由を書く。 ○おすすめの一冊を友達と紹介し合う。	◎選んだ昔話のおもしろさがよく分かるような場面を取り上げ、紹介するよう助言する。 ◎役割音読して紹介する際に、俳優の「語り」も参考にできるよう音声教材を準備する。 ■おすすめの一冊を選んだ理由を動物への思いに引き寄せて書いている。（書く能力：作品） ■おすすめの一冊を進んで紹介したり、友達の紹介に興味をもって聞いたりしようとしている。（関心・意欲・態度：観察）
6	○おもしろさが伝わるように音読し、おすすめの一冊を1年生に紹介する。	◎これまでの学習を振り返り、選んだ昔話に登場する動物への思いも紹介できるよう助言する。 ■語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読したり読み聞かせしたりしている。（読む能力：観察）

6 本時の指導（第3時）

(1) 本時の目標

「さるかに」を読み、さるの行動への感想をもつことができる。

(2) 展開

	学習活動	◇指導上の留意点 ■評価規準 ◎研究主題に迫るための手だて
導入	1 前時までの学習を振り返り、本時の学習課題を確認する。 さるが出てくるお話を読んで、さるにお手紙を書こう	◇本時のめあてをもたせる。
展開	2 さるが登場する昔話である「さるかに」の読み聞かせを聞く。 3 おもしろかったところや心に残ったところについて発表する。 4 今日のお話のさるに言ってあげたいことを手紙に書く。 5 さるが登場する他の昔話を読む。 6 今日読んだ昔話に登場する、さるに言ってあげたいと思ったことを発表する。	◇お話の全体像の把握に役立てるため、登場人物を全体で確認する。 ◇さるが「何をした」話なのかを簡単に確認する。 ◇昔話のはじまりや終わりの表現のおもしろさにも注目させるようにする。 ◇さるに対しての感想を、さるに言ってあげたいこととして手紙に書くようにする。 ■登場人物の行動や会話に着目して内容の大体をつかみ、感想をもっている。 ◇手紙が書けない児童には、読み聞かせの文章を抜粋したものを提示して振り返らせ、さるに言ってあげたいことを聞き取り、それを手紙に書くよう助言する。 ◇他の昔話でも、さるがよく似た行動をしているか比べながら読んでみるよう助言する。 ◎この単元でこれまでに読んだ犬やきつねの描かれ方との違いについて比較の視点がもてるよう助言する。 ◇昔話の中のさるは、悪賢いが最後にはやっつけられてしまうことが多いこと等、昔話の中に登場する動物は、ある一定のイメージが見受けられることについて触れ、気付かせる。
まとめ	7 本時の学習を振り返る。	◇本時の学習を振り返り、次時には、うさぎとねずみの出てくる昔話を読むことを知らせる。

【児童の手紙と学習の振り返り例】

- 手紙** ・そんなことをしてはだめだよ。柿の種をあげたから、柿の実も、かにのものだからね。（さるかに）
 ・悪いことをすると、悪いことが返ってくるよ。（さるかに）
 ・本当はうそをついてはいけないけど、こういう時はいいよね。かしこいね。（さるの生き胆）
 ・二人目はにせものって気が付いたけど、本当は一人目にもにせものなんだ。（さるじぞう）
- 振り返り** ・今日のお話に出て来たさるは、頭がよくてうそがうまいと思った。
 ・今日のお話に出て来たさるは、きつねと似ている。ちょっとずるがしこくて、うそをつくさる。
 ・今日のお話に出て来たさるは、勘違いするけど、やさしいところもある、悪いところもある。

1 単元名 「二十歳の自分へのメッセージ～『座右の銘』を見付けよう～」

教材名 ことわざ・慣用句・故事成語

2 単元の指導目標

- ・二十歳の自分に贈りたいことわざや慣用句、故事成語を選ぶ。(国語への関心・意欲・態度)
- ・ことわざや慣用句、故事成語について、自分の性格や経験と結び付けて書くことができる。(書くこと)
- ・ことわざや慣用句、故事成語を解説した文章を、その成り立ちや意味を理解しながら読むことができる。(読むこと)
- ・故事成語を正しく用いることができる。(言語についての知識・理解・技能)

3 単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	書く能力	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
・ことわざや慣用句、故事成語に興味をもち、すすんで意味を調べたり用いられる場面を考えたりしようとしている。	・ことわざや慣用句、故事成語が用いられる場面を自分の性格や経験と結び付けて書いている。	・ことわざや慣用句、故事成語を解説した文章を、その成り立ちや意味を理解しながら読んでいる。	・故事成語の意味を正しく理解している。 ・それぞれの故事成語が用いられる場面について考え、話し合ったり書いたりしている。

4 研究主題に迫るための手だて

(1) 単元について

ことわざや慣用句、故事成語は長く使われてきた言葉であり、それらの言葉を知ることは先人の知恵や教訓、機知に触れることである。これらの言葉の意味を知り実際の生活の中で用いることによって、児童は先人の教えを自然に学ぶとともに自らの言語生活を豊かにすることができる。

本単元で学習する故事成語を、知識としてだけではなく自分にとって必要な言葉とし、実際の生活の中で用いようとする意識を促すため、2分の1成人式と関連付けることとした。10歳という年齢は成人の半分にあたり、これまでの自分の成長を確かめるとともに未来に向けて希望や目標を抱かせる機会となる。大人へと成長する自分を支え教訓とする言葉として、故事成語やことわざ・慣用句は適している。「座右の銘」として出合わせたい。また、第3学年で学習したことわざや慣用句について、もう一度、多くの言葉に触れさせて自分の生活と結び付ける活動を行う。そうすることによって、ことわざや慣用句が日常生活の中で用いられるよさに気付くことができると思う。

(2) 教材について

児童が故事成語に興味・関心をもって取り組めるように、イラストで意味や成り立ちが表現された本を選定した。児童自らが理解しやすいように、日常生活と結び付いた具体的場面を考えさせたり、教師による簡単な解説書を作成し、並行して読ませたりした。

ことわざや慣用句については、イラスト等とともに具体的な場面が記載された児童向けの図書を選定した。

(3) 本単元において身に付けさせたい力及び目指す児童の姿

ことわざは、生活経験などにおいてありがちなことを述べたり、教訓を述べたりするものである。慣用句は、二つ以上の語が結び付いて元の意味とは違った特定の意味を表すものであり、故事成語は中国の故事に由来する熟語である。これらの言葉の意味を知り、生活の中で用いることは、先人の知恵や教訓、機知に触れることであり、言語生活を豊かにする。

本単元での「ことわざや慣用句、故事成語に親しむ」という姿は、以下のように考えた。

- ・ことわざや慣用句、故事成語を解説した本をすすんで読んでいる。
- ・ことわざや慣用句、故事成語の意味を正しく理解している。
- ・ことわざや慣用句、故事成語の意味に合う日常生活の具体的な場面を思い浮かべている。
- ・ことわざや慣用句、故事成語と自分の経験とを関連付けて気に入った言葉を選んでいる。
- ・気に入ったことわざや慣用句、故事成語を選び、選んだ理由を明確にして二十歳の自分へ宛てたメッセージを書いている。

(4) 具体的な手だて

「伝統的な言語文化に関する事項」に係る教材及び指導法の開発における具体的な手だて	
教材の開発	・児童が故事成語に興味・関心をもって取り組めるように、漫画で成り立ちや意味が表現された本を人数分、用意した。本には100近くの故事成語が掲載されている。また、児童向けのことわざや慣用句の図書を教室に置き、自由に手に取ったり、気に入った言葉のページに付箋を貼ったりすることができるようにした。 ・故事成語の意味を児童に正確に理解させるための例文を作成した。
指導法の開発	【単元構成の工夫】 ・二分の一成人式と関連付け、「座右の銘」としてことわざや慣用句、故事成語を学習する単元を構成した。まず、単元の導入において、二十歳の自分に宛てたメッセージ付きのことわざや慣用句、故事成語をまとめた言葉のアルバムの例を紹介し、児童の意欲喚起を図る。次に、自分のなりたい二十歳像に近づく上で必要なことわざや慣用句、故事成語の言葉を選ぶ活動を設定し、主体的な学びを促す。単元の終末には、自分が選んだことわざや慣用句、故事成語とその意味、選んだ理由を含めたメッセージを色画用紙による装丁で言葉のアルバムにまとめさせた。 【伝統的な言語文化の特徴を生かした言語活動】 ・言葉と意味や日常生活の具体的場面を結び付けたりするゲームを行う。自分の興味の有無に関係なく、多くの言葉を知ったり覚えたりする活動をゲーム形式で行うことによって、故事成語は難しくないことを児童に印象付けた。 ・気に入って選んだことわざや慣用句、故事成語の理由をメッセージに含めることによって、児童がその言葉の成り立ちや意味を正しく理解しているかを評価し、指導を行った。 ・ことわざや慣用句、故事成語の意味と用い方を自分の生活場面と関連付けることによって、よりふさわしい選択ができると考えた。また、言葉の用い方を楽しみながら正しく理解できるように、言葉と具体的な生活場面を組み合わせるゲーム活動を設定した。また、二十歳の自分に贈る言葉選びについては、自己の生活を振り返って適切な言葉を選ぶ活動を設定した。これは、選択基準が「こうありたい」と思い描く自分の二十歳像に必要な言葉かどうか、自分の長所や短所に合った言葉を選ぶことが重要である。 ・扱う故事成語は必ず数回音読させ、言葉に親しませた。

5 単元の指導計画（6時間扱い）

時	学習活動	◎研究主題に迫るための手だて ■評価規準（観点：評価方法）
1	○学習計画を知る。 ○自分を振り返り、好きなことや苦手なこと、長所・短所、こうありたい二十歳像について考える。 ○2分の1成人式の概略及び「座右の銘」の意味を知る。	◎2分の1成人式と関連付け、「座右の銘」としてことわざや慣用句、故事成語を学習することや「言葉のアルバム」へのまとめを知らせ、学習への見通しと意欲をもたせる。 ■二十歳の自分へ送りたい言葉を選ぶため、自己を深く振り返ろうとしている。（関心・意欲・態度：観察）
2	○ことわざや慣用句が用いられている場面を選んで意味を思い出すとともに、故事成語を知る。 ○故事成語を知り、その成り立ちや意味を調べる。「五十歩百歩」	◎ことわざや慣用句の意味に合う具体的な場面を選択する活動に取り組むことで、既習内容の振り返りと日常生活への活用の促しを図る。 ◎一人一冊、イラストが入った故事成語の書籍を用意し、音読を通して故事成語に親しませる。 ■故事成語を解説した文章を、その成り立ちや意味を理解しながら読んでいる。（読む能力：観察） ■ことわざ、慣用句の意味を正しく理解している。（言語についての知識・理解・技能：観察）
3	○複数の故事成語を読み、具体的な生活場面を考える。 「漁夫の利」「蛍雪の功」「杞憂」「蛇足」「矛盾」 ○故事成語の正しい意味を選び、日常生活の中で考える。	◎複数の故事成語意味を考え、日常生活の具体的な場面と結び付ける活動を通して、故事成語の意味と使い方を理解させる。 ■すすんで故事成語を調べ、用いられる場面を考えようとしている。（関心・意欲・態度：観察） ■故事成語の成り立ちや意味に適した具体的な場面について考えている。（読む能力：観察）
4 本時	○二十歳の自分に贈りたい故事成語を選び、その理由をメッセージとして下書きに書く。 ○第1時で行った振り返りを基に、一つだけ選ぶ。	◎第1時における自己の振り返りを基に、「こうありたい」という願いをもって故事成語を選ばせる。選んだ理由が言葉の意味の成り立ちや意味と合致しているかを評価し、指導する。 ■選んだ故事成語の理由を、二十歳の自分に贈りたい思いとして、自分の性格や経験と結び付けて書いている。（読む能力：観察）
5	○ことわざや慣用句の中から、二十歳の自分に贈りたい言葉を選んで理由を書く。 ○贈りたい言葉だけでなく、お気に入りの言葉も複数選ぶ。	◎第4時の故事成語の選択と同様に、自己の振り返りを基準に言葉を選ばせ、その理由をメッセージに書かせる。 ■選んだことわざ・慣用句について、贈りたい理由を自分に照らし合わせて明確に書いている。（書く能力：作品）
6	○選んだ言葉をアルバムにまとめ、友達と紹介し合う。 ○書いた文章の読み直しをする。	◎これまでの学習を振り返り、「言葉のアルバム」としてまとめることで、児童に学習への達成感を味わわせる。 ■選んだ故事成語やことわざ・慣用句をまとめ、友達と互いの作品のよさを伝えようとしている。（読む能力：観察）

6 本時の指導（第4時）

(1) 本時の目標

二十歳の自分に贈りたい故事成語を選び、自分の長所や短所を踏まえた目指したい二十歳像と結び付けて理由を下書きに書くことができる。

(2) 展開

	学習活動	◇指導上の留意点 ■評価規準 ◎研究主題に迫るための手だて
導入	1 前時までの学習を振り返り、本時のめあてを知る。	◇前時に行った故事成語の成り立ちや意味に適した具体的な場面例を複数提示する。
	二十歳の自分におくりたい故事成語に付けるメッセージを書こう	
展開	2 二十歳の自分へ願いを込めたメッセージとするために、故事成語を選ぶ観点を確認する。 3 「故事成語」を選ぶ。 4 選んだ理由をワークシートに書く。 (1) 見本を基に書き方を知る。 (2) 故事成語を選んで書く。 (3) 意味を書く。 (4) メッセージを書く。 5 選んだ故事成語とその理由を発表する。	◇選ぶ故事成語は一つとする。 ◇メッセージを書く上での観点を確認すること。 ◇選んだ理由を具体的に書く。 ・自分の短所と照らし合わせる。 ・10年後だけでなく、教訓としていつも意識していた言葉を選ぶ。 ◇未来の自分へ話しかけるように書く。 ◎第1時における自己の振り返りを基に、「こうありたい」という願いをもって故事成語を選ばせた。 選んだ理由が言葉の意味の成り立ちや意味と合致しているかを評価し、指導を行う。 ◇書いた文章を読み直すこと。 ■選んだ故事成語の理由を、二十歳の自分に贈りたい言葉として、自分の性格や経験と結び付けて書いている。 ◇似た意味の故事成語があれば書き加えるよう促す。 ◇自分の性格や経験について具体的なエピソードを思い出すように促す。 ◇書けない児童には、故事成語の意味と自分の長所や短所とに共通点や関連性があるかを一緒に考える。
まとめ	6 本時の学習を振り返る。	◇次時の学習を伝え、ことわざや慣用句の中から二十歳の自分に贈りたい言葉を複数選んでおくことを促す。

【児童の作品例】

○選んだ故事成語 「石に立つ矢」

○選んだ理由

10年後の自分は、どんなことをしているかな。今のわたしは、とても面倒くさがりで、やってもいないのに「絶対に、無理だ」などと言ってしまう。

10年後の自分には、この故事成語を思い出して、やる前に「無理」と言わずに、何事にもがんばってね、と言いたいからです。

1 単元名 「わたしのナンバーワン ～言葉の宝箱作り～」

教材名 短歌 近代詩 漢詩

2 単元の指導目標

- ・短歌、近代詩、漢詩から興味をもったものを選ぶことができる。
(国語への関心・意欲・態度)
- ・選んだ作品の気に入った理由を書くことでまとめることができる。(書くこと)
- ・選んだ作品を読み、書かれている内容の大体を読みとることができる。(読むこと)
- ・短歌、近代詩、漢詩の大体を理解することができる。(言語についての知識・理解・技能)

3 単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	書く能力	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
・短歌、近代詩、漢詩から興味をもったものを選ぼうとしている。	・選んだ作品の気に入った理由を書き、まとめている。	・選んだ作品を読み書かれている内容の大体を読みとっている。	・短歌、近代詩、漢詩の大体を理解している。 ・短歌のリズムや文語調の文章を理解している。

4 研究主題に迫るための手だて

(1) 単元について

児童の多くは、昔使われていた言葉、昔からある言葉、俳句、短歌を伝統的な言語文化と捉えている。その思いも踏まえ、近代詩や漢詩まで関心を広げられるように児童が読みたい作品を選択して授業を展開していくことを考えた。伝統的な言語文化の中から国語の学習に沿った中で題材を三つに絞ることで、さらに昔の人の見方や考え方を学ぶ上で効果的だと考えた。自分のお気に入りの作品を探し、勇気付けられたり、意欲をかき立てたりできるように宝箱を作って、卒業後も活用できるようにした。数ある作品から、自分に合った作品を選ぶことで学習への意欲と今後の生活の中で用いようとする態度が養われると考える。

(2) 教材について

児童が短歌、近代詩、漢詩から興味をもった題材の本を自ら準備し、教師側は、児童に扱いやすく関心をもてる作品をまとめた資料を準備した。

短歌・・・ 「短歌をつくろう」という単元に合わせ、児童が最も身近に感じられる短歌を取り上げた。

近代詩・・・「やまなし」のように宮沢賢治の作品に触れる学習もあり、近代詩に親しむ機会を取り上げた。

漢詩・・・ 漢詩のように中国という異国の言語文化に触れ、これまでと違った視点で作品に出合うことを取り上げた。

(3) 本単元において身に付けさせたい力及び目指す児童の姿

最終ゴールを言葉の宝箱作りに設定することで、過去の自分をふり返られるようにした。今の自分に見合った作品や心を惹かれた作品を選ぶことができる。また、自分に親しみがある作品を選ぶことで、これから出合う作品と比較できることも楽しみの一つであると考え。

本単元での「短歌、近代詩、漢詩に親しむ」という姿は、以下のように考えた。

- ・ 短歌、近代詩、漢詩の作品に興味を示し、すすんで読んでいる。
- ・ 作品の意味を知り、自分に照らし合わせて読んでいる。
- ・ 今の自分やこれからの自分に見合った作品を選んでいく。
- ・ 他の友達が選んだ作品の良さを知る。
- ・ 選んだ作品を自分と照らし合わせた明確な理由を書いている。

(4) 具体的な手だて

「伝統的な言語文化に関する事項」に係る教材及び指導法の開発における具体的な手だて	
教材の開発	・ 児童が短歌、近代詩、漢詩から興味をもった題材の本を自ら準備し、教師側は、児童に扱いやすく関心をもてる作品をまとめた資料を準備した。 ・ 昔の人のものの見方や考え方を知り、自分に照らし合わせることができるものとした。
指導法の開発	【単元構成の工夫】 ・ 短歌、近代詩、漢詩の作品に触れ、興味をもった題材を選び、選択型の学習を展開する。 ・ お気に入りナンバー1の作品をカードに書きまとめ宝物とする。 ・ 同じ題材を選んだグループで自分のお気に入りの作品を紹介していく。また、他の作品の良さや友達の考えを知り、新たに自分の考えを深めていくようにする。 ・ お気に入りの作品が、常に自分の近くにあり、自分たちの生活や生き方に反映されるものとして残る。また、新しい作品との出会いにおいて、いつでも比較できるものとして興味・関心を高められるようにする 【伝統的な言語文化の特徴を生かした言語活動】 ・ 教材との出会いは、選択式にして作品との出会いの幅を広げる。 ・ 作品の内容を知り、昔の人のものの見方や考え方と自分を照らし合わせられるものとする。 ・ 音読で古典の作品を読み、声に出すことで親しみをもてるようにする。

5 単元の指導計画（5時間扱い）

時	学習活動	◎研究主題に迫るための手だて ■評価規準（観点：評価方法）
1	○短歌、近代詩、漢詩の大体を知り、興味をもった題材から作品を選び、気に入ったところを書く。 ○短歌、近代詩、漢詩について知る。 ○選んだ作品の気に入った理由を書く。	◎短歌、近代詩、漢詩の大体を知り、今と違う表現方法や内容の面白さに気付くように促す。 ■短歌、近代史、漢詩から、興味をもったものを選び、作品の面白さに触れようとしている。（関心・意欲・態度：観察） ■選んだ作品の内容の大体を理解している。（読む能力：観察）
2 本 時	○同じ題材でグループをつくり、お気に入りの作品を選ぶ。 ○持ち寄った資料から気に入った作品を選ぶ。 ○付箋に理由を書いて貼る。 ○自分と照らし合わせて見合った作品を選び、気に入った理由を書く。	◎短歌、近代詩、漢詩の中から題材を選択し、作品に向き合う時間を設定した。 ◎自分に合っているものや心に残った理由を書くことで作品に親しみをもたせる。 ◎選んだ作品を声に出し、理由を発表する。 ■選んだ作品の気に入った理由を自分の体験と結び付けて付箋に書いている。（書く能力：作品）
3	○短歌、近代詩、漢詩の中からナンバー1の作品を探し、カードに書き、交流をする。 ○選んだ作品の理由を分かりやすく発表する。	◎今の自分やこれからの自分への励ましの作品と向き合うことで主体性をもって取り組む活動となる。 ■作品の文章と作品の良さ、どのように自分と照らし合わせたかをカードに書いている。（関心・意欲・態度：観察）
4	○選択したもの以外のグループで交流する。カードに書く。 ○他の題材の発表を聞いて自分の考えを深める。	◎たくさんの短歌、近代詩、漢詩に触れ、他の作品の良さを知り、これから出合いを図る。 ■短歌、近代史、漢詩から、興味をもったものを選び、作品の面白さに触れようとしている。（読む能力：観察）
5	○気に入った作品をまとめ、宝箱をつくる。 ○選んだ作品を見返す。	◎宝箱として作品を残すことにより達成感をもたせる。 ■選んだ作品を言葉の宝箱にして、作品のよさに触れて書いている。（書く能力：作品）

6 本時の指導（第2時）

(1) 本時の目標

短歌、近代詩、漢詩の中から気に入った作品を探して、カードに書くことができる。

(2) 展開

	学習活動	◇指導上の留意点 ■評価規準 ◎研究主題に迫るための手だて
導入	1 前時作ったカードを振り返る。 2 本時のめあてを知る。	◇前時に行った故事成語の成り立ちや意味に適した具体的な場面例を複数提示する。 ◎短歌、近代詩、漢詩により親しみをもたせるために選択式の学習展開を設定した。複数の作品から自分に見合ったものを選ぶようにさせる。
	お気に入りの作品を探そう	
展開	3 二十歳の自分へ願いを込めたメッセージとするために、故事成語を選ぶ観点を確認する。 4 気に入った作品を選び、付箋に理由を書く。 ・大体の意味を知りながら探す。 ・作品を声に出す。 ・理由を書く。 5 交流する。 ・選んだ作品と選んだ理由を明確にして述べる。	◇自分が持ち寄った資料から作品を探し、付箋に理由を書いて貼ること。 ◇自分に見合った作品を選ばせる。 ◇自分と照らし合わせた書き方をし、理由を分かりやすくすること。 ◎選んだ理由を具体的に書く。 ・自分に合っている理由 ・心に残った理由 ◇自分と照らし合わせた書き方になるように促す。 ・体験 ・今の自分 ・これからの自分 ■選んだ作品を気に入った理由を自分の体験と結び付けて付箋に書いている。 ◇他の作品にも目を向け、同じように自分に合ったものがあれば書くように促す。 ◇自分が体験したことや今の自分、これからの自分に励ますものとして書くように促す。 ◇理由が書けない児童には、選んだ作品の視写をさせ、印象に残った言葉や文章を書き出すように促す。 ◇作品がどのように自分に照らし合わされているか明確に伝えること。
まとめ	6 次時の予告	◇選んだ作品からナンバー1を見つけ、カードに書く。もう一度、作品を読んでおくように促す。

【作品例】

漢詩 偶成

- 昔の人達は、時間をとても大切にしていたことが分かり、きちんと勉強しないといけないということがこの作品から伝わってきた。私は、一日一日を大切に、日々の取組をがんばりたいと思う。

短歌 源実朝

（箱根路を わが越えくれば 伊豆の海や 沖の小島に 波のよるみゆ）

- 将来、忙しくなったり、疲れたりしたときは、この作品を思い出して、景色のいい所に行き、自然に触れる感動を味わいたいと思った。

近代詩 道程

- 私も日々努力し、自信をもって生きていけるようにしたい。そのために、この作品を思い出して、がんばろうという気持ちを持ちたい。

本研究開発委員会の研究内容の「教材の開発」と「指導法の開発」の二つの観点から、成果と課題を以下のように示した。

1 教材の開発

【成果】①学習指導要領の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」ア伝統的な言語文化に関する事項に示された指導事項により、低・中・高学年の児童の発達の段階に即し、国語科の授業で取り上げるのにふさわしい古典作品を用いて教材の開発を行ったこと。

②単元構成を工夫し、授業実践を通して検証を行った結果、児童がこれまで触れた経験のない伝統的言語文化に親しむ姿が見られたこと。

【課題】現在、教科用図書で古典教材として取り上げられることの多い、平安時代の枕草子などの作品だけでなく、より現代語に近いといえる室町、江戸時代の古典作品についても教材化するにふさわしい作品があり、教材化の余地がまだ多く残されていること。

2 指導法の開発

【成果】学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」には、「各学年で行い、古典に親しめるよう配慮すること」とある。その配慮について、研究開発を通して次のような成果を得た。

- ・古典との出合わせ方を工夫すること。
- ・複数の教材を読み比べること。
- ・音読・暗唱などを通じて繰り返し教材に触れさせること。
- ・好きなところ、感じたこと、考えたことを友達と交流すること。

これらのことが、伝統的な言語文化を扱う際の指導法として効果的であることが、明らかにできた。

【課題】①指導のねらいを実現するために、効果的な言語活動を位置付けた単元の開発をさらに行うこと。その評価の工夫についても検討を進めること。

②伝統的な言語文化の学習において、特に小学校高学年と中学校との接続について、小中双方でさらに情報を共有し、効果的な学習とすること。

教材の開発を行い、当該学年の学習にふさわしい単元構成にし、指導法にも工夫を加えて学習を展開することにより、叙述されている言葉を味わい、児童は作品世界に浸るようになった。その学習を通して、昔の人のものの見方や感じ方、さらに考え方に思いをもち、伝統的な言語文化に親しむ姿を示している。

また、さらに、我が国の長い歴史の中で、創造され継承されてきた伝統的な言語文化を今後も身近なものとし生涯にわたって親しんでいく態度、さらに継承されてきた言語文化を受け継ぎ、発展させる態度を養うためにも、授業の中だけではなく、季節に合わせた文語調の詩の掲示や暗唱、学校全体での週1回の百人一首タイムや百人一首大会等、児童が楽しみながら親しむことができるよう日常的な言語環境の工夫と整備が今後もさらに望まれる。

＜小学校社会研究開発委員会＞

研究主題

「資料を読み取り、社会的事象の意味を考える指導法の工夫」

研究の概要

学習の目的に応じて、資料を適切に選択し、その資料を効果的に活用することは社会生活についての理解を図る上で不可欠な能力である。しかし、東京都教育委員会が実施している「児童・生徒の学力向上を図るための調査」では、「必要な情報を正確に取り出す能力」や「情報を比較・関連付けて読み取る能力」に対する課題が指摘されている。これら読み取る力を高めることのできる児童を育てる指導法を工夫することが、今日早急に求められている。

そこで、本委員会では「資料を読み取り、社会的事象の意味を考える指導法の工夫」を主題として掲げ、資料を活用し、必要な情報を集めて読み取り社会的事象の意味を考えるための指導法、様々な資料を比較したり関連付けたりして共通点や相違点に着目させたり、結び付けたりして具体的に考えさせるための指導法の開発に取り組んだ。

そして、学習の目的を明確にし、資料を適切に選択できる能力を身に付けさせるという観点から次のような工夫を行った。

- ・ 資料が表すものについて、その全体の傾向と共に細部の変化を正確に読み取らせるための手順を明確にする。
- ・ 資料を読み取る理由や根拠を明確にしながら読み取らせる。
- ・ 読み取りが難しい文書資料等を、児童が理解できるように簡単にして提示する。

I 研究の目的

社会科において目的を明確にして、資料を適切に選択し活用できる能力を意図的・計画的に高めることを通して、社会的事象の意味をより適切に考え、自分の考えを適切に表現できるようにする。特に本年度は、かねてから指導上困難を伴うことが指摘されている地図資料と文書資料を読み取る力を中心に研究を進めた。

II 研究仮説

目的を明確にして、資料を適切に選択し活用できる能力を意図的・計画的に高めていけば、社会的事象の意味を考え、適切に表現できる。

III 研究の方法

- ・ 社会科で扱う資料の種類と育てたい能力を明確にする。
- ・ 資料を適切に選択し活用できるための指導法を開発する。
- ・ 資料を読み取りやすくすることにより、社会的事象の意味をより適切に理解できるようにする指導法を開発する。

IV 研究の内容

1 社会科で扱う資料の種類と育てたい能力

社会科では、資料活用能力は学習の中心となるものである。読み取り方が正しくないとその後の理由や根拠について考える学習へつながらない。主な資料には次のような物がある。

- ・ 文書資料 図書 パンフレット 新聞 インタビュー資料 ふきだし
- ・ 絵図資料 絵 絵図 イラスト 地図 年表
- ・ 統計資料 統計 グラフ
- ・ 映像資料 写真 映像 音声
- ・ 実物資料 ジオラマ 模型 実物 人物

ここで育てたい能力は次の3点である。

- ・ 指導のねらいに即し、必要な情報を正確に取り出す力
- ・ 情報を比較したり、関連付けたりしながら考える力
- ・ 資料を基に考えた社会的事象の意味について、言語等で表現できる力

このような能力を問題解決的な学習を通して育てなければならない。

今回は、様々な資料の中から、地図資料（地図帳、地球儀等も含む）と文書資料（インタビュー記事等も含む）を中心に読み取る力を高めるために効果的な指導法について工夫した。

2 地図資料を読み取る指導法

社会科の指導において地図は大切であるが、きめ細かな指導が十分にできていない場合もある。地図には、読図と描図の指導があるが、ここでは読図の指導を中心に、次のような指導法を工夫した。

① 題名・方位・縮尺・地図記号・出典・作成年度・図の特徴等、基礎的・基本的な事項について捉えさせる

地図は児童に自分が空から見ているようなイメージをもたせるものである。従って、方位（どの方向から見たものか）や、縮尺（どの範囲のものか）は、特に大切である。また世界地図になると球形のものを平面で表現させるために、特に地図の特徴をつかまないと現実とかい離する結果となる。

② 着色・囲みなどをして読み取らせたい部分を鮮明にさせる

読み取らせたいものは何か、そのためにはどのように地図を加工したり提示したりすると、より分かりやすいか工夫することが大切である。

③ 全体の傾向を捉えさせる

ペリーの来訪経路の図など、時間によって変化していくことを表した地図などは、時間の経緯としての変化も読み取らせる必要がある。



[ペリーの来訪経路をたどる]

④ 他の地域や自分の住んでいる地域などと比較・考察させる

比較することで、相違点や共通点が明確になり地図を読み取る力が深まる。

⑤ 違いがある理由や、類似しているわけなど、社会的事象の意味を考え表現させる

これまでの学習や自分の体験や友達の考えなども参考にしながら考えを深めさせることが大切である。

3 文書資料を読み取る指導法

文書資料の読み取りは、漢字や用語の習得、文章の読解力などに課題がある児童にとっては難しいものである。そこで、国語科との連携も図りながら、次のような指導を工夫した。

① 題名・出典・5W1H（いつ・どこで・誰が・何を・なぜ・どのように）について捉えさせる

立場や時代などの社会的条件が違うと、文書資料の内容が正しく捉えられないことがあるのでこれらのことに留意する必要がある。

② 必要に応じて教師が資料を音読する

文章の読解力が十分ではないために、文章資料をスムーズに読めなかったり、友達が読んだ文書資料の意味が分からなかったりする児童もいる。このような場合は、教師が読んで聞かせて社会的事象の意味について考えさせることも大切である。

③ 難しい用語の意味を辞書・事典などで調べさせる

用語を正しく理解することができていないと、社会的事象の意味や概念を正しく捉えることができない。指導者が事前に、習っていない漢字に振り仮名を振り、難しい用語や文書資料を事前に優しく書き直して児童に提示することも大切である。

④ 社会的事象をとらえさせる上で大切な個所に線を引いたり印をつけたり、キーワードを抜き出したりさせる

印を付ける視点を明確に指示することが大切である。児童は、キーワードではなく文章全体に印をつけたり線を引いたりする傾向がある。まず、文章の中から大切な個所に線を引かせる。次に、特に大切な部分を考えさせ、その中のキーワードを選び出せるようにするなど段階的に指導を進める。

⑤ ねらいに即して社会的事象について考えたことを書かせる

単なる思い付きではなく、ねらいに即して考えさせる。自分のこれまでの体験や学習してきたことも生かして考えさせることが大切である。

⑥ 社会的事象の意味を考えさせる

これまでの学習や他の資料と比較や関連させながら、社会的事象の意味について考え表現させる。考えた理由や根拠を明確に表現させる。

また、他の児童の考えについて、話し合い活動などを通して知ること、考えをより深めることも大切である。



[大切な所に線を引き友達と話し合う]

4 指導事例 1 文章資料の指導の工夫

ー第5学年 小单元名 情報ネットワークをいかすー

(1) 小单元の目標

情報ネットワークを有効に活用して公共サービスの向上に努めている医療、防災、福祉、教育などから、情報化した社会の様子について調べ、それらの働きが人々の生活を向上させるために利用され、国民の生活にも様々な影響を及ぼしていることを捉える。

(2) 小单元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
・携帯電話の普及や情報ネットワークなどを通して情報化した社会の様子と国民生活との関わりに関心をもち、意欲的に調べている ・社会の情報化の進展に関心をもち、情報を有効に活用しようとしている。	・情報化した社会と国民生活との関わりについて学習問題や予想、学習計画を考え表現している。 ・情報化した社会の様子と国民生活とを関連付け、情報化の進展は国民生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考え、適切に表現している。	・資料やインターネットを活用したり、聞き取り調査をしたりして、我が国の情報化した社会の様子について必要な情報を集め、読み取っている。 ・人々の情報の入手や活用について、調査したり資料を活用したりして調べ、分かったことを絵や文章などに分かりやすく表現している。	・情報化した社会の様子と国民生活との関わりを理解している。 ・情報化の進展は国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを理解している。

(3) 小单元について

ア 教材について（本小单元の学習指導要領上の位置付け）

本小单元は、第5学年の内容（4）イを基に設定したものである。

2 内容

- (4) 我が国の情報産業や情報化した社会の様子について、次のことを調査したり資料を活用したりして調べ、情報化の進展は国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考えるようにしている。

イ 情報化した社会の様子と国民生活との関わり

イ 育てたい児童の姿

児童に以下のことを理解させることを意図した。

- ・ 情報化した社会の様子と国民生活との関わり
- ・ 情報化の進展は国民の生活に大きな影響を及ぼしていること

本小單元では、「通信技術の発達と高度化、情報端末の普及により、情報のやり取りが大量・高速・広域化し、教育、福祉、医療、防災などの場面で、大きな変化が見られること。さらにこれらの情報ネットワークを有効に活用しながら生活する必要があること」について理解させる。

「つかむ」段階では、東日本大震災において、ほとんど必要な情報が得られなかったという事実を知らせた。情報の発信元となる地方自治体が打撃を受け、情報ネットワークは活用することがほとんどできなかった。そして、自分が住んでいる身近な地域の防災情報ネットワークはどうなっているのか、どのように情報が届けられるのかに関心をもたせるようにした。

「調べる」段階では、日野市防災情報課のパンフレットと日野市や総務省のホームページを基に、関係図にまとめさせた。関係図やインタビュー資料を基にして、情報を発信する人やネットワークの構築に関わっている立場の人に着目させた。情報は「ニーズに応じて」、「瞬時」に「広い範囲」で「正確」に「双方向」に送受信できるネットワークによって届けられるようになってきていることを確認させた。

以上の学習を通して、情報ネットワークの役割等について気が付くことができるようにした。

「まとめる」段階では、情報化した社会の様子と国民生活との関わりについて考えさせた。情報ネットワークの向上によって、公共サービスが発展し、私たちの暮らしの向上につながっていることに気付かせた。デジタル情報を受信できない人にも情報が伝わるために、我々はどうすればよいかを考えさせた。ネットワークを構築するのは人であることや普段からの挨拶など、人と人との関係が重要であること等をゲストティーチャーから話していただき、情報化した社会におけるよりよい社会の在り方について考えさせた。

ウ 児童の実態

研究当初に、インタビュー資料について指導し始めたころは、大切な所に下線を引くように指示したところ、多くの児童は、全て大切であると考え、ほとんどの文章に線を引いてしまう状態であった。（以下、「自動車工場で働く人のインタビュー資料」参照）

「自動車工場で働く人のインタビュー資料」 （下線部はキーワード）

ラインで作業するAさんの話（例）

部品を取り付ける作業のおよそ80%は、人が行います。15人ぐらいのチームごとに作業します。一人が受け持つのは幅5メートルほどで、取り付ける部品の種類や数は、一台ごとにちがうので大変です。台車を使うと、こしを曲げず、歩かずに済みます。

速く、正確に、体に無理なく作業できるよう、チームのみんなと話し合いながら工夫しています。例えば、今度取り付ける部品がすぐわかるようにランプがつくようにしたり、むだな動きがないように部品の台車も一緒に動くようにしたりしています。こうして自分たちが組み立てた自動車がまちを走っているのを見かけるとうれしくなります。

前述のように資料の読み取りの指導を行ったことで、ねらいに則して大切なキーワードに線を引くことができるようになってきている。また、大切だと考えた理由を述べたり、どんな資料と関連付けられるかを考えたりすることもできるようになってきている。

(4) 研究の内容

社会科における資料には、様々な種類がある。その中でも、指導が難しい「インタビュー資料」の指導について研究を進める。研究の内容としては次の2点である。

- ・ インタビュー資料◆の作成時の工夫
- ・ 作成したインタビュー資料の指導の工夫

◆「インタビュー資料」とは、実際に人々が話した内容を主旨を変えずに加工した文書資料のことを言う。

ア インタビュー資料作成の工夫

資料は、日野市防災情報課の方のインタビューを基に作成した。インタビュー資料作成に当たっては、以下の手立てを用いて、児童が資料を確実に読み取ることができるようにした。資料の読み取りを効率的に行い、児童が考える時間を増やした。

- ・ 難解な用語を避け、文字数を可能な限り少なくした資料を作成する。
- ・ キーワードは、インタビュー資料中に3点までとする。
- ・ 児童が意味や理由、根拠を考えられるように「様子や仕組み」を伝える文章とする。
(意味や理由等について、児童が資料から考えることができるようにする。)

イ インタビュー資料の指導の工夫

授業者が作成したインタビュー資料（下線部はキーワード）

日野市防災情報センターのAさんのお話

防災情報センターは、日野市民（18万人）へ防災情報や災害情報を配信する所です。

この防災情報センターからの配信方法は、携帯メール配信・携帯会社に災害メールをお願いする・日野ケーブルテレビ・ラジオ放送・市内119か所に設置してあるスピーカー・広報車など様々な手段を使います。

また市内全ての小学校や中学校、市民体育館、消防署等様々な施設と、センターは、24時間電源が切られることなく、つながっています。

それぞれの施設では、パソコンや無線機、電話を備え、災害情報をセンターから受信することやセンターへ送信することができます。

このようにして、日野市民の方へ防災情報や災害情報を届けるようにしています。

教科書に掲載されているインタビュー資料を以下の4点に分類した。

- ☐ ア 働く人が社会的事象の仕組みを説明する文章。
- ☐ イ 働く人が仕事上の工夫や努力、課題を克服する営みを説明する文章。
- ☐ ウ 働く人が仕事上の悩みや課題、やりがいを説明する文章。
- ☐ エ 受益者が社会的事象の良さや効果を述べる文章。

これらを組み合わせて作成している資料もある。また、当事者の工夫や努力のみが掲載されているわけではない。4点に分類したものと指導との関連を表にまとめ整理すると、以下のようになる。

資料の種類	読み取れること	考えられること
ア 働く人が社会事象の仕組みを説明する文章	・社会的事象の様子	・様子と結果のつながり ・因果関係
イ 働く人が仕事上の工夫や努力、課題を克服する営みを説明する文章	・工夫や努力 ・仕事の課題	・工夫や努力を行う理由 ・関係性
ウ 働く人が仕事上の問題点や課題を説明する文章	・課題や問題点 ・悩み ・やりがい	・問題点の解決方法 ・社会参画に向けての関心・意欲・態度
エ 受益者が社会的事象の良さや効果、さらなる願いを述べる場合	・消費者、受益者側のニーズ ・事象の効果	・社会的事象の意味。 ・今後目指す社会について考え、社会参画への関心や態度

授業では、以下の順序で指導を行った。

- ① インタビュー資料を読む前に、学習問題を基にして、解決に向けた必要な情報について予想する。
- ② 資料の中で、社会的事象の意味について考える上で必要な情報だと思うキーワードを3つ書き出す（線を引く）ように指示をする。
- ③ 意味が分からない言葉がないか確認する。
- ④ キーワードを決めた理由や根拠をノートに書く。
- ⑤ 班で理由や根拠を述べ合う。自分のノートに友達のよい考えを加筆する。
- ⑥ 社会的事象の意味を考える上での、理由や根拠を他の資料や自分の経験と関係付けることができるか考える。
- ⑦ 班で出た意見をクラス全体に発表する。
- ⑧ 分かったことを学習問題に沿ってまとめる。

(5) 小単元の指導計画 （8時間扱い）

時数	ねらい	児童の活動 (○児童の学習活動・児童の反応、内容)	教師の指導等 (○指導、留意点 □教材 ◇評価)
1 2 つ か む	私たちの生活と情報との関わりについて関心をもつ。	○生活の中には、インターネットや電子メールによる情報があふれていることを知り、その情報をどのように私たちが活用しているのか話し合う。 ○情報機器の発展で情報の伝わり方は、電話や新聞と比べどう変化したのだろう。 ・速く多くの人に同時に伝わる。 ・双方向でやり取りができる。	◇生活の中で深い関わりがある情報の役割について興味・関心をもち、調べる意欲をもつことができたか。 〈関意態〉 □インターネット利用者数・普及率

	震災時に必要な情報について考え、学習問題を見い出す。	○東日本大震災において、情報がどのように届けられたか（届けられなかったか）を知る。 ○震災時に必要な情報について考える。 ・自分たちの住んでいる日野市は、どのようなになっているのだろうか。	◇マスメディアを通して情報化した社会と国民生活との関わりについて学習問題や予想、学習計画を考え表現している。〈思判表〉
	東京都や日野市から災害情報は、どのように私たちの所へ届けられているのだろうか。		
3 4 5 調べる (本時：5)	自分たちの身近な地域の防災ネットワークについて調べる。 関係図にまとめる。	○日野市防災情報ホームページやパンフレットを通して、どのように自分たちの所へ災害情報が伝わってくるかを調べる。 ○防災情報ネットワークを関係図にまとめる活動を通して、気付いたことを発表する。	◇資料を効果的に活用して調べ、情報ネットワークがこれまで困難であったことを可能にしていることを読み取っている。 〈技能〉
	情報ネットワークの取り組み方について考え、ネットワークを構築している方の話から、情報を伝える立場の人の工夫について理解する。 〈本時〉	○情報ネットワークを構築し、発信する立場の方の工夫を予想する。 ○災害情報課のBさんの話より、情報をどのように届けようとしているのかを読み取り、どのような工夫をしているのか考える。 ○学習問題に対するまとめを書く。	◇情報ネットワークを構築している人の話から情報をどのように届けているのか、どのような工夫をしているのか考え、発表している。 〈思判表〉 □災害情報課の方へインタビューした文章資料
6 7 8 ま と め る	情報ネットワークの課題について考える。 情報と自分との関わりについて振り返り、これからの活用の仕方や地域防災について考える。	○なぜ災害情報ネットワークの加入率が低い（10%）のか考える。 ○防災情報課のCさんの話を読み、情報と自分との関わりについて考える。 ○情報ネットワークの活用について班で話し合う。 ○発表の原稿を作成する。 ○市の防災情報課の課長さん（ゲストティーチャー）に発表を聞いてもらう。 ○課長さんから情報ネットワークを生かした社会についての話を聞く。	◇情報ネットワークは私たちの生活にどのように役立っているかを考え、情報ネットワークの活用により、私たちの生活が守られていることを発表している。 〈思判表〉 □ネットワーク加入率 ◇情報産業の発展や社会の情報化の進展に関心をもち、情報を有効に活用しようとしている。〈関意態〉

(6) 本時の指導（5/8時間）

ア 目標 情報ネットワークに取り組み方について考え、ネットワークを構築している方の話から、情報を伝える立場の人の工夫について理解する。

イ 展開

過程	児童の活動 (○児童の学習活動・児童の反応、内容)	教師の指導・支援 (○指導、留意点 □教材 ◇評価)
つかむ	防災情報センターは、私たちに情報を届けるために、どのような工夫をしているのだろうか。 ○情報を配信する立場の人は、どのようなことに気を付けているのか、関係図をもとに予想し、発表する。 ・色々な手段で伝えたい。	○情報を配信する立場の人について予想を考えさせ、発表させる。 □前時までに作成したネットワーク図
調べる	○防災情報センターで働く A さんの話を読み、キーワードを考える。 ・様々な手段 ・24 時間つながっている。 ・送信や受信をしている。 ○キーワードとした理由について班で意見を話し合い、発表する。 ・様々な手段だと停電の時でも大丈夫。 ・ネットワークを組むと一つがだめでも他からつながる。 ・外にいてもどこでもつながる。 ・様々な手段を用いて情報を届ける ・速く正確に多くの人に伝えたい。 ・携帯電話がなくても大丈夫。 ○班で、本時の課題に対しての考えをまとめる。 ○学級全体で、各班の意見を加筆修正し、さらに意見を発表する。	□防災情報センターで働く A さんのインタビュー資料 ○資料を読み聞かせる。 ① インタビュー資料を読む前に、学習問題を解決するために必要な情報を考える。 ② 資料の中で大切だと思うキーワードを三つ書き出す(線を引く)ように指示をする。 ③ 資料を教師が範読する。意味の分からない言葉がないか確認する。 ④ キーワードを決めた理由や根拠をノートに書く。 ⑤ 班で理由や根拠を発表し合う。自分のノートに友達のよい考えを加筆する。 ⑥ 理由や根拠を他の資料や自分の経験と関係付けることができるか考える。 ⑦ 班で出た意見をクラス全体に発表する。 ⑧ 分かったことを学習問題に沿ってまとめる。 ○各班から出てきた意見に対して、補助発問を行う。
まとめる	○小単元の学習問題を振り返り、学習問題に対する考えを書く。 ・このような工夫をして、少しでも速く様々な人に、情報を伝えようとしているから、安全が守られている。	○小単元の学習問題を振り返らせる。 ◇情報ネットワークを構築している人の話から、情報をどのように届けているのか、どのような工夫をしているのかを考えている。〈思判表〉

(7) 研究の考察

ア インタビュー資料作成時の工夫について

(7) 成果

- ① 難解な用語を使わず、児童の発達段階に応じた適切な資料を作成したことで、児童が資料を適切に読み取り、社会的事象の意味について考えることができた。

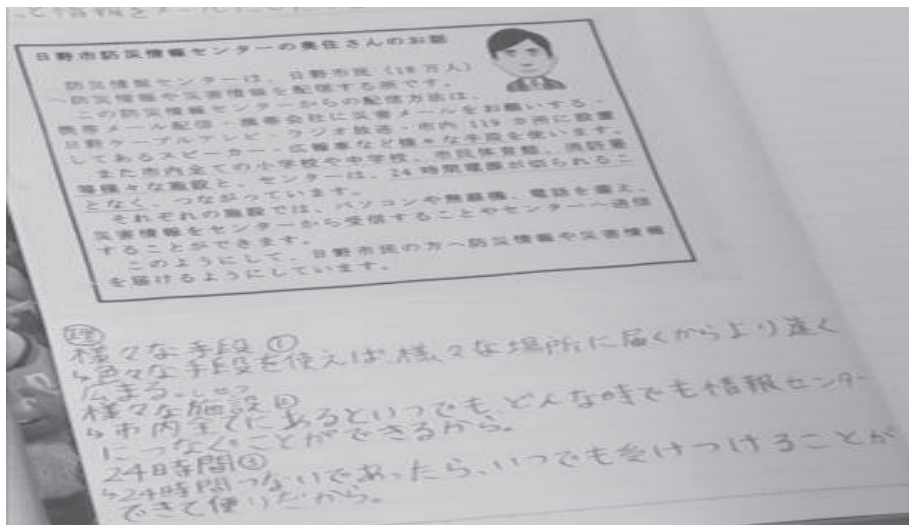
以前は、情報量の大変多いインタビュー資料を作成し使用していた。しかし情報量が多く読むことに時間がかかるため、キーワードを読み取ることが難しかった。そこで、文字数を必要不可欠なものに厳選することで、読みやすい資料を作成することができた。

- ② キーワードを、三つにしたことで確実に読み取ることができた。

文章については、意図的に段落構成を三つとした。各段落に一つのキーワードを入れるようにした。このことによって、多くの児童は、資料のもつ社会的意味や、資料に現れた人の姿、思いや願いなどを的確に読み取ることができていた。

() は事前に設定したキーワードを書き出した児童の割合である。

- ・ 様々な手段 (95%)
- ・ 24 時間つながっている。 (95%)
- ・ 送信や受信をしている。 (80%)



- ③ 「様子や仕組み」を掲載したことによって、児童が理由や根拠を考えることができた。

児童が社会的事象の意味を考えることができるように、インタビューした内容を厳選し、資料を作成した。授業では、ノートに、次のように書かれていた。

- ・ 様々な手段→どこにいても多くの人へ、速く伝えることができる。
- ・ 受信送信→一つの情報がより速く、センターから家へつながる。
- ・ 24 時間つながる→電源を切ったら大変。いつ災害が発生するか分からないから。

これらのことから、キーワードを基に社会的事象の背景や根拠、意味を考えることができた。

(イ) 課題

資料の読み取り方が十分ではなく、社会的事象の意味を考える上で重要なキーワードを書き出すことができていない児童もいた。今後も資料から大切なポイントを読み取ることができるよう指導していく。

イ インタビュー資料、指導時の工夫について

(7) 成果

- ① インタビュー指導の手順を明確にすることで、児童が理由、根拠を考えることができた。

インタビュー指導の手順を明確にすることで、資料の中で大切な言葉に着目し、下線を引くことができるようになった。さらに、「下線を引いた理由や根拠は何か。」、「なぜ大事だと思ったのか。」と発問し、話し合う場面を設定した。これらのことによって、児童は、社会事象の原因や背景、因果関係を考えることができるようになった。

今後も、キーワードを決めた理由や根拠を考えさせ、他の資料や自分の経験と関係付けることに留意し、指導していく。また、今回提案した指導の手順について、多くの事例研究を行い、検証していく。



(イ) 課題

- ① 提案した指導法について。

「4 なぜキーワードとしたか理由や根拠をノートに書く。」と「5 班で理由や根拠を述べ合う。自分のノートにより考えを加筆する」の順序について、キーワードを全体で確認した後、「なぜこのような工夫や努力をするのか。」を問い直す方法もある。どちらがよいのか今後さらに検証していく。

- ② 「7 班で出た意見をクラスへ発表する。」の指導法について

「キーワードをもとに、課題に対する答えをまとめましょう。」という発問では、キーワードをつなげるだけになることが多かった。検証授業では、六つの班のうち、三つの班がキーワードをつなげただけの文章であった。話し合ったことを発表させる場面では、なぜキーワードとして選択したのか、を発表させるとよかった。また、このような指導法は中学年においても有効か、検証する必要がある。

5 指導事例2 地図資料と文章資料など他の資料を組み合わせた場合の指導法の工夫

—第6学年 小单元名 開国が日本にもたらしたもの—

(1) 小单元の目標

ペリーの来航と開国、明治維新、文明開化などについて調べ、廃藩置県や四民平等などの諸改革を行い、欧米の文化を取り入れて日本の近代化が進められたことが分かる。

(2) 小单元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
・黒船来航をきっかけにして起きた倒幕運動、明治維新、文明開化などの歴史上の主な出来事やそこで活躍した人々に関心をもち、意欲的に調べようとしている。	・開国から、近代国家を目指した日本の急激な変化について、問題意識をもって追究している。 ・黒船来航、倒幕運動、明治政府の諸改革、文明開化等について考え、表現している。	・教科書や資料集などを活用して、黒船来航、倒幕運動、明治維新と諸改革、人々の暮らしの変化などについて調べ、その結果をまとめている。	・黒船来航をきっかけとして倒幕運動、幕府崩壊、明治維新へと動いていったことや、明治政府が諸改革を行い、近代化を進めたことが分かっている。

(3) 小单元について

ア 教材について（本小单元の学習指導要領上の位置付け）

本小单元は、第6学年の内容（1）キを基に設定したものである。

2 内容
(1) 我が国の歴史上の主な事象について、人物の働きや代表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財、資料などを活用して調べ、歴史を学ぶ意味を考えるようにするとともに、自分たちの生活の歴史的背景、我が国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深めるようにする。 キ 黒船の来航、明治維新、文明開化などについて調べ、廃藩置県や四民平等などの諸改革を行い、欧米の文化を取り入れつつ近代化を進めたことが分かること

イ 育てたい児童の姿

単元の最初に江戸時代の日本橋と明治時代の日本橋の絵を比較させ、わずかな期間で西欧諸国に追いつこうとしていたことを捉えさせ、単元全体の課題として「明治政府はなぜ短い期間で西欧諸国に追いつこうとしたのか」について考えさせた。児童からは、「西欧諸国に支配されると思ったのではないか」「他の国の方が進んでいると思ったから急いだのではないか」という意見が出た。

この後、「アメリカのペリーをはじめ西欧諸国について当時の人々はどのように思っていたのか」といったことについてまずペリーの肖像画を用いて考えた。児童からは「ペリーを恐れていた」といった考えが出た。その後、ペリー来航によってどのような条約が結ばれたのか（日米和親条約、日米修好通商条約）について調べた。

しかし、「どのような条約を結んだか」を調べるだけでは、「なぜそのような条約を結んだのか」という理由が分からない。また、「不平等条約」と言われているが、その

中でも日本側は国益を守るために様々な交渉をしていたことも分からない。そこで、アメリカとの不平等条約を確かめた後、ペリー来航の意図と日本側が国を守るためにどのようなことを行ったか、ペリー来航図と日米和親条約を基に考えた。

その後、江戸幕府が倒れ、明治維新にいたるまでの出来事について攘夷派・開国派それぞれに活動した人物について調べた。そして「西欧諸国に追いつくために具体的にどのようなことを行っていたのか」といったことから明治政府の取組と人々の生活の変化を追うことで「武士階級を中心として諸改革を行い、近代的な政治や社会の仕組みを整えた」ことを理解できるよう指導する。

ウ 児童の実態

平成 24 年度の東京都の「児童・生徒の学力向上を図るための調査」によると、「意図や背景、理由を理解・解釈・推論して解決する力」、平成 23 年度の調査によると、「必要な情報を正確に取り出す力」に課題があることが報告された。そこで、どのような資料を読み取る時に課題があるかを分析した。

- ・ 地図の読み取りが十分にできていない。等高線は比較的理解できているが、地図記号、方位、都道府県の名称・位置・特色が理解できていない。
- ・ 二つの資料を組み合わせる問いでは、正答率が 70%を切ることが多い。特に地図と文章資料の組み合わせでは、正答率が 50%を切っている。
- ・ 資料の数が三つ以上になると、極端に正答率が下がる。このことから、児童が思考する際に使用できる資料の数は三つ未満が適切ではないかと考える。
- ・ 二つ以上の資料を提示しても、図式化されたものから選択する場合は視覚的に分かりやすいため、個別に支援を必要とする児童も比較的読み取りやすい。

これらの中で特に課題と思われるのが地図の読み取りと、資料を二つ以上組み合わせて読み取ることである。これは地図記号・方位・都道府県名など地図に関する基礎的な知識が習得されていないため、地図全体の分布や土地の特徴を読み取るまでに至らず、正しく回答することができないということが考えられる。

このような実態から、地図資料を読み取る力を高める指導法と他の資料を組み合わせる読み取る指導の工夫について追究していくこととした。

(4) 研究の内容

ア 地図資料読解のための基礎的な力を培う

地図記号や方位などは、中学年で身に付けさせる知識である。しかし、十分に身に付いていない場合が多い。そこで、次の指導を毎時間、短時間で行うことによって、習熟を図っていくことが必要である。

(ア) 都道府県・地図記号フラッシュカード

都道府県や地図記号のフラッシュカードを毎時間の授業最初に取り入れる。毎時間数分の積み重ねで無理なく自然と覚えていくことができる。

(イ) 方位の習熟

基本となる四方位をしっかりと身に付けさせることが必要である。日常的に方位を理解させるための取組を行う。

(ウ) 地名探し

地図帳を開き、「先生が言う地名を見付けてください」という問題を出す。地名を探すことによって、都道府県名と位置を自然と覚えることができる。地名以外にも、山、川、湖など様々な方法が考えられる。また、地図上の分布を読み取る練習にもなる。

上記の取組を通して、日常的に地図資料に親しむことで、地図資料を読み取る上での基礎を養う。その上で地図資料を読み取らせることが重要であるとする。

イ 地図資料を読み取るための指導

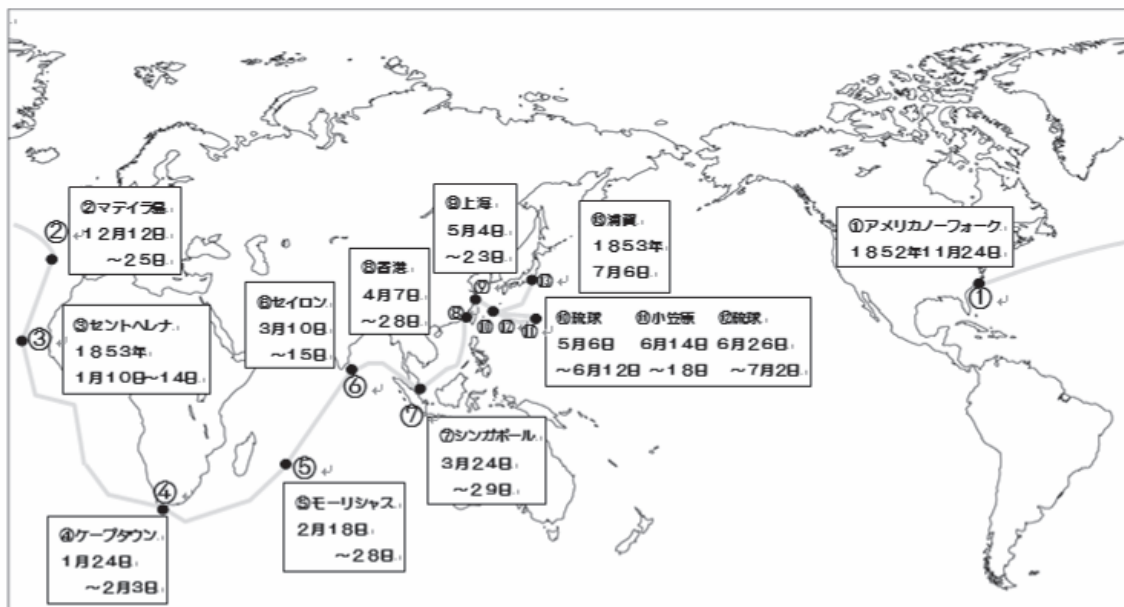
本小単元では、「アメリカはなぜ開国を求めたのか」を考えるための資料としてペリー来航図を使用し、以下の工夫を行った。

(ア) 基礎的・基本事項の確認

題名や、図法による描かれ方の違いを確かめる。また、地図の場所を児童が指し示すことにより、確実に理解させる。

(イ) 読み取らせたい部分を鮮明にする

ペリーの日本までの航路を、児童一人一人に地名を調べさせて赤鉛筆で確認させ、デジタル地球儀を使って視覚に訴えることでペリーがどのように日本にやってきたか捉えさせる。



(ウ) 全体の傾向を捉えさせる

ペリーが日本に来るまでに「どこに、どの程度の期間」に立ち寄ったか地図上に示し、補給しながら航海していたことや、場所によっては長く滞在していたことに気付かせる。

(エ) 現代との比較をさせる

現在と比較し、なぜ当時の人々は太平洋横断を行わなかったのかアメリカの国書を基に考えさせる。

(オ) 社会的事象の意味を捉えさせる

アメリカが開国を求めた理由等を、地図から読み取ったことや日米和親条約などの内容から考えさせる。

(5) 小単元の指導計画 (10 時間扱い)

時 数	ねらい	児童の活動 (○児童の学習活動・児童の反応、内容)	教師の指導等 (○指導、留意点 □教材 ◇評価)
1 つ か む	江戸時代と明治時代の日本橋の絵を比べ、違いに気づき、学習問題を見い出す。	○江戸時代の日本橋の絵と明治時代の日本橋の絵を比べ、気が付いたことを話し合う。 ・人々の服装が変わっている。 ・何か大きな出来事があったに違いない。 ○学習問題を見い出す。	□日本橋の絵 ・二つの絵を比べてみての相違点に着目させ、どのように変わっているか考えさせる。 ◇二つの絵の比較から江戸時代から明治時代への変化について関心をもとうとしている〈関意態〉
明治政府はどのようにして西欧諸国に迫いつこうとしたのだろうか。			
2 調 べる	黒船来航時の日本の様子を知り、ペリーをはじめ西欧諸国に対して人々はどのような思いをもっていたか考える。	○ペリーに対してどのような印象を人々がもっていたか考える。 ・ペリーの肖像画の様子から相当怖い人と皆思っていた。 ○ペリーの来航以来、どのような条約を結んだか教科書等で調べる。 ・日米和親条約で下田と函館を開港した。 ・200 年以上続いた鎖国が終わって貿易が始まった。	□黒船来航の錦絵 □ペリーの肖像画 ・肖像画はいくつかの種類を用意する。 ◇教科書や資料集などから日米和親条約の内容について調べようとしている〈技能〉
3 本 時	ペリーの目的は何だったのか航海図と日米和親条約から考える。 ＜本時＞	○ペリーが日本に来航した目的を考える。 ・日本と貿易をしたかったのではない。 ○ペリー来航のルートを調べ、気付いたことを発表する。 ・ずいぶん遠回りしてやってきている。 ・なぜ細かく陸に寄っているのだろう。 ○ペリーの一番の目的は何か日米和親条約から考える。 ・アメリカ船の補給、漂流民の保護 ○貿易を迫ろうとするペリーに対し、国益を守るために江戸幕府が譲らなかったのはどの条文か考える。 ・下田港内でアメリカ人が自由に動ける範囲は7里以内。	□アメリカ大統領の国書 □世界地図とペリー来航図 ・世界地図に予測した後、実際のルートを確認する。 ◇ペリーの目的は何だったのか航海図と日米和親条約から考えようとしている。〈思判表〉 □日米和親条約（要約）
4 5	開国を進めるべきか、反対すべきか考え、当時の人々	○開国を進めるべきか、当時の人々がどのような行動を取ったか調べる。 ・攘夷運動で薩摩藩や長州藩は外国に挑	□坂本竜馬・高杉晋作・西郷隆盛等、幕末の人物についての資料

	がどのような取組をしたか調べ、それぞれの思いを知る。	んだけど、敗れてしまった。 ・西洋列強との戦争になれば日本は敗れてしまうから開国して貿易を進めた方がいい。 ○攘夷派、開国派どちらにも共通することは何か考える。 ・日本を守りたい。 ・日本を強い国にしたい。 ○そのためにどのようなことが行われたか調べる。 ・幕府へ不満が高まり討幕運動が進んだ。	・あらかじめ教師側で文章資料を用意しておく。 ◇幕末の人物がどのような思いで動いていたか考えようとしている〈思判表〉 □教科書・資料集
6 7	明治維新について調べ、新しい政府が天皇を中心とした近代的な国家をめざしたことが分かる。	○明治維新によってどのような取組が行われたか調べる。 ・廃藩置県、徴兵令、地租改正など ○明治政府の取組の中で、最も重要なものは何か話し合い、どのような国づくりをしようとしたか考える。 ・天皇を中心として、欧米に負けない国づくりを目指した。	□教科書・資料集・図書資料 ◇教科書や資料集を基に、明治政府がどのような取組を行ったか調べ、まとめている〈技能〉
8 9	文明開化によって人々の暮らしがどのように変わっていったかを調べる。	○文明開化によって西洋から入ってきたものを教科書や資料集などで調べる。 ・乗合馬車・鉄道・食べ物・学制等 ○なぜ学校が急速に広がっていきことができたのか考える。 ・寺子屋や藩校といった江戸時代のシステムがあったから比較的スムーズに広がっていった。	□教科書・資料集・図書資料 ◇教科書や資料集を基に、文明開化によって人々の生活が変わったことを理解している。〈知識〉
10 ま と め る	明治政府に対する人々の不満を知り、明治政府の改革を進めていった意図を考える。	○明治になってからの一揆の数についてのグラフ、武蔵野で起きた御門訴事件から当時の人々の明治政府に対する不満を知る。 ・幕末から明治初期にかけて一揆の数が増えているので、人々の不満がたまっていたのだと思う。 ○人々の不満がありながらも明治政府が改革を進めていった理由を考える。 ・日本を一つの国として西洋諸国に認めさせるため。	□幕末から明治にかけての一揆の数のグラフ □武蔵野市史による御門訴事件の資料 ・これまでの学習について振り返り考えさせる。 ◇明治政府による諸改革についての感想を述べている。〈思判表〉

(6) 本時の指導 (3/10 時間目)

ア 目標

航海図と日米和親条約からペリー来航の目的を考える。

イ 展開

過程	児童の活動 (○児童の学習活動・児童の反応、内容)	教師の指導等 (○指導 □教材・留意点 ◇評価)
つ か む	○ペリーが日本に開国を迫った理由を考える。 ～アメリカ大統領の国書(要約)～ 親愛なる日本の皇帝陛下へ。 今回、ペリー提督を日本とアメリカ合衆国が友好関係を築けるよう派遣した。アメリカは、銀、宝石など年間およそ6千万ドルの金を産出する。日本人は多くの分野の技に長け、素晴らしいものをつくり出す。私は、日本とアメリカ合衆国両方の利益のため、お互いに貿易ができることを願っている。 もう一つお願いしたいことがある。アメリカ合衆国の多くの船が毎年、日本の近くの海で捕鯨(くじらを捕ること)を行っている。嵐の時など、捕鯨船が日本の海岸に漂着する事がある。そんな時に、漂流した我が国の国民を保護してほしい。 また、日本には豊富な石炭と食料があると理解している。アメリカの蒸気船は広い太平洋横断で大量の石炭を消費するが、全てはるばるアメリカから持って行く事は不便である。我が蒸気船が日本の港に寄り、石炭、食料、水の供給を許可されることを望む。我々はこのことを非常に望んでいる。 ・日本と貿易をしたい。 ・アメリカの船への補給 ・漂流民の保護 ○本時の学習問題を確認する。 ペリーが日本に開国を迫った理由は何だろうか。	○ペリーに対する印象や、日米和親条約等について確認する。 ○考えるための資料としてアメリカ大統領の国書(要約)を提示する。 □原文の訳文をそのまま提示したのでは理解させることは難しい。そこで、教師側で内容を要約し、要求内容ごとに三つに段落分けをしておく。 □「要求は全部でいくつあるか」「何を要求しているのか」等の発問によって、国書の内容をさらに要約させ、内容を把握させる。 □それぞれの要求に合うような絵を提示し、視覚的にもイメージを捉えさせる。
調 べ る	○ペリーの航路を予測する。 ・太平洋を渡ってきたのかな。 ・南北アメリカの間はどうするのだろうか。 ・南アメリカの方には小島がたくさんあって通りにくそうだ。 	○ペリーの航路から開国の意図を探ることを伝える。 □世界地図 ○出発地であるノーフォークを示した世界地図を用意し、自分の予想を矢印で書き込ませる。 □拡大図に予想を書かせ、全体で話し合う。 □ペリー来航のルートを提示する。 ○一度に全航路を提示するのでは

○実際のペリー来航時のルートから分かったこと・気付いたこと・思ったことを交流する。 ・わざわざ大西洋とインド洋を通して日本に来ている。 ・どうしてこんなに遠回りをしたのだろうか。 ・燃料や食料が足りなかったのかな。  ○ペリー来航図とアメリカ大統領の国書の中からペリーの第一の目的は何か考える。 ・アメリカ船への補給が第一の目的だった。  ○江戸幕府を守るために日米和親条約に入れた条文はどれか考える。 ・この条文で日本の土地で勝手なことをやらせないようにした。	なく、デジタル地球儀で徐々に航路を明らかにしていく。 □ルートを赤鉛筆でなぞらせ、「どこに」「何日程度」寄って来たか押さえた上で読み取らせる。 □読み取りを行う際まずノートに自分の意見を書かせ、その後交流させる。 ○国書の中で太平洋を渡ることの難しさを伝える部分を考えさせる。 □日米和親条約で第何条に当てはまるか考えさせる。 ○太平洋での捕鯨活動や中国との貿易のための補給港として日本に開国を迫ったことを紹介する。 ○日米修好通商条約の中でも外国人が自由に動ける範囲を指定していることを紹介する。(第5条アメリカ人が自由に動くことができる範囲は、下田の7里以内)
まとめ ○ペリー来航の目的を整理する。 ○授業の感想を発表する。	◇ペリーの目的は何か航海図と日米和親条約から考えている。 〈思判表〉

(7) 研究の考察

ア 地図資料を読み取る力を高める指導法について

地図資料を読み取る力を高めるために、児童一人一人に地名を調べさせてペリーの航路を児童一人一人に赤鉛筆で確認させ、デジタル地球儀を用いて航路を視覚的に理解させるという方法を取り入れた。その結果、次のような成果と課題が確認された。

(7) 成果

- ① 航路をなぞることで、児童全員にペリーの航路を理解させることができた。また、資料の読み取りを苦手とする児童も、ペリーの立場から開国を迫った理由について考えることができた。

地図を読み取る際に該当範囲を塗る、色分けする、地図記号を表記するなどの作業を取り入れることで地図の特徴や全体の傾向などを読み取りやすくなる。

- ② デジタル地球儀を使い、大画面の動画を用いて徐々に航路を確かめることで、児童は、航海の順序性を理解することができた。また、地図では見えないような小さな島や地形の様子も映像で捉えることができた。デジタル地球儀は古墳の位置や太平洋戦争における日本の戦線の広がりなど、地図を読み取る際のイメージを掴むための方法の一つとして有効である。

(1) 課題

- ① 方位と縮尺を活用することが課題である。方位を用いると、全体の傾向がさらにつかみやすくなる。縮尺を使えば実際はどの程度の大きさなのかを理解することができる。
- ② 地球儀を活用する必要がある。どの地図も平面で構成されているので、実際の陸地の大きさを正しく捉えることができない。地球儀を使い、地球の丸さや平面地図とは違う陸地の大きさや形等を体感させることができる。

イ 地図資料と他の資料を組み合わせた場合の指導の工夫について

地図資料と他の資料（今回は文章資料）を組み合わせた場合の指導の工夫として、まず、文章資料の要約を行い、次に、地図資料を読み取り、その上で「ペリーが開国を要求した一番の理由」を考えさせた。この結果、次のような成果と課題が確認された。

(7) 成果

- ① 文章をアメリカの要求内容に合わせて、あらかじめ段落分けすることで、要求がいくつあるか分かりやすくなり、要約に集中することができた。また、ワークシートやノートに要約を書くことで、授業の後半に活用することができた。

文章資料の場合、内容を要約させ、ポイントを絞った上で地図など、他の資料を組み合わせさせて考えさせるとよいと考える。その際、キーワードは何か全体で確認することによって、ねらいを達成することができる。

- ② 二つ以上の資料を組み合わせさせて考えさせる際には、資料の重要な部分を順序立てて確実に理解させた上で考えさせるとよいと考える。このような取組を積み重ねることで、児童が自ら複数の資料を組み合わせさせて考えることができるようになる。

(1) 課題

- ① 文書資料を的確に要点を押さえて読み取り社会的意味を考えることが苦手な児童もいる。このような児童には、口頭で発表させてからまとめる方法も有効であると考えられる。

Ⅳ 研究のまとめ

1 研究の成果

文章資料等を平易にしたり、作り直したり、他の資料と組み合わせたりして提示する授業実践を通して、以下のような成果を得た。

(1) 地図資料を読みとる視点を生かしたことの効果

「実践事例2」では、地図資料を読みとる視点を活用して、子供たちにデジタル地図を読みとらせた。このことにより子供たちは、ペリーの来航を時間の経過と共にとらえるだけでなく、ペリーの立場から開国を迫った理由について考えることができた。恣意点の活用が、ペリー来航のもつ意味を考える手だてとなった。

(2) 文章資料を再構成して資料化したことの効果

大人向けに作成されたパンフレットをそのまま使うと、文字数が多いだけでなく、授業の中で児童に捉えさせなくてもよい余計な情報が学習の妨げとなる。そこで、実践事例1では、次の3点を考慮して資料を再構成した。①文章資料の文字数を減らす、②資料化した本文の中にはキーワードを3つ以内にする、③「ネットワークの様子と仕組み」という本時に必要な情報のみに内容を絞る。

その結果、児童たちは文章資料の中から本時の学習に必要な情報だけを取り出すことができるようになった。目標に即して、上記の視点から資料を再構成することで、文章資料を確かに読み取らせることができる。

(3) 読み取りの手順を示したことの効果

「実践事例1」では、文章資料を読み取る手順を作成して児童に示した。手順に沿って指導することで、どのような事実が書いてあるのかを、児童一人一人が細かく手順を踏みながら読み取り、社会的事象の意味を考えることができる。

2 今後の課題

(1) 多様な資料の提示方法の工夫

絵画資料、統計資料、映像資料、実物資料をどのように提示し、確実に読み取らせる方法については、今後、授業実践を重ね指導法の工夫について検討する必要がある。

(2) 発達段階に応じた資料の扱い

今回は、高学年における資料の扱いについて検証を行った。中学年においても様々な資料が活用される。今度、資料の活用や学習活動の組み合わせ等、中学年における資料の提示・読み取りの指導に関わる授業実践を進め、指導法の工夫について検討する必要がある。

(3) 一人一人の着眼点に対応する指導

一枚の資料を提示すると、児童たちには多様な点に着目する。この着眼点は、資料に含まれる要素が多ければ多いほど多様になる。中には、本時のねらいから外れるものもある。このような状況に対応するため、一人一人に応じて文章資料や地図資料を読み取らせることが大切である。一斉指導と個別指導をどのように組み合わせるのか検討する必要がある。

< 小学校算数研究開発委員会 >

研究主題と研究の概要図

「数理的な処理のよさが分かり、生活や学習に活用する力を育てる指導の在り方」

研究の概要（研究構想図）

児童の実態（調査対象：東京都公立小学校 770 人）

多くの児童が算数を楽しんでいる。その多くは問題が解けたり計算ができたりした時に楽しいと感じている。また、買い物や個数を数える場面でしか活用の実感をもてていない。

また、国際学習到達度調査において数学の有用性を感じる生徒の割合は高くなかった。本調査においても生活や学習に算数を活用した時に楽しいと感じる児童は、極めて少ない。

育てたい能力・態度

身近な生活と算数をつなぎ、数学的な考え方を活用する能力

数学的な考え方をういて
日常の事象をよりよく解決しようとする態度

数理的な処理のよさを実感し、
身近な生活に活用しようとする態度

指導のポイントー身近な生活と算数のつながりを重視すること

条件を整理し、身近な生活を日常の事象として学習に取り入れる過程を重視する

単元を通した学習目標を児童とともに設定し、数学的な考え方の意識化を図ったり学習を身近な生活につなげたりする

算数で学んだ知識や技能、特に数学的な考え方を活用した数理的なよさが実感できる学習展開にする

授業づくりのポイント

まとめと発展

単元の導入で取り上げた数学的な考え方や学習目標を振り返り、身近な生活への活用を意識する。

集団検討

身近な生活を意識して数理的な処理のよさを検討する。

問題設定と把握

日常の事象をもとに児童自らが条件を設定して問題をつくる。

算数の目で 身近な生活を見る 経験を豊かに する授業

解決の計画

日常の事象から問題解決に必要な情報や条件を選択し、解決の計画を立てる。

自力解決

身近な生活での経験に基づき、解決の結果を根拠にして自分の考えをもつ。

研究の内容

- 1 数学的な考え方を身近な生活に活用する能力を育てる指導の在り方を追究する。
- 2 数理的な処理のよさが実感できる日常の事象を取り上げ、学習を身近な生活につなげる方策を探る。
- 3 身近な生活への活用が意識できる指導計画を検討し、実証する。

研究の成果

- テーマに迫るための指導のポイントや授業づくりのポイントを明らかにすることができた。
- 条件を整理し、日常の事象として学習に取り入れる過程を大切にしたい授業をつくることのできた。
- 身近な生活から生まれた問題を取り入れることで、主体的に解決する児童の姿が見られた。

I 研究の目的

1 指導のポイント ～身近な生活と算数のつながりを重視する～

身近な生活と算数のつながりを重視するとは、『日常の事象』や『新しい学習』と、『今までに学習したこと』とを関連させる見方・考え方を大切にするということである。算数で学習したことを身近な生活に用いることを通して数学的な考え方を育て、問題解決能力を一層高めることができる考える。児童が自ら生活や学習に問題意識をもったり、進んで発見や気づきをしたりすることができれば、算数を学ぶことの楽しさや意義を実感することができる。

条件を整理し、身近な生活を日常の事象として学習に取り入れる過程を重視する。

教科書で扱われている問題は、多くの場合、場面も数値も理想化され、設定されている。実際の生活や学習に活用する力を育てる指導の一つとして、理想化されていない場面や数値を問題の対象として算数の舞台にのせ、数理的に処理して解決する過程を大切にしたい。

問題の理解・把握場面では、児童が日常の事象や新しい学習内容に着目し、観察し、考えたいことや解決したいことを自ら見いだせるように問題を提示する。

単元を通した学習目標を児童と共に設定し、数学的な考え方の意識化を図ったり、学習を身近な生活につなげたりする。

数学的な考え方を身に付け、それを生活や学習に活かしていけるようにする指導とは、1単位時間の学習の中で完結するわけではない。数学的な考え方を活用して問題を解決し、そのよさに気付くことや、自ら既習の考え方を活用して解決することなどの学びの積み重ねが大切である。

指導者は、単元を通して用いられる数学的な考え方を明確にし、児童と共に本単元における学習目標を設定するとともに、児童が身近な生活と算数をつなげることができる活動を計画する。

算数で学んだ知識や技能、数学的な考え方を活用した数理的な処理のよさが実感できる学習展開にする。

数理的な処理のよさを実感する工夫の一つとして、日常とのつながりを意識することが有効であると考え。「問題設定と把握・解決の計画・自力解決・集団検討・まとめと発展」の学習過程において、身近な生活とのつながりを意識した授業づくりのポイントを取り入れる。

算数の目で身近な生活を見る経験を豊かにする授業を計画し、実践する。

2 授業づくりのポイント

～算数の目で身近な生活を見る経験を豊かにする授業～

〔学習活動〕及び〔指導上の留意点〕は、以下の通りである。算数の目で日常を見る経験を豊かにする授業を計画し、実践するには、児童が主体的に学ぶための工夫が大切である。

算数の目で身近な生活を見る経験を豊かにする授業を実践するために〔指導上の留意点〕

〔学習活動〕

- 1 日常の事象を基に、児童自らが条件を設定して問題をつくる。

- ・ 日常の事象、新しい学習内容に着目する。観察する。
- ・ 考えたいこと、解決したいことを見いだす。

◎問題は、児童から引き出し、設定する。

- 取り上げる日常の事象
- 取り上げ方（提示の仕方）
- 発問

- 2 日常の事象から問題解決に必要な情報や条件を選択し、解決の計画を立てる。

- ・ 分からないこと（解決したいこと）、分かっていることは何か考える。
- ・ どうすれば分かるか（解決できるか）考える。

◎ 児童が見いだした問題の解決に必要な情報や条件を引き出し、整理する。

- 問題と日常の事象とのつながり
- 既習の学習の想起

- 3 身近な生活での経験に基づき、解決の結果を根拠にして、自分の考えをもつ。

- ・ 解決の結果を日常の事象や事柄にもどし、検討する。
- ・ 解決の結果から考察する。

◎ 日常生活と照らし合わせて解決の結果を検討させ、自分の考えをもつことができるようにする。

- 日常の事象での検討
- 数学的な考え方への着目
- 日常の事象での考察

- 4 身近な生活を意識して、数理的な処理のよさを検討する。

- ・ 数理的にとらえ（数、量、図形などの要素に着目・数学的な考え方に着目）処理するよさを見付ける。

◎ 数理的な処理のよさを実感できるようにする。

- 数学的な考え方への着目

- 5 単元の導入で取り上げた数学的な考え方や、学習目標を振り返り、身近な生活への活用を意識する。

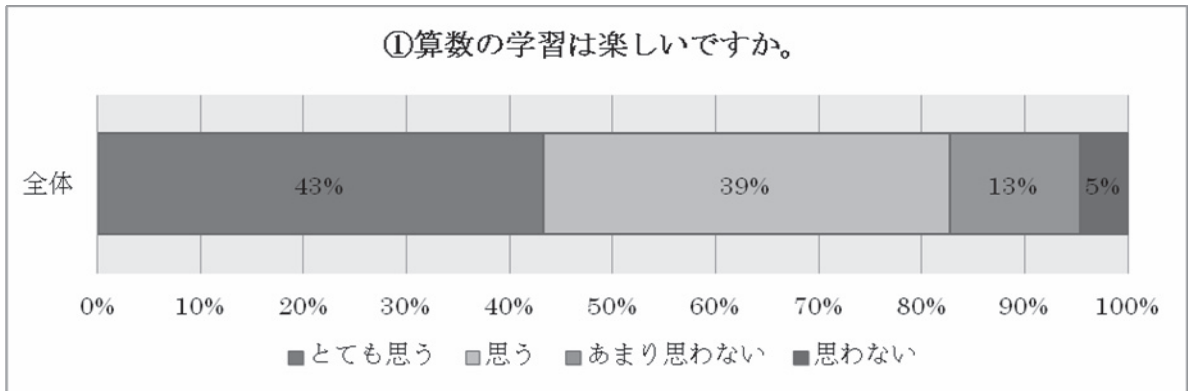
- ・ これからも使える数学的な考え方、問題解決に用いた知識や技能をまとめる。
- ・ 身近な生活とのつながりを考える。

◎ 学びを深めたり、広げたりすることができるようにする。

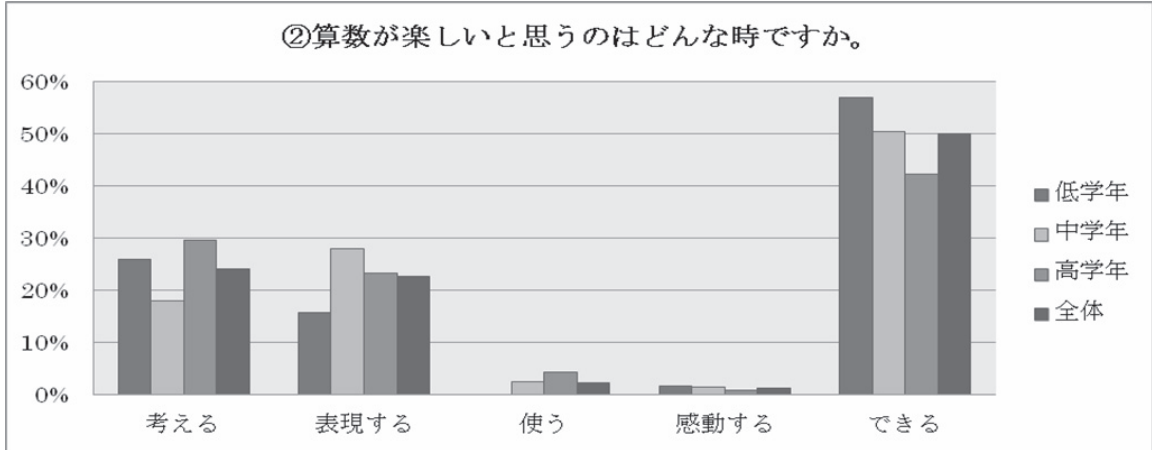
- 数学的な考え方をを用いて考えるよさ
- 日常の事柄・事象での探究

3 児童の実態

調査対象	東京都公立小学校	第1学年	117人	第2学年	122人	
(平成25年7月実施)		第3学年	148人	第4学年	131人	
		第5学年	159人	第6学年	93人	計770人



全体的に、「算数の学習を楽しい」と思っている児童が多い。しかし、高学年では、「とても思う」割合が少なくなり、「思わない」割合が増えている。



自由記述の内容を、「算数を考える」「算数を表現する」「算数を使う」「算数に感動する」「算数ができた」の5つに分類し、全記述に対する割合を示した。どの学年でも、「算数ができた」時が多い。次いで「算数を考える」「算数を表現する」時も多いが、「算数を使う」「算数を感動する」時は極めて少ないという結果になった。学年別に見ると、高学年になると、「算数ができた」時の割合が少なくなり、「算数を考える」時の割合が高くなることが分かった。以下に、分類した記述の内容を記す。記述の内容は、高学年になるにつれ、より高度な内容で楽しいと感じていることが分かる。

算数を考える

低学年	・みんなで考えた時	・自分の考えをまとめた時	
中学年	・計算の仕方を考える時	・理由を考える時	・みんなで考えた時
	・一人で考えた時	・難しい問題を考えた時	
高学年	・計算の仕方を考える時	・理由を考える時	・友達の考えを聞く時
	・自分だけの考えの時	・みんなで考えた時	
	・いろいろな方法を考える時		

算数表現する

低学年	・自分の考えを発表する時 ・図をかいて説明する時
中学年	・自分の考えを発表する時 ・図をかいて説明する時 ・表にまとめる時
高学年	・ノートにまとめる時 ・自分の考えを納得してもらう時

算数を使う

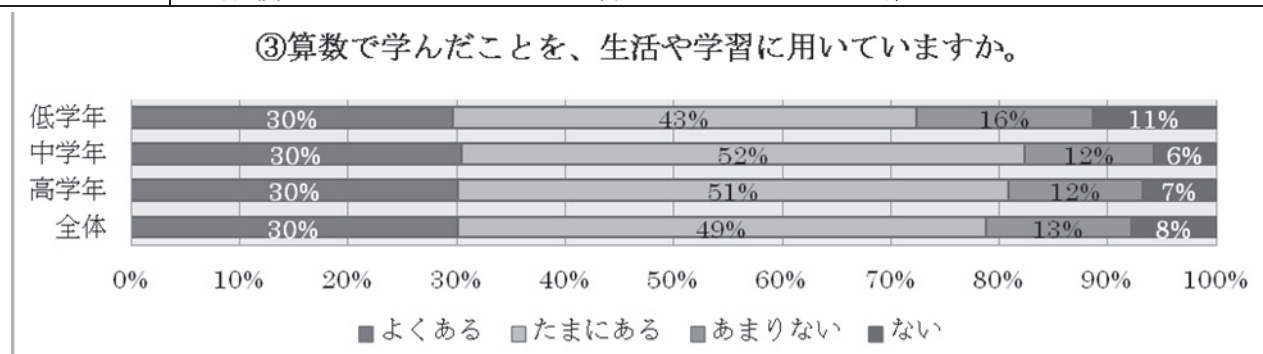
中学年	・学習したことを使って解く時
高学年	・算数以外の学習で学んだことを使って解いた時・生活に生かした時

算数に感動する

低学年	・かさの単位が便利だった。 ・かけ算九九が歌のようだった。
中学年	・計算のきまりがすごいと思った。
高学年	・算数で学習したことが他の教科で使えた時。

算数ができた

低学年 中学年	・問題が解けた時 ・計算ができた時 ・長さがはかれた時 ・かさをはかれた時
高学年	・問題が解けた時 ・計算ができた時 ・長さがはかれた時 ・図形がかけた時 ・体積が求められた時 ・分からないものが解けた時



④どんな時にどんなことを使いましたか。自由記述 複数回答

	生活	学習
低学年	・買い物の計算 ・ゲームの計算 ・個数の計算	・物を数える時のかけ算 ・水のかさのたし算 ・かけ算の時に足し算
中学年	・買い物の計算 ・ゲームの計算 ・個数の計算 ・時刻表	・図に表して考えた・逆算で確かめ算 ・わり算の時のかけ算 ・図形をかく時の平行・垂直 ・温度計の読取 ・植物の成長の測定
高学年	・人数の計算 ・ゲームの計算 ・個数の計算（比例） ・買い物の計算（割引・単位量） ・数える時に比例 ・トーナメントの試合数	・図に表して考えた ・商の四捨五入 ・小数の計算を整数になおした ・分数の計算を小数になおした ・面積を求める時に、長方形にした ・調理実習での計算値 ・地図の縮尺 ・実験結果の平均

約8割の児童が生活や学習に算数を活用している。低学年に比べて中・高学年の方が活用している児童が多い。しかし、生活に関しては、多くの児童が買い物の計算や個数の計算での活用としていて、生活に役立つ場面をあまり意識できていない。学習に関しては、これから学ぶ内容を既習事項をもとにして考えていく時に活用している児童が多くいた。

Ⅱ 研究の内容 実践事例（１）

１ 単元名 「ぼうグラフと表」（３年）

２ 単元の目標

- 身の回りにある事象について、目的に応じて観点を決め、資料を分類整理して、表や棒グラフを用いて分かりやすく表したり、読み取ったりすることができるようにする。

関心・意欲・態度	数学的な考え方	技能	知識・理解
・表やグラフに表すことのよさに気付き、目的に応じた観点を資料で分類整理したり、表やグラフを生活や学習に活用したりする。	・目的に応じた資料の分類整理の仕方や棒グラフや表の表し方を考え、分かりやすく表すことを工夫することができる。	・資料を分類整理して表やグラフに表したり、表や棒グラフから資料の特徴や項目間の関係を読み取ったりすることができる。	・棒グラフの読み方やかき方、表を用いた表し方について理解する。

３ 単元について

児童は、第１学年において、ものの個数を絵や図などを用いて表したり、読み取ったりする学習を行っている。また、第２学年では、身の回りにある数量を分類整理し、簡単な一次元表や、個数を○のみで表したグラフなどを用いて表したり、読み取ったりすることを学習している。

第３学年では、これらの指導をもとにして、身の回りにある事象について、目的に応じて観点を決め、資料を分類整理し、これを表やグラフを用いて表したり、読み取ったりすることができるようにしていく。本単元では、棒グラフの読み方やかき方について、また、簡単な二次元表について学習する。資料を整理して、その結果をまとめて分かりやすく表現する方法として、表やグラフを用いると有効であることに気付かせ、進んで表やグラフを活用する態度を育てることをねらいとして学習を進めていく。表については、分類の仕方や、表し方による特色について理解したり、目的に応じて用いたりできるようにしていきたい。また、グラフについては、表と関連付けながら表現することを通して、資料の中の数量の大きさの違いを一目で捉えることができるという棒グラフの特徴に気付くことができるようにする。

４ 研究主題との関連

本単元では、資料を整理して、その結果をまとめて分かりやすく表現する方法として、表やグラフを用いると有効であることに気付かせ、すすんで表やグラフを活用する力を育てていきたい。

統計的な問題解決を行う際には、「目的を明らかにし、集める資料の条件を考えたり、目的にあった分類の観点を選んだりすること」や「資料に落ちや重なりがないように項目を決めたり、資料を分類したりすること」が重要である。しかし、一般的には、あらかじめ整理された記録を提示して、調べる観点を与えてから分類・整理する学習を行うことが多い。そのため、「資料を収集すること」や「目的に合った分類の観点を選ぶこと」について、十分に指導がなされていない。また、表やグラフからのどのようなことが読み取れるかという解釈についても、統計的に問題解決す

るというねらいが不明確なため、十分に行うことができていないと考えられる。そこで、本単元では、以下の点を重視した指導を行う。

指導のポイントー身近な生活と算数のつながりを重視すること

1 条件を整理し、身近な生活を日常の事象として学習に取り入れる過程を重視する

児童にとって、学校でのけがは身近な生活に深く関係した事象である。単元を通して自校のけがに関する資料を繰り返し扱い、様々な観点で表やグラフに表したり、それらを読み取ったりする学習を繰り返すことで、自校のけがの特徴などを捉えられるようにする。

2 単元を通した学習目標を児童とともに設定し、数学的な考え方の意識化を図ったり学習を身近な生活につなげたりする

生活経験をもとに話し合い、「学校のけがを減らすために、詳しく調べて校内に呼びかけよう」という学習目標を設定する。目標に合わせて単元の学習を進め、目的に応じて調べる観点や整理の仕方を考えられるようにする。また、表やグラフをもとに、けがを減らすためにはどんなことに気を付ければよいのか、ということ进行考察することで学習を身近な生活につなげていく。

3 算数で学んだ知識や技能、特に数学的な考え方を活用した数理的なよさが実感できる学習展開にする

単元を通して同じ資料を用いて学習を進め、表やグラフに表すことで、だんだんと学校のけがの特徴が分かるように単元の計画を立てる。毎時間の授業のまとめでは、表やグラフを考察したり、表やグラフに表すことのよさを考えたりする活動を行い、数理的な処理のよさを実感できるようにする。

授業づくりのポイントー算数の目で身近な生活を見る経験を豊かにする

1 日常の事象を基に児童自らが条件を設定して問題をつくる。(問題設定と把握場面)

生活経験をもとに、学校のけがに関する資料について話し合い、「学校のけがを減らすために、詳しく調べて校内に呼びかけよう」という学習目標を設定する。本時では、学習目標に合わせて、調べる観点を児童自らが設定し問題をつくっていく。

2 日常の事象から問題解決に必要な情報や条件を選択し、解決の計画を立てる。(解決の計画)

「学校のけがを減らす」という目的のために、どのような情報を選べばよいのか考えたり、どのような結果になるかを予想したりする活動を行い、解決の計画が立てられるようにする。

3 身近な生活での経験に基づき、解決の結果を根拠にして自分の考えをもつ。(自力解決)

本校の実際のけがに関する資料について、生活経験やこれまでの学習をもとに目的に合ったデータを選択して表にまとめたり、その結果について考察したりする。

4 身近な生活を意識して数理的な処理のよさを検討する。(集団検討)

集団検討では、表やグラフから読み取った結果について話し合うだけでなく、「なぜこの数値が多いのか」「けがを少なくするためにはどこに気を付ければよいのか」といった、表やグラフから考察したことについても話し合う。日常生活との関連を図ることで、統計的に処理することのよさを実感できるようにする。また、表やグラフに表すことのよさについても話し合い、数理的な処理のよさを実感できるようにする。

5 単元の導入で取り上げた数学的な見方考え方や学習目標を振り返り、身近な生活への活用を意識する。(まとめと発展)

表やグラフが他にどのような場面に使えるかを考えたり、表やグラフから分かったことを日常生活にどのように生かすことができるかを考えたりすることで、身近な生活や学習に活用できるようにする。

5 児童の実態

本学級の児童は、算数の学習に対し、強い意欲をもって取り組んでいる。アンケート調査を行った結果でも9割の児童が、算数の学習を楽しんでいることが分かった。「どのような場面で算数を活用しているか」という問いに対しては、「計算を用いて値を調べている」という回答が大部分であり、図や表などの算数的な表現や、数学的な考え方などを活用しているといった回答はほとんどなかった。生活や学習に活用することが十分であるとは言えない。

6 指導計画

	時	目 標	学 習 活 動	おもな評価規準
整理のしかた	1	学校のけがを減らすために、詳しく調べて校内に呼びかけよう。 資料を分類整理する方法や整理結果を表にまとめる方法を理解する。	- 資料や生活経験をもとに話し合い、単元を通した学習目標をつくる。 - けがの種類別の人数を「正」の字を使って整理し、結果を表に表す。 「合計」の意味を知る。	関 資料を分類整理して表に表すことのよさに気付いている。 考 資料を分類整理するとき、資料に落ちや重なりがないことを確認したり、誤りがおきにくいような方法を考えたりしている。
	2		- 表を見て、けがの場所と人数を表にまとめる。 「その他」の意味を知る。	
ぼうグラフ	3	資料を棒グラフに表すと、数量の大小が分かりやすいことや、棒グラフの読み方を理解する。	- 表と棒グラフを比べたり、二つの棒グラフを比べたりしながら、棒グラフについて調べる。 - 項目のとり方を変えたグラフを比べる。	関 表と棒グラフを比較する活動を通して、棒グラフでは数値の大小がひと目で分かるよさに気付いている。 知 棒グラフの読み方を理解している。
	4	数量が横軸に表されている棒グラフを読み取ることができる。	- 数量が横軸に表された棒グラフを読む。 1目盛りの大きさや、項目の順序などについて考える。 - 棒グラフからいろいろな事項を読み取る。	技 横軸に数量をとった棒グラフでも数量や数量どうしの関係を読み取ることができる。
	5	棒グラフのかき方を理解し、棒グラフをかくことができる。	- けがの場所と人数を整理した表を見て、棒グラフに表す方法を考える。 - 項目のとり方、1目盛りの大きさなどの順に従ってグラフをかく。	考 棒グラフの項目の並べ方や目盛りのつけ方を考え、分かりやすい表し方を工夫している。 知 棒グラフのかき方を理解している。
	6		いろいろな資料を棒グラフに表す。	
	7	目盛りの付け方が異なる三つの棒グラフを見比	目盛りの付け方の異なる三つの棒グラフを見比べて、気付いたことを話し合う。	考 目盛りの付け方が異なる複数のグラフを比較する活動を通して、目

		べて、棒グラフについての見方や考え方を広げる。		的にあった適切な目盛りの付け方について考え、説明している。
表のくふう	8 本時	観点を決めて資料を分類整理して一次元表を作り、考察する。	- 日時・天候・けがの種類・場所・人数をまとめた表から、二つの観点を選び、一次元表にまとめる。 - 調べた結果を基に、ポスターに載せる内容を考える。	考 目的に合わせてデータを収集・整理して一次元表を作り、読み取ることができる。
	9	一次元表を組み合わせた簡単な二次元表を読むことができる	一次元表を基に、二次元表に数を書き入れ、この表を読み取り、考察する。二次元表の有用性を考える。	考 一次元表を基に、簡単な二次元表を作って読み、そのよさについて考える。
まとめ	10	学習内容の定着を確認し、理解を確実にする。	適用問題に取り組む。	知 基本的な学習内容を身に付けている。

7 本時の指導

(1) 目標 自ら設定したテーマに合わせて、データを収集・整理する観点を選び、一次元表を作って考察することができる。 【数学的な考え方】

(2) 展開

学習過程	主な発問と予想される児童の反応	評価★ 留意点・
問題設定と把握	○資料を見て、これまでの学習を振り返る。 T：これまで、学校のけがについて調べてどんなことが分かりましたか。 C：打撲が多かった。C：休み時間や、校庭のけがが多かった。 C：廊下や階段のけがが多かったのは、走ってはいけない場所で走っているからだと思う。 C：雨の日に教室や廊下で遊んでいるから、校舎の中でのけがが多いのだと思う。 ○条件を設定して問題を作る。 T：学校のけがを減らすために、ポスターで知らせましょう。試しに、こんなポスターを作ってみました。このポスターで、学校のけがは減らせそうですか。 打ぼくをへらそう！ C：何に気を付けたらいいかわからない。 C：どうやって減らせればいいかわかるようなポスターがいい。	- けがの種類、場所、時間、天気、四つの観点を取り上げて話し合い、それぞれの項目間に関連があるという予想を立てられるようにする。 「打ぼくをへらそう」と書いたポスターを例示して「学校のけがを減らそう」という単元を通した活動目標をもとに話し合い、どうやってけがを減らすのかが分かるポスターを作るという目的を明らかにする。

解決の計画	T：どんなことを載せたら、打ぼくを減らせそうですか。 C：打ぼくが、いつ、どこで多いか等を知らせたらいいと思う。 T：自分でどんなけがを減らしたいかを決めて、どうすればそのけがが減らせるのかが分かるポスターにしましょう。 どうすればそのけがを減らせるかが分かるように、今日は自分の決めたけがについて詳しく調べましょう。 のけがを減らすために、表にまとめて調べよう。 T：どんなけがについて調べたいですか。 C：一番多かった打ぼくについて調べたい。 C：室内のけがについて調べたい。 C：休み時間のけがについて調べたい。 T：自分が決めたけがを減らすためには、どんなことを調べていきたいですか。 C：打ぼくが、どんな場所が多いか調べたい。 C：室内のけがは雨の日が多いと思うから、教室のけががあった日の天気を調べたい。 C：休み時間にどんな種類のけがが多いのかを調べたい。	- 自分の減らしたいと思うけがを決め、そのけがを減らすためには、何について調べるかを考えることで、本時の活動に目的意識をもてるようにする。 - 選んだ二つの項目を表の題名としてノートに記入させ、各自が調べる課題を明確にする。
自力解決	○資料から必要なデータを収集し、表に整理する。 T：調べた人数を表にまとめましょう。表から、分かったことや気付いたこと書きましょう。 C 1：打撲 の <u>けがをした時間</u> 調べ C 2：すりきず の <u>けがをした場所</u> 調べ C 3：校庭 の <u>けがの種類</u> 調べ C 4：教室 の <u>けがをした時間</u> 調べ C 5：授業中 の <u>けがの種類</u> 調べ C 6：昼休み の <u>けがをした場所</u> 調べ C 7：晴れの日 の <u>けがをした時間</u> 調べ C 8：雨の日 の <u>けがをした場所</u> 調べ	- 一覧表の中から、自分が調べたいデータの部分にだけ、印を付けさせる。 - 正の字を書いて人数を調べ、表にまとめた後、表から分かったことを記述するように指示をする。 ★目的に合わせてデータを収集・整理して表を作り、読み取ることができる。
集団検討	○表から読み取ったことを話し合う。 T：表から分かったことを発表しましょう。 C 1（種類×時間）について - 打撲は、休み時間が多いが、授業中でも7人いる。 - すり傷は、休み時間が多い。 C 2（種類×場所）について - 打撲は、教室・校庭・廊下の順に多い。 - すり傷は、校庭が多く、あとはあまりない。	打撲について調べて分かったこと、場所について調べて分かったことなど、減らしたいけがの内容別に発表をする。

C 3（場所×種類）について

- ・校庭は、すりきず・打撲の順が多い。
- ・室内は、打撲が多い。

C 4（場所×時間）について

- ・校庭はほとんどが休み時間。授業中は4人いる。
- ・教室はほとんどが休み時間。授業中は3人いる。

C 5（時間×種類）について

- ・休み時間は、打撲・すり傷の順に多い。
- ・授業中は、打撲が多く、あとはあまりない。

C 6（時間×場所）について

- ・休み時間は、校庭と教室が多い。
- ・授業中は、けがをした場所に違いはない。

C 7（天気×種類）について

- ・晴れの日、打撲・すり傷が多い。
- ・雨の日、打撲が多い。

C 8（天気×場所）について

- ・晴れの日、ほとんどが校庭。教室は5人いる。
- ・雨の日、教室・廊下が多い。

T：天気によって、けがをした場所がどれだけ違うのか、表を比べてみましょう。

晴れの日、けがをした場所調べ		くもりの日、けがをした場所調べ		雨の日、けがをした場所調べ	
場所	人数	場所	人数	場所	人数
校庭	20	校庭	12	教室	14
教室	5	教室	8	廊下	7
廊下	2	廊下	4	体育館	2
体育館	1	体育館	1	図工室	1
図工室	1	図工室	1	家庭科	1
家庭科	0	家庭科	0	合計	25
合計	29	合計	26		

C：天気が悪くなると、教室が多くなっている。

C：晴れの日やくもりの日は、校庭が使えるから教室のけがが減っている。

T：ポスターを作る時、けがを減らすためにどんなことに気を付けようと呼び掛けたらいいですか。

C：天気が悪くて教室で遊ぶときは、走ったりしない。

C：雨の日は校庭が使えないから教室で静かに過ごす。

- ・C 1～C 6について表にまとめて分かった結果を発表するだけでなく、けがの種類・けがをした場所・けがをした時間に、どのような関係があるかを考えて話し合う。
 - ・けがの多い時間や場所で、どのように過ごせば、けがを減らせるかについて話し合い、ポスターで呼びかける内容を考える。
 - ・C 7、C 8は、晴れの場合と雨の場合を取り上げ、天候によって結果に違いがあることに気が付かせる。
 - ・自力解決時に作成した表の中から、天気×場所のものをを選び、提示する。
 - ・複数の表を比べて、天気が悪くなると、校庭でのけがが減り、教室や廊下など室内のけがが増えることに気付かせる。その際、表のどの部分を見ると分かるかを発表させ、表の見方を共有する。
 - ・晴れの日や雨の日に、どんなことに気を付けて過ごせば、けがを減らせるかを話し合い、ポスターで呼びかける内容を考える。
- ★目的に合わせてデータを収集・整理して表を作り、読み取ることができる。

まとめる	○表やグラフにまとめるよさを話し合う。 T:表にまとめると、どのようなよさがありますか。 C:どうすればけがを減らせるかがよく分かった。 C:一つのことに注目すると、そのことがどうなっているかがよく分かる。 C:表にまとめると、何が多いか調べやすい。 ○生活や学習に活用できる場面を考える。 T:これから、表やグラフをどのようなことに使いたいですか。 C:係でクラス遊びのアンケートを取って表にまとめたい。 C:クラスの友達に好きな○○について聞いてみたい。 C:理科で温度を調べて、表やグラフにしたい。 ○本時の学習を振り返る。 T:今日の学習のふり返りを書きましょう。 ① 自分の考えをもつことができた。 ② 算数ってすごいと感じた。 ③ 今日の学習が生活の中でも使えそうだ。 C:表やグラフは係活動でも使いたと思った。 C:表にまとめるといろいろなことが分かった。	・表に表したことで、けがを減らすために何に気を付けたらよいか分かったことに着目させ、分類・整理するよさに気付けるようにする。 ・本単元で学習したことを、どのような場面で活用できるか考えさせる。 ・三つの観点を提示して、5段階で自己評価する。なぜその自己評価になったのかについても、記述するように指示する。
------	---	--

8 考察

- 自校のけがに関する資料について話し合い、学習目標を設定したことで、児童の意欲を引き出すことができた。目的が明確になり、すすんで調べ、表やグラフに表すことができた。
- 表やグラフをもとに考察をすることで、身近な生活との関連を図った話し合いができた。
- 表やグラフが他にどのような場面に使えるかを考えたり、表やグラフから分かったことを日常生活にどのように生かすことができるかを考えたりすることで、生活や学習に活用しようとする意欲を引き出すことができた。単元学習後には、理科や社会科、係活動などで、グラフや表をすすんで活用しようとする姿が見られるようになった。



グラフと表のべん強をして、グラフのよい所は、一目、見ただけで大きさが分かること、表のよい所は人数がすぐ分かることで、グラフと表いろいろなところがあることが分かった。グラフと表をまたいろいろな所で使ってみたいです。

・表は数が多いじゃんを書くことが分かった。
・算数は自分たちの生活の中で生かせることが分かった。

実践事例（２）

１ 単元名 「比例をくわしく調べよう」（６年）

２ 単元の目標

○伴って変わる二つの数量の関係を考察することを通して、比例や反比例の関係について理解し、関数の考えを伸ばす。

関心・意欲・態度	数学的な考え方	技 能	知識・理解
・比例の関係に着目するよさに気づき、比例の関係を生活や学習に活用しようとする。	・比例の関係を表や式、グラフに表し、特徴を一般化してとらえ、身の回りから比例の関係にある二つの数量を見出して問題の解決に活用することができる。	・比例や反比例の関係にある二つの数量の関係を式、表やグラフに表すことができる。	・比例や反比例の意味や性質、表やグラフの特徴について理解する。

３ 単元について

本単元のねらいは、関数の考えの育成である。小学校における関数学習の総括として比例を本格的に扱い、その性質や特徴を明らかにしていく。本単元は、伴って変わる２量を探し出し、変化の特徴を見つけ、その特徴を式や表、グラフで表現し、学習したことを活用する、という関数の考えを育成する流れで構成する。

低中学年で学習してきた乗法の場合、実は比例関係を前提としている。また、第５学年の単元「直方体や立方体の体積」では、直方体の高さや体積において、底面積を固定して、直方体の高さを２倍、３倍、…にすると、それに伴って体積も２倍、３倍、…になることを調べる学習をした。そして、表を書いて、簡単な場合について比例の関係「二つの量□と○があって、□が２倍、３倍、…になるとき、それに伴って○も２倍、３倍、…になるとき、○は□に比例する」を知らせ、用語「比例」も扱ってきている。

単元の後半で反比例を扱うが、これは、反比例の学習を通して、比例の理解をより深めるためである。

４ 研究主題との関連

学習指導要領にも、「算数的活動」の例として「身の回りから、比例の関係にある二つの数量を見付けたり、比例の関係をを用いて問題を解決したりする活動」が記されている。本単元では、身近な生活の中から事象を算数の舞台にのせ、比例の関係をを用いると手際よく問題を解決することができるよさを味わわせていく。その際、以下の点を重視した指導を行う。

指導のポイントー身近な生活と算数のつながりを重視する

１ 条件を整理し、身近な生活を日常の事象として学習に取り入れる過程を重視する。

教科書では既に理想化された場面で理想的な数値が扱われている。ところが、現実の場面を算数の問題として扱う際には、「どこまで伸ばしても均一の～」 「いつまでも一定の速度で～」など問題解決の最初に吟味していかなければならない事柄が多い。問題設定の場面や問題解決の見通しの段階で時間をかけながら丁寧に扱っていく。

2 単元を通した学習目標を児童とともに設定し、数学的な考え方の意識化を図ったり学習を身近な生活につなげたりする

比例の利用の場面で、一見比例の関係が使えるようにない場面をあえて扱うようにする。本単元では「比例関係を用いることのよさ」を十分味わわせていく。

3 算数で学んだ知識や技能、特に数学的な考え方を活用した数理的なよさが実感できる学習展開にする。

単元を通して考察するのは、伴って変わる二つの量の関係である。この二量の変化に着目しながら考えていけるように、単元の最初に2量の変化に着目する意識付けを行う時間をとる。

授業づくりのポイント ～算数の目で身近な生活を見る経験を豊かにする授業～

1 日常の事象を基に児童自らが条件を設定して問題をつくる。(問題設定と把握)

検証授業はちょうどハロウィンの頃に行った。生活の場面と飴の個数を数えることに関連があり、学習問題に必然性をもたせることができた。飴を提示することで、「全部で何個あるの？」という自然な問いを児童から引き出すことができた。

2 日常の状況から問題解決に必要な情報や条件を選択し、解決の計画を立てる。(解決の計画)

本時は、重さも大きさも異なる飴が混在している。一見比例関係が使えないように思えるが、「比例関係が成り立つと見なす」ことで解決の見通しが見えてくる。

3 日常生活での経験に基づいて、解決の結果を根拠にして自分の考えをもつ。(自力解決)

あめ1個と飴全体の重さを比較する、あめ10個とあめ全体の重さを比較する、など方法はいろいろある。また、平均値をとるなど、より信頼のある数値を追求しながら問題を解決させたい。

4 日常生活を意識して数理的な処理のよさを検討する。(集団検討)

問題を解決する際に有効に働いた数学的な見方・考え方を中心に検討していく。本時では、「平均をとる」「比例と見なす」という見方・考え方を価値づけていく。

5 単元の導入で取り上げた数学的な見方考え方や活動目標を振り返り、身近な生活への活用を意識する。(まとめと発展)

日常では、比例関係を用いることができる場面は多い。二つの伴って変わる量に着目し、比例関係を活用して問題解決できそうな場面を学習感想などに書かせ、意識付けしていく。

5 児童の実態

技能面を中心に個人差はあるが、本学級では、「算数の授業は楽しい」と感じている児童は多い。問題解決型の学習を通して、友達からいろいろな解決方法、考え方が出てきて、それらに潜む共通した大事な考え方を見出したり、よさを追求したりすることに楽しさを感じている。しかし、学んだことを身の回りの生活に活用した経験はかなり少ない。

6 指導計画

時	目 標	学 習 活 動	おもな評価規準
1	単元を通して用いられる数学的な見方、考え方が分かる。 伴って変わる二つの量の関係に着目して考えよう。	・教科書 p 2～3 のいくつかの場面で、一方の量が増え、もう一方の量も増えている2量の変化に着目し、考える。	関 伴って変わる2量に着目している。 関 既習を生かし、比例関係を見出している。
比例の式	2 yがxに比例するとき、 $y = \text{決まった数} \times x$ と表せることを理解する。	・比例の関係を式に表す方法を考える。 ・水の深さを時間でわった商はどうなるか調べる。	関 比例の関係に興味をもち、その関係を式に表そうとしている。

	3		・ y が x に比例するとき、y を x でわった商は一定で、その関係を一般的な形の式に表せることをまとめる。	技 比例の関係を式に表すことができる。
比例の性質	4	比例の性質について理解する。	・ 比例する二つの量の関係には、どんな性質があるか調べる。 ・ y が x に比例するとき、x の値が0.5倍、2.5倍などになると、それに伴って y の値も0.5倍、2.5倍になることをまとめる。 ・ y が x に比例するとき、x の値が$\frac{1}{2}$倍、$\frac{1}{3}$倍などになると、それに伴って y の値も$\frac{1}{2}$倍、$\frac{1}{3}$倍になることをまとめる。	知 y が x に比例するとき、 x の値が小数倍、分数倍になると、それに伴って y の値も同じ小数倍、分数倍になることを理解している。
比例のグラフ	5	比例の関係をグラフに表して考察することができ、比例のグラフの特徴を理解する。	・ 水の深さが水を入れる時間に比例する関係をグラフに表して、その特徴を調べる。 ・ 式から求めた2量の組み合わせをグラフに表す。	技 比例の関係をグラフに表したり、グラフから読み取ったりすることができる。
	6		・ 比例のグラフは原点を通る直線になることをまとめる。 ・ 比例のグラフから、x や y の値を読み取る。	知 比例のグラフは原点を通る直線になることを理解している。
	7	比例のグラフを考察することを通して、比例のグラフについて理解を深める。	・ 二つの比例のグラフからいろいろなことを読み取る。 ・ 比例していない関係をグラフに表すと、どのようなグラフになるか調べる。	技 傾きの異なる二つの比例のグラフから、それぞれの特徴や事象の様子などを読み取ることができる。
比例の利用	8	比例の性質を活用し、問題を解決することができる。	・ 針金鉄砲に使われている針金の長さを、鉄砲を壊さないで求める方法を考える。 ・ 針金の長さや重さは比例していることをとらえ、問題を解決する。	考 比例の関係にある二つの数量を見付け、比例の性質を問題の解決に用いることができる。 知 比例の性質を理解している。
	9 本時		・ 大きさや重量が異なる飴が混在している大量の飴があり、その飴全部の個数を	関 比例の関係が成り立つとみて日常の事象を数理的に処理しよ

			求める方法を考える。 平均の考え方をういたり、比例関係が成り立つとみたりして問題を解決する。	うとしている。 考 比例の関係にある二つの数量を見付け、比例の性質を問題の解決に用いることができる。
反比例	10	反比例の意味について理解する。	- 面積が決まっている長方形や、周りの長さが決まっている長方形の縦や横の長さの変わり方を調べる。 - 縦の長さが2倍、3倍、…になると、横の長さはどう変わるか調べる。	関 二つの量の変わり方に興味をもち、表を使ってその関係を調べようとしている。
	11		- 用語「反比例」を知る。 - 一方が増えると、もう一方が減るという関係が必ずしも反比例ではないことを確かめる。	知 反比例の意味を理解している。
	12	反比例の関係は、 $y =$ 決まった数 $\div x$ と表	反比例の関係を式に表す方法を考える。	関 反比例の関係に興味をもち、その関係を式に表そうとしている。 技 反比例の関係を式に表すことができる。
	13	せることを理解する。	y が x に反比例するとき、x と y の積は一定で、その関係を一般的な形の式に表せることをまとめる。	
	14	反比例の性質について理解する。	- 反比例する二つの量の関係には、どんな性質があるか調べる。 y が x に反比例するとき、x の値が1/2倍、1/3倍…になると、それに伴って y の値は2倍、3倍、…になることをまとめる。	考 反比例する二つの量の関係について、比例の関係を基に、表などを用いて調べている。 知 y が x に反比例するとき、x の値が1/2倍、1/3倍…になると、それに伴って y の値は2倍、3倍、…になることを理解している。
	15	反比例の関係をグラフに表して考察することができ、反比例のグラフの特徴を理解する。	反比例する関係をグラフに表して、その特徴を調べる。	技 反比例の関係をグラフに表したり、グラフから読み取ったりすることができる。 知 反比例のグラフの特徴を理解している。
まとめ	16	学習内容の定着を確認し、理解を確実にする。	「しあげのもんだい」に取り組む。	知 基本的な学習内容を身に付けている。

7 本時の指導（9 / 16）

（1）目標

- ・ 比例の関係が成り立つとみて日常の事象を数理的に処理しようとする。
【関心・意欲・態度】
- ・ 2 量の関係（重さと個数）に着目し、比例の考えを活用して問題を解決する。
【数学的な考え方】

（2）展開

学習過程	主な発問と予想される児童の反応	評価★ 留意点・
問題設定と把握	○テーブルに置かれた（あめの入った）大きな袋を目にする。 C えーっ！何が入ってるの？ C なんだろう?! ○袋の中身をテーブルの上に出して見る。 C すごーい！ずいぶんたくさんあるね。 C いろいろな種類の飴が交じっている。 C こんなにたくさんの飴をどうするんですか？ ○問題をつくる。 T1 ハロウィンが近いので、どこかで使えないかなと思ってさ。 C やったー。たくさんあるから6年生みんなに配ろうよ。 C 何個ずつ配れるかな？ C 全部で何個あるのですか？ T2 先生も何個あるか分からないので、それを今日の問題にしましょう。 全部であめは何個ありますか？	・ 大きさ、重量が異なるあめを1000個くらい用意する。 （量販店で50袋ほど購入） ・ 算数の学習を目的のある活動にする。 ・ 「全部で何個？」という問いを児童から引き出したい。
解決の計画	○必要な情報や条件を選択し、解決の計画を立てる。 T3 あめの個数は求められそうですか？ C 前の時間にやった針金の長さは、どこも同じ太さで均一の重さだったけれど、今日はあめの種類も何種類かあって、1個の重さも異なっている。だから、1個の重さと全体の重さを調べても個数は求められないと思います。 C 種類はいろいろあるけれど、どこも種類が偏ることなく交じっていると考えれば 比例が使えると思います。	・ 日常の事象を算数の舞台にのせることを丁寧に時間をかけて扱う。 ★前時までと条件が異なっていることに気付いている。 ★平均の考えに基づき、偏りなく数種類のあめが交じっていると考え、比例を活用しようとしている。 （算数の舞台に乗せようとしている）〔理想化〕
	○既習を活用しながら、自力解決する。 T4 あめのおよその個数を工夫して求めてみましょう。	

自力解決	C1 適当に選んだあめ 1 個 4.8 g 飴全体 () 個 7100 g $7100 \div 4.8 = 1479$ 答 約 1480 個 C2 適当に選んだ飴 10 個の重さから平均を求め、1 個の重さを算出する。 平均 1 個の重さ 5.1 g あめ全体 () 個 7100 g $7100 \div 5.1 = 1392$ 答 約 1400 個 C3 9 種類のあめの飴の重さを平均して、1 個の重さを算出する。 平均 1 個の重さ 6.1 g あめ全体 () 個 7100 g $7100 \div 6.1 = 1163$ 答 約 1200 個 C4 適当に選んだあめ 10 個の重さを量る。 何回か繰り返し、10 個の重さの平均をとる。 平均 10 個の重さ 58.8 g あめ全体 () 個 7100 g $7100 \div 58.8 = 120.7$ $10 \times 120.7 = 1207$ 答 約 1200 個 C5 適当に選んだあめ 20 個を長方形の形に並べ面積を測ると約 $\nabla \text{ cm}^2$ あめ全部を並べて面積を調べたい。 C6 分からない。	★既習を活用して問題を解決しようとしている。 ・あめ全体の重さを体重計を用いて量り、情報として共有する。 [ヘルスマーターの用意] ★比例を活用して問題を解決することができる。 ・C5 に対して、アイデアは認めるが、実際にはやらせない。全部並べてしまうと単純なかけ算で個数を求められてしまう。 ・C6 に対して、前時を想起させ、C2 や C3 や C4 の方法を示唆する。
集団検討	○問題解決に有効だった数学的思考方を検討し、数理的な処理のよさを実感する。 T5 あめの個数をどう求めたか発表してください C1～C4 の考え方を発表する。 T6 それぞれの求め方を比較して、共通点は何でしょう？ C6 C2、C3、C4 は平均を使っています。 C7 計算しやすく 10 個をもとにして計算しています。 C8 みんな比例関係が成り立つことを前提に問題を解決しています。	★数値のばらつきが大きいので平均をとっていることに気付いている。 ★数値の取り方によって得られる結果に差があることに気付いている。
まとめと発	○学習を振り返り、身近な生活への活用を考える。 T 学習感想を書きましょう。 ①今日の学習で分かったことは？ ②他に比例を使えそうな場面として思	★比例を活用することのよさに気付いている。

展	い浮かぶ場面は？ C 比例と見なすということが分かった。 C ペットボトルのキャップのおよその個数を求めること。 C リボンの長さを求めること。 C 30分並んで○m進んだので、あと□分で先頭まで行ける。	
---	---	--

8 考察

- 場面提示で大量のあめを見たとき、児童から「うわーっ！」と歓声が上がった。スムーズに全部で何個あるのか？という問題設定ができた。
- 解決の計画では、予想どおり「いろいろな種類のあめがあり、一つ一つのあめの重さが違うから比例は使えないのでは…」という意見が児童から出された。たしかに、前時は、およそ均一の太さや重さに見える針金を扱っていたので、比例関係を見つけやすかった。ところが、本時は明らかに重さも大きさも異なるあめが対象なので当然の反応と思う。しばらくの沈黙のあと、ある児童から「ランダムに10個選び、その10個の重さと飴全部の重さを調べれば比例が使える。」という意見が出され、教室に活気が戻った。まさに突破口を開く発言だった。
- 次の時間、児童がどうしても「実際に数えてみたい！」というので数えてみた。結果は、1,203個だった。「ランダムに飴10個を10回選び、平均をとる」というC4の正確性が実証された。

感想
 こんなにたくさんのあめをたいたいたナと
 求めることができました。
 10個や切りのいい数でやると求めやすかったです。



今日の感想
 平均をとることで、より正確な数を求められたと思います。いつもと違うパターンで求めることができ、楽しかったです！



Ⅲ 成果と課題

成果

- ◎ 初めに育てたい態度や能力を明確にしたことで、その態度や能力を育てるために重視したい指導のポイントや、実際の授業づくりの際のポイントが明らかになり、それを踏まえた上で身近な生活と算数の接点を重視したり、身近な生活を算数の目で見える経験を豊かにしたりするような授業実践を行うことができた。
- ◎ 理想化された数値や条件、場面を扱うだけではなく、「いろいろな種類のアメの数」「自分の学校のけが調べ」などの身近な生活の中の場面を取り上げ、児童と共条件を設定しながら問題をつくり、算数の舞台にのせて数理的に処理できる形にしていく過程を大切にしたい授業をつくることができた。そうすることで、児童たちが自ら問題意識をもち、身近な生活から生まれた問題を、数学的な考えを主体的に活用して解決する姿がみられた。
- ◎ 「けがをへらそう」のように生活につながり、単元全体にかかわる学習目標を取り入れたり、単元を通して数学的な考え方を意識させたりすることで、身近な生活を取り上げた際に、目的意識をもって学習したり、身に付けた数学的な考え方を活用しようとしたりする姿がみられた。

課題

- 身近な生活を問題として取り上げることで問題設定に多くの時間を費やしてしまい、実際に解決後、その数理的な処理のよさについて検討したり、その考えが他の場面でも使えそうか広げたりする場면을1単位時間の授業の中に取り入れることが難しい。
- 研究1年次であり、期間が短いため、実践を重ねたことで児童にどのような変容が見られたのかについては十分に検証できていない。特に数理的な処理のよさを児童が実感しているかについて評価するには至っていない。今後、児童の実態調査を行い、実践の効果についての検証をする必要がある。
- 身近な生活と算数をつなぐことに重点を置いて研究を進めたが、算数で学習したことを新しい算数の学習に生かすことについての研究が十分ではなかった。算数ではどの単元でも数学的な考え方を生かして問題を解決していく場面があるが、その中でも児童自身が「算数を活用している。使っている。」ということを実感できるような授業について追究していく必要がある。

＜小学校理科研究開発委員会＞

研究主題・副主題

「学んだことを活用し、主体的に問題解決することで

科学的な見方や考え方を養う指導の工夫 ～教材及び指導方法の開発を通して～」

研究の概要

学習指導要領の改善の基本方針では、理科を学ぶことの意義や有用性を実感する機会をもたせ、科学への関心を高めることなどを柱とした方針が示されている。学んだことを基にして学習の理解を深めるとともに、自然の事物・現象への見方や考え方を養うことが重要である。そのためには、学んだことを学習や生活の中で活用することが大切である。児童が学んだことを活用して学習を進めたりまとめたりすることは、学ぶことの意義や有用性を実感することにもつながる。

本研究では、問題解決の学習の中で、学習したことを実生活と関係付けて実感を伴った理解を図る学習とするために、活用場面を意図的に位置付けるとともに、指導の在り方について研究開発を行う。

- (1) 理科の学習における活用する力を明らかにする。
- (2) 問題解決の過程で、学んだことを活用する力を育てるための指導の位置付けを明らかにする。
- (3) 学んだことを活用する力を高めるための指導の在り方を明らかにする。

以上のことを、「問題解決の過程において、活用すべき力を明確にし、意図的に指導することで、資質・能力を効果的に育てることができるであろう。」と、仮説を設定し、実践を通して検証する。

I 研究の目的

理科を学ぶことの意義や有用性を実感する機会をもたせ、科学への関心を高めることが学習指導要領の改善の基本方針で示されている。全国学力・学習状況調査の結果においても、観察・実験の結果を整理したり考察したりすることや科学的な言葉や概念を使って考えたり説明したりすることは課題となっている。

自然の事物・現象に対して、学んだ知識や経験を基に考えることは実感を伴った理解をさせていく上でも重要なことである。学んだ知識や技能、科学的な見方や考え方を学習や生活の場面で生かすことなど、学んだことを活用して自然の事物・現象について考えたり、検証したりすることが大切である。

そのために、理科の学習においては、問題解決の過程で内容を理解し、問題を解決するだけでなく、生活の中で適切に活用できる力を育てていくことが必要である。学習した内容をより深い理解につなげるために、指導の中で学んだことを活用する場면을意識して、学習を振り返らせる場面を設け、意図的に指導する。こうした指導を積み重ねることが、児童一人一人が学

ぶことの意義を感じ、理解を深め、学習活動に意欲的に取り組むことにつながる。

本研究では、問題解決の過程における活用する力を明確にし、その力を育てる指導の位置付けを明らかにするとともに、それを高めるための教材及び指導方法の開発を目的とする。

Ⅱ 研究の方法

1 研究の視点

- (1) 理科の学習における活用する力を明らかにする。
- (2) 問題解決の過程で、学んだことを活用する力を育てるための指導の位置付けを明らかにする。
- (3) 学んだことを活用する力を高めるための指導の在り方を明らかにする。

2 研究の仮説

理科の学習において、実感を伴った理解をさせるためには、学んだことを活用する力を明確にし、それを活用して問題を解決するなどの有用感をもたせることが大切である。こうした力を育むために、以下の仮説を設定し、実践を通して検証する。

「問題解決の過程において、活用すべき力を明確にし、意図的に指導することで、資質・能力を効果的に育てることができるであろう。」

3 研究の方法

学んだ知識や技能、科学的な見方や考え方をどのように活用するのかを明確にし、活用する力を育成するための指導の位置付けや、具体的な教材及び指導方法の開発を行う。

なお、本研究では、児童が学んだり経験したりしてきたことや観察・実験から児童が身に付けた見方や考え方を学習や日常生活に関係付けて考え、活用させるための指導について、主として研究する。そして、授業における活用する力について考察し、児童が自然の事物・現象を自分の知識や経験・体験と結び付ける力を育むことができるような指導方法を探る。

Ⅲ 研究の内容

1 理科の学習における活用する力

児童が学んだ知識や技能、科学的な見方や考え方を活用する力を高めていくには、児童が身に付けてきた知識や技能、科学的な見方や考え方を使って課題について考えられるような場をつくり、的確に働きかけていくことが必要である。そこで、本研究では、活用する力を次のように

- 観察・実験の結果を日常の生活や体験・経験と関連付けて考える力
- 新たな場面において、条件を制御して観察・実験を計画する力
- 観察・実験の結果や情報を分析して、全体の傾向や共通性を捉えて考察する力
- 観察・実験の結果を基に自分の考えを見直し、改善する力

の四つに分けて考え、学習指導においてどのように位置付けていくのかを探る。

2 理科の学習における活用する力を育てる指導の位置付け

問題解決の過程において活用する四つの力を【図1】のように活用場面①から⑥を位置付けることとした。第一の「観察・実験の結果を日常の生活や体験・経験と関連付けて考える力」は、自然の事物・現象への働きかけで学習してきたことや体験・経験した知識や技能を事象に当てはめて予想・仮説を立てている部分と、知識や技能を他の事象に当てはめて自然の事物・現象や日常生活に適用している部分とに分けて考えた。そして、図の中の「活用場面①」と「活用場面④」の場面に位置付けた。第二の「新たな場面において、条件を制御して観察・実験を計画する力」は、問題を把握し、解決の方法を構想したり、問題の解決を想定したりする部分と考え、「活用場面②」に位置付けた。第三の「観察・実験の結果や情報を分析して、全体の傾向や共通性を捉えて考察する力」は、観察・実験の結果などについてその要因や根拠を考察し、説明している部分と考え、「活用場面③」に位置付けた。第四の「観察・実験の結果を基に自分の考えを見直し、改善する力」は、他者の予想・仮説の考えを認識して自分の考えを改善している部分と、考察での自分の考えを改善している部分とに分けられると考え、それぞれ「活用場面⑤」と「活用場面⑥」に位置付けた。

また、理科の各単元において、学習から得た自然の事物・現象の性質や働き、規則性などに関する知識や技能、科学的な見方や考え方や体験・経験を、予想・仮説を立てる場面で活用できるものや、実際の自然の事物・現象や日常生活に適用できる内容の例を【資料1】のように整理した。

3 活用する力を育てる指導の工夫

問題解決の過程において活用する力を育成するために【図1】に位置付けた活用場面にしたがって次のような授業展開を追究する。

(1) 観察・実験の結果を日常の生活や体験・経験と関連付けて考える力を育成する

自然の事物・現象の性質や働き、規則性などを他の自然の事物・現象に適用して解釈していくために、既習事項や生活の中での体験・経験を自然の事物・現象と結び付けて考える場面を学習の中に意図的に取り入れる授業展開を追究する。また、単元の終末に、その単元で学習した科学的な見方や考え方を他の自然の事物・現象に適用できる学習を設定し、学習したことを使って説明させる場をつくり、学んだことを自然の事物・現象に適用する力を高められるようにする。

(2) 新たな場面において、条件を制御して観察・実験を計画する力を育成する

自然の事物・現象に対して自ら見いだした問題について予想や仮説をもち、実験計画を構想する力を高めるために、変化とその要因とを関係付けられるよう、変化の要因を整理し、変化させる要因と変化させない要因を区別して、観察・実験の結果を比較できるような授業展開を追究する。

(3) 観察・実験の結果や情報を分析して、全体の傾向や共通性を捉えて考察する力を育成する

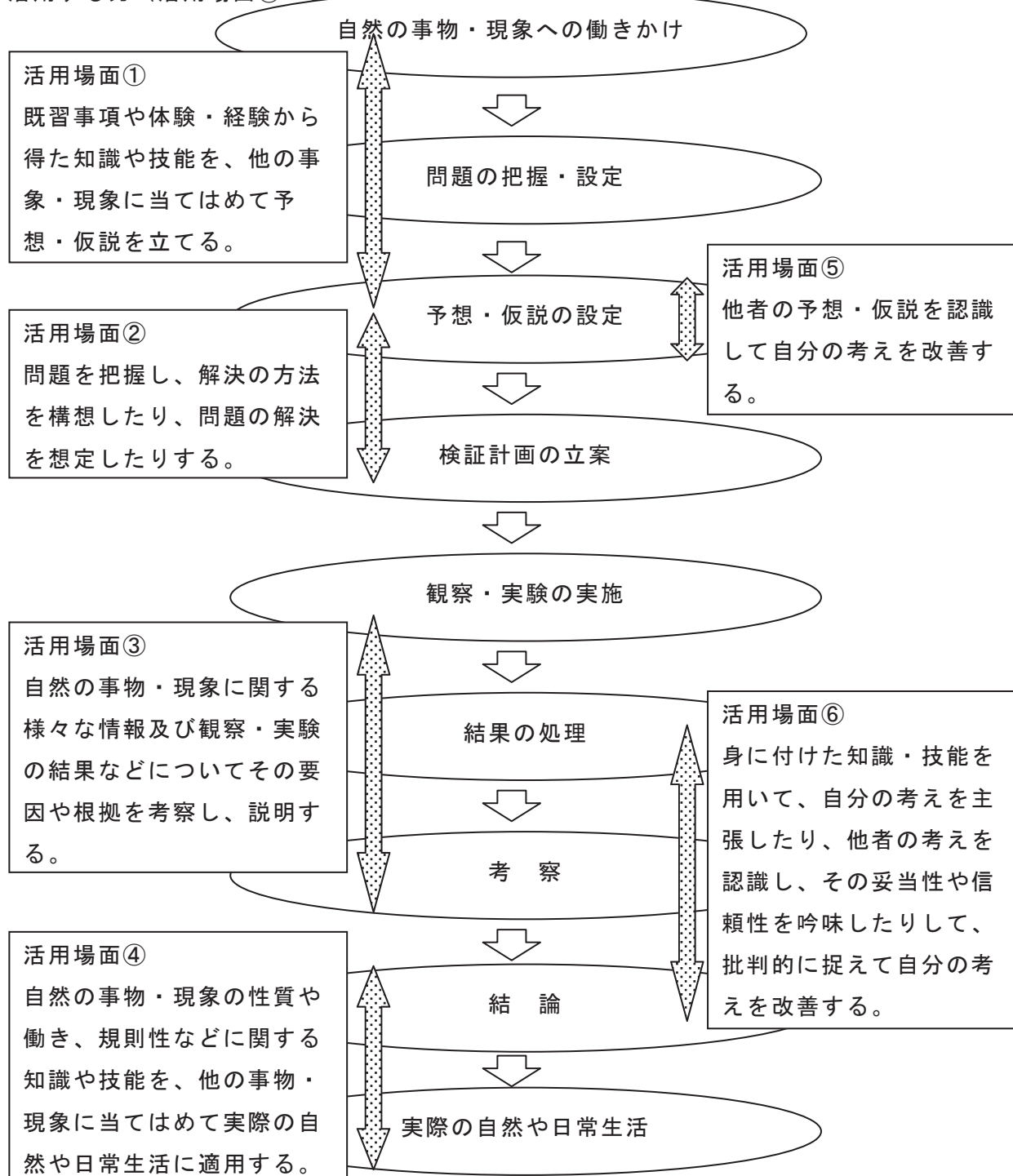
観察・実験の結果を分析して、全体の傾向や共通性を捉え、考察する力を高めるために、提示された自然の事物・現象について生活の中での体験・経験や既習内容を基に、自ら問題を見だし、目的意識をもって複数回の観察・実験の記録を整理してまとめ、多面的に考えることができるような授業展開を追究する。

(4) 観察・実験の結果を基に自分の考えを見直し、改善する力を育成する

観察・実験の結果を基に自分の考えや実験方法を見直し改善する力を高めるために、予想や仮説と観察・実験の結果を比較して自分の考えを他者に主張したり、他者の考えと共有化を図ったりすることなどによって、自分の考えを改善できるような授業展開を追究していく。さらに、観察・実験の結果について、方法が妥当なのか、信頼性があるのかなどの多様な観点から吟味して、批判的に捉えて自分の考えを改善できるような授業展開を追究する。

【図 1】問題解決における活用する力の位置付け

活用する力（活用場面①～⑥）



4 実践事例 1 第4学年「金属、水、空気と温度」

1 研究主題との関連

＜観察・実験の結果を日常の生活や体験・経験と関連付けて考える力を育成する＞

(1) 既習事項や生活の中での体験・経験を自然の事物・現象と結び付ける

「空気と水の性質」で学習した閉じ込めた空気及び水に力を加えたときの体積変化や空気と水の性質の違い等を、本単元の学習においても予想の根拠や考察の際に活用させることで、空気及び水の性質についての見方や考え方の定着を図ることにつなげる。

(2) 学んだことを自然の事物・現象に適用する

学習の中で学んだ知識や技能、科学的な見方や考え方について、児童は、その単元の中での理解はしているが、場面が変化するとその学んだ見方や考え方を生かすことができない場合が多い。そこで、知識として身に付けた性質や働き、規則性などを結び付けて考える場面を以下のように、単元の中に意図的に設定することで、知識や技能・科学的な見方や考え方のより確実な定着と日常生活に生かす力を育てる。

① 金属・水・空気のそれぞれの実験から結論をまとめる中で、学習に関連する日常生活での事象について考える場面をつくる。

② 単元の終末にものづくり「ペットボトル噴水」を行う

ペットボトル噴水とは、耐熱性のペットボトルに小さな穴を開け、その中に水と空気を入れた物で、ドライヤーや熱湯でペットボトルを温めるとペットボトルの穴から水が飛び出るという仕組みである。ペットボトル内には、水と空気の両方が入っているが、水よりも空気の体積変化が大きいことから、空気の体積変化によって水が飛び出ること気付かせる。

2 単元の目標

金属、水及び空気の性質について興味・関心をもって追究する活動を通して、温度の変化と金属、水及び空気の体積の変化とを関係付ける能力を育てるとともに、それらについて理解を図り、金属、水及び空気の性質についての見方や考え方をもつことができるようにする。

(内容)

金属、水及び空気を温めたり冷やしたりして、それらの変化の様子を調べ、金属、水及び空気の性質についての考えをもつことができるようにする。

ア 金属、水及び空気は、温めたり冷やしたりすると、その体積が変わること。

3 評価規準

自然事象への 関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然事象について の知識・理解
・金属、水及び空気を温めたり冷やしたりしたときの現象に興味・関	・金属、水及び空気の体積変化の様子と温度を関係付けて、それ	・加熱器具を安全に操作し、金属、水及び空気の体積変化を調	・金属、水及び空気は、温めたり冷やしたりすると、その体

心をもち、進んでそれらの性質を調べようとしている。 ・物の温まり方の特徴を適用し、身の回りの現象を見直そうとしたり、ものづくりをしたりしている。	らについて予想や仮説をもち、表現している。 ・金属、水及び空気の体積変化の様子と温度変化を関係付けて考察し、自分の考えを表現している。	べる実験やものづくりをしている。 ・金属、水及び空気の体積変化の様子を調べ、その過程や結果を記録している。	積が変わることを理解している。
---	--	--	-----------------

4 単元について

本単元は「粒子」についての基本的な見方や概念を柱とした内容のうちの「粒子のもつエネルギー」に関わるものであり、中学校第1分野「(2)ウ 状態変化」の学習につながるものである。

ここでは、金属、水及び空気の性質について興味・関心をもって追究する活動を通して、温度の変化と金属、水及び空気の体積の変化とを関係付ける能力を育てるとともに、空気は温度によって体積が変わることや、体積が変わらないように見える水や金属も温度によって体積が変わるという見方や考え方ができるようにすることがねらいである。

単元の展開にあたっては、単元の導入で、栓をした丸底フラスコを湯につけると栓が飛び出す実験や、プラスチックの容器や試験管に閉じ込めた空気を温める実験を行い、前単元で空気に力を加えたときと比較して、温度による空気の体積の変化を考えるようにさせる。その後、試験管を使って空気と水の体積が、温度によって変化するかを調べる。さらに、金属球膨張実験器を使って、温度による金属の変化を調べ、それぞれの体積の変化を温度変化と関係付けたうえで、金属、水及び空気の体積変化の違いを比較して考えることができるようにしている。

5 児童の実態

第3学年では、自然の事物・現象を差異点や共通点に気付いたり、比較したりする能力を育ててきた。第4学年では、自然の事物・現象の変化とその要因とを関係付ける能力を育成することが重点になっている。

児童は、理科の学習において、問題解決の過程を意識するようになってきてはいるが、どのように問題をつくればよいか、予想を立てる際に何を根拠にすればよいか、考察はどのようにして書けばよいかなどについては、それぞれの過程で丁寧に指導していく必要がある。また、自然の事物・現象に対する興味・関心は高く、学習にも意欲的に取り組む児童が多い。しかし、学習したことを生かして身の回りの自然の事物・現象や日常生活を見直す機会が少ないこともあり、生活に生かされていることに意図的に気付かせていく必要がある。

6 指導計画

次	過程	○学習活動	●活用への支援 ☆評価
第1次 空気 の 体積 (4時間)	事象提示 問題 予想 計画 実験 結果 考察 結論	<第1時> ○栓をしたフラスコを温めると栓が飛び出す現象を見る。 ○空気を容器に閉じ込め、いろいろな方法で調べてみる。 - 栓をしたフラスコを温めると栓が飛び出したよ。 - 試験管の口につけたせっけん水の膜がふくらんだよ。 ○温めた容器の栓が飛び出したり、せっけん水の膜がふくらんだりする理由を考える。 - 温められた空気が上へ移動したから。 - 温められた空気の体積が増えたから。 <第2・3・4時> 空気は、温度によって体積が変わるのだろうか。 ○温めたり、冷やしたりしたときの体積の変化について予想する。 - 温めると、体積は増えると思う。 - 冷やすと体積が減ると思う。 ○実験の計画を立てる。 - 丸底フラスコに色水を入れたガラス管をはめ、温めたり冷やしたりして空気の動きをみる。 ○実験する。 ○結果を整理する。 - 丸底フラスコを温めると色水の位置が高くなった。 - 丸底フラスコを冷やすと色水の位置が低くなった。 ○結果から分かったことを話し合う。 - 空気は温められると体積が増える。 - 空気は冷やされると体積が減る。 空気は温められると体積が増え、冷やすと体積が減る。	●既習事項「空気と水の性質」で学んだ閉じ込めた空気や水に力を加えたときの体積変化のことを活用して考えることができるように、ノート等を振り返る時間をつくる。 ☆自然事象への関心・意欲・態度 金属、水及び空気を温めたり冷やしたりしたときの現象に興味・関心をもち、進んでそれらの性質を調べようとしている。 (発言・行動観察) ●見通しをもって実験できるように、空気の体積が温度によって変わるならば、温めたり、冷やしたりしたときのガラス管の中の色水の位置はどのように変化するかを話し合わせながら実験計画を立てる。 ☆科学的な思考・表現 空気の体積変化の様子と温度を関係付けて、それらについて予想や仮説をもち、表現している。 (発言・ノート分析) ☆観察・実験の技能 加熱器具を安全に操作し、空気の体積変化を調べる実験をしている。(行動観察) ☆科学的な思考・表現 金属、水及び空気の体積変化の様子と温度変化を関係付けて考察し、自分の考えを表現している。(発言・ノート分析) ●学習内容をより定着させるために、へこんだピンポン玉を湯につけると元に戻る現象について学習したことをもとに話し合わせる。

第2次 水の体積 (2時間)	問題 予想 計画 実験 結果 考察 結論 <第5・6時> 水も空気のように、温度によって体積が変わるのだろうか。 ○温度による水の体積変化について予想し、実験計画を立てる。 ・丸底フラスコに水を満杯に入れ、ガラス管をはめて、温めたり冷やしたりして水の動きをみる。 ○実験する。 ○結果を整理する。 ・丸底フラスコを温めると水の位置が高くなった。 ・丸底フラスコを冷やすと水の位置が低くなった。 ○結果から分かったことを話し合う。 ・空気は温められると少し体積が増える。 ・空気は冷やされると少し体積が減る。 水も温められると体積が増え、冷やすと減るが、その変化は空気より小さい。	●見通しをもって実験計画を立てられるように空気の実験のことを振り返らせる。 ☆観察・実験の技能 水の体積変化の様子を調べ、その過程や結果を記録している。 (行動観察・ノート分析) ☆科学的な思考・表現 水の体積変化の様子と温度変化を関係付けて考察し、自分の考えを表現している。 (発言・ノート分析) ☆自然事象についての知識・理解 水及び空気は、温めたり冷やしたりすると、その体積が変わることを理解している。 (ノート分析) ●学習内容をより定着させるために、温度計の仕組みについて、学習したことをもとに話し合わせる。
第3次 金属の体積 (2時間)	問題 予想 計画 実験 結果 考察 結論 <第7・8時> 金属も温度によって体積が変わるのだろうか。 ○温度による金属の体積変化について予想する。 ・金属は硬いから、体積は変化しないと思う。 ・空気も水も変化したから、金属も変化すると思う。 ○実験計画を立てる。 ・金属球を温めたり、冷やしたりして金属の環を通るかどうかが調べる。 ○実験する。 ○結果を整理する。 ・金属球を熱すると、環を通らなかった。 ・金属球を水で冷やすと、環を通った。 ○結果から分かったことを話し合う。 ・金属は温めると体積がわずかに増える。 ・金属は冷やすと体積がわずかに減る。 金属も温められると体積が増え、冷やすと減るが、その変化は、空気や水よりもとても小さい。	●空気や水の温度による体積変化の様子、生活の中の経験を思い起こさせる。 ☆自然事象への関心・意欲・態度 金属を温めたり冷やしたりしたときの現象に興味・関心をもち、進んでそれらの性質を調べようとしている。 (行動観察・ノート分析) ☆自然事象についての知識・理解 金属は、温めたり冷やしたりすると、その体積が変わることを理解している。 (ノート分析) ●学習内容をより定着させるために、鉄橋や鉄道のレールの隙間について、学習したことをもとに話し合わせる。

第4次 ものづくり (1時間)	活用	<第9時 本時> ペットボトルふん水は、どのような仕組みで水が飛び出すのだろうか。 ○ペットボトル噴水の現象を見る。 ○ペットボトル噴水の仕組みを予想する。 ○自分の予想した方法で作る。 ○どうすれば、ペットボトル噴水の水を遠くに飛ばすことができるか話し合う。 ペットボトルふん水は、温められた空気の体積が大きくなって水をおし出している。	●学習したことをより定着させるために、本単元で学習した空気の体積変化を利用したものづくりを取り入れる。 ●空気と水の体積変化の違いを振り返らせる。 ☆自然事象への関心・意欲・態度 物の温まり方の特徴を適用し、ものづくりをしている。 (行動観察・ノート分析) ☆科学的な思考・表現 ペットボトル噴水作りを通して、その仕組みを温度による空気の体積変化と関係付けて考え、表現している。 (発言・ノート分析)
-----------------------	----	---	--

7 本時（9／9時間）

(1) 本時で育てたい活用する力

本時では、空気の体積変化によって水を飛ばすことができるおもちゃ「ペットボトル噴水」を作る。ペットボトル噴水の仕組みを考えながら作ることで、学習した空気の温度による体積変化と結び付けて考える機会を与えることができる。この活動を通して、学習内容を振り返り、新たな場面で活用することで、温度によって空気の体積が変化すること、さらに、水よりも空気の体積変化の方がはるかに大きいことをより定着させることができると考える。

(2) 本時の目標

ペットボトル噴水作りを通して、その仕組みを温度による空気の体積変化と関係付けて考え、表現している。(科学的な思考・表現)

(3) 展開

○学習活動	●活用への支援 ☆評価
○学習してきたことを振り返る。 ○演示用ペットボトル噴水を見る。   ペットボトルふん水は、どのような仕組みで水が飛び出すのだろうか。 ○ペットボトル噴水の仕組みを考え、ペットボトルの中の様子を予想する。	●学習した空気、水、金属の体積変化について振り返らせる。 ●演示用のペットボトルは、ビニルテープで巻いて、中の様子が見えないようにすることで、水が飛び出る原因は水の体積変化なのか、空気の体積変化なのかを考えさせる。 <ペットボトル噴水> ・ホット用のペットボトルを用意する。 ・ペットボトルの下方に画びょう等で穴を開ける。 ・水を穴の上まで入れ、ふたをする。 ・お湯をかける。(ドライヤーで温めてもよい) ・穴から勢いよく水が出る。

・水が入っているはず。 ・水は温めても少ししか体積が変化しないから、空気が入っているだろう。 ・空気は温められると体積が増えるから、水をおし出しているのではないか。 ○自分の考えた方法でペットボトル噴水を作る。 ○結果を記録する。 ○予想を振り返って気付いたことを書く。 ・水だけでは、遠くにとばなかった。 ・空気の体積が大きくなるから水がとぶことに気が付いた。 ・空気の量が多い方が遠くまでとんだ。 ○ペットボトルの中がどのようなとき噴水ができるかを班で話し合い、発表する。 ペットボトルふん水は、温められた空気の体積が増えて水をおし出している。	●予想の際には、ペットボトルの中の様子をかくことができる学習カードを用意しておく。 ●穴を開けたペットボトルを人数分用意しておく。 ●実験でうまく水がとばない場合はどうすればいいか改善するよう助言する。 ☆科学的な思考・表現 ペットボトル噴水作りを通して、その仕組みを温度による空気の体積変化と関係付けて考え、表現している。 (発言・ノート分析) ●ペットボトル噴水の仕組みについて自分たちの言葉でまとめさせる。 ●ペットボトル噴水の水が遠くにとんだときは空気がたくさん入っていること、その空気の体積が増えて水を押し出していることに気付かせる。
--	---

実践事例 2 第 5 学年 「振り子の運動」

1 研究主題との関連

＜観察・実験の結果を日常の生活や体験・経験と関連付けて考える力を育成する＞

(1) 既習事項や生活の中での体験・経験を自然の事物・現象と結び付ける

「植物の発芽」「植物の成長」の単元で学習した条件制御を、本単元でも適用できることに気付き、変える条件と変えない条件について自ら考えて実験を組み立てる。そのことによって、条件制御についての考え方を確実に身に付けるようにする。

(2) 学んだことを自然の事物・現象に適用する

振り子の振れる速さを変える要因が振り子の長さであることを学習しても、実際にものづくりなどをする場合にはそのことが生かせないことが多い。ものづくりの学習において、変化の要因を組み合わせた学習をすることで、知識や技能、科学的な見方や考え方のより確実な定着と、日常生活に生かす力を育てる。

＜観察・実験の結果や情報を分析して、全体の傾向や共通性を捉えて考察する力を育成する＞

(1) 観察・実験の結果を分析する

結果を分析しやすいように実験の結果をグラフ用紙にシールを貼り付けて表現する。そのグラフから読み取ったことを、振り子の運動の違いとその要因を関係付けて考察する。その中で、定量的な結果の分析だけでなく、測定誤差やばらつきのとらえ方を含めた結果を捉える力についての見方や考え方を育てる。

2 単元の見通し

振り子の運動の規則性について興味・関心をもって追究する活動を通して、振り子の運動

の規則性について条件を制御して調べる能力を育てるとともに、それらについての理解を図り、振り子の運動の規則性についての見方や考え方をもちことができるようにする。

(内容)

おもりを使い、おもりの重さや糸の長さなどを変えて振り子の動く様子を調べ、振り子の運動の規則性についての考えをもちことができるようにする。

ア 糸につるしたおもりが1往復する時間は、おもりの重さなどによっては変わらないが、糸の長さによって変わることを。

3 評価規準

自然事象への 関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然事象についての 知識・理解
・振り子の運動の変化に興味・関心をもち、自ら振り子の運動の規則性を調べようとしている。 ・学習した振り子の運動の規則性を適用し、工夫してものづくりをしようとしている。	・振り子の運動の変化とその要因について予想し、条件を制御して実験を計画し、表現している。 ・振り子の運動の変化とその要因を関係付けて考察し、自分の考えを表現している。	・振り子の運動の規則性を調べ、その過程や結果を定量的に記録している。 ・振り子の運動の規則性を調べる方法を考え、それぞれの実験装置を的確に操作し、安全で計画的に実験している。	・糸につるしたおもりが1往復する時間は、おもりの重さなどによっては変わらないが、糸の長さによって変わることを理解している。

4 単元について

本単元「振り子の運動」は、「A物質・エネルギー」の「エネルギー」についての基本的な見方や概念を柱とした内容のうちの「エネルギーの見方」に関わる。その内容には、力学の基本となる概念が多く含まれており、中学校の理科や高等学校の物理につながる単元であるため、十分に理解させておく必要がある。

本単元は、第5学年での学習の中心となる「条件を制御する」ことを考えて実験を工夫することが求められており、植物の発芽や生長の単元で学習した条件制御の方法を適用して実験を構想する学習となる。また、測定値の平均を求めるなどの作業が必要となるため、定量的な実験と捉えられる部分もあるが、実験結果の整理、表現、読み取りなどの過程での測定誤差やばらつきの捉え方を含めた結果を捉える力について育てることも大切になる。

5 児童の実態

第4学年の理科では、自然の事物・現象の変化とその要因とを関係付ける能力を育ててきた。第5学年では、変化させる要因と変化させない要因を区別しながら、観察・実験などを計画的に行う条件制御の能力を育成することが重点になっている。

児童は、第4学年までの学習について、知識として覚えることはできているが、観察・実

験の結果を科学的に考えることに課題がある。また、学んだことを日常生活やものづくりへの応用する場面では、複数の要因を関係付けることができないこともある。本学習においても、学んだことを他の事柄と関係付けたり、自然の事物・現象や日常生活への応用をしたりする力を高めるようにしていきたい。

6 指導計画

次	過程	○学習活動	●活用への支援 ☆評価
第1次 振り子の動くようす（1時間）	事象提示 問題 予想	<第1時> ○メトロノームを見て、ぴったり1秒で1往復していることを確認する。 ○1秒で1往復する振り子を作る。 ○どのようにして1秒に近付けたのかをノートに書く。 ○どのようにして1秒に近付けていったのか、発表する。 ○振り子の1往復する時間は何によって変わるのか、学級全体で話し合う。	●本時の活動が今後に活用できるように、児童の力で要因を変化させられるような教材を用意する。 ☆自然事象への関心・意欲・態度 振り子の運動の変化に興味・関心をもち、自ら振り子の運動の規則性を調べようとしている。 （行動観察・ノート分析） ●児童から「調べたい問題」として①～③まで全て出てこない場合は、第2次での実験の項目を変更することも考える。
第2次 振り子の1往復する時間の変化（4時間）	計画	<第2時> ○振り子が1往復する時間は何によって変わるのか調べる方法を考える。 ○既習事項を活用したり、条件制御に留意したりして実験計画を立てる （既習事項を活用する） ・確かめる項目のみを変えて、他の2項目は条件を揃えることに気を付けて実験の計画を立てる。 （条件制御に留意する） ・おもりの重さと振り子の長さは変えないで、振れ幅だけを変えて1往復する時間が変わるか確かめる。 ・振れ幅と振り子の長さは変えないで、おもりの重さだけを変えて、1往復する時間が変わるか確かめる。 ・振れ幅とおもりの重さは変えないで、振り子の長さだけを変えて、1往復する時間が変わるか確かめる。 ○実験方法を具体的に決める。 ・測定する振り子の振れる回数や測定する際の分担についてグループで話し合う。 ○1往復する時間の測り方を全体で確認する。	●植物の学習で学んだことを生かして、変化させる要因と変化させない要因を区別するように助言する。 ●1往復する時間の測り方を練習させ、誤差を小さくするには測定値を平均した値を使う必要があることを理解させる。 ☆観察・実験の技能 振り子の運動の規則性を調べ、その過程や結果を定量的に記録している。 （行動観察）

	実験 結論 結果 考察 結論	〈実験方法〉 ①ストップウォッチを持った手を、振り子のおもりに合わせながら動かす。 ②左右どちらかの最上点におもりがきたとき、ストップウォッチのボタンをおして 10 往復する時間を測る。それを 5 回繰り返し 1 往復する時間の平均を計算する。 ・ (1 回目の時間 + 2 回目の時間 + 3 回目の時間 + 4 回目の時間 + 5 回目の時間) ÷ 5 ÷ 10 ＜第 3・4 時＞ ○振り子が 1 往復する時間は、何によって変わるのか調べる。 【実験①】 ふりがが 1 往復する時間は、振れ幅によって変わるのだろうか。 【実験②】 ふりがが 1 往復する時間は、おもりの重さによって変わるのだろうか。 【実験③】 ふりがが 1 往復する時間は、ふりこの長さによって変わるのだろうか。 ○予想する。 ・ 1 秒振り子作りのときに、振れ幅を変えたら往復する時間が少し変わったようだったので、変わると思う。 ・ 1 秒振り子作りのときに、振れ幅を変えても往復する時間は変わらなかったから、変わらないと思う。 ・ 1 秒振り子作りのときに、おもりの重さを変えたら往復する時間が少し変わったようだったので、変わると思う。 ・ 1 秒振り子作りのときに、おもりの重さを変えても往復する時間は変わらなかったから、変わらないと思う。 ・ 1 秒振り子作りのときに、振り子の長さを変えたら往復する時間が変わったので、変わると思う。 ○実験する。 ○結果をノートにまとめる。 ○考察する。 ・ 自分のグループの実験結果では、1 往復する時間は変わらなかった。 ・ クラス全体の結果をみても、1 往復する時間は変わらなかった。 ・ 自分のグループの実験結果によると、1 往復する時間は変わった。 ・ クラス全体の結果をみても、1 往復する時間は変わった。 ○結論を出す。 【結論①】 ふりがが 1 往復する時間は、振れ幅によっても変わらない。 【結論②】 ふりがが 1 往復する時間は、おもりの重さによっても変わらない。 【結論③】 ふりがが 1 往復する時間は、ふりこの長さによって変わる。	●「1 秒振り子作り」の経験や生活体験を活用して予想させる。 ☆科学的な思考・表現 振り子の運動の変化とその要因について予想し、条件を制御して実験を計画し、表現している。 (ノート分析) ☆観察・実験の技能 振り子の運動の規則性を調べる方法を考え、それぞれの実験装置を的確に操作し、安全で計画的に実験をしている。 (ノート分析) ●クラス全体での考察がしやすいように、黒板に掲示できる大きな表を用意し、グループごとに結果をシールで貼らせるようにする。 ☆科学的な思考・表現 振り子の運動の変化とその要因を関係付けて考察し、自分の考えを表現している。 (発言分析) ☆自然事象についての知識・理解 糸につるしたおもりが 1 往復する時間は、おもりの重さなどによっても変わらないが、糸の長さによって変わることを理解している。 (ノート分析)
--	---	--	--

		<第5時> ○振り子が1往復する時間は何によって変わるのかについてまとめる。 ○前時の実験の結果について確認し、補足実験をする。 ○他のグループの結果や前時の結果と本時の実験の結果を比べてまとめをする。 ふりがが1往復する時間は、ふりこの長さによって変わり、振れ幅、おもりの重さによっては変わらない。	
第3次 振り子の性質 (1時間)	活用	<第6時 本時> ブロックを使って1秒間で1往復するふりこを作るにはどうしたらよいだろうか。 ○いろいろな形のおもりを使ってグループで1秒間で1往復する振り子を作る。 ・ブロックの数が違ってもおもりの重さはない。 ・糸の長さは変わらないはずなのに。 ・振り子全体の長さが関係あるのかな。 ふりこの長さは支点からおもりの中心までの長さである。おもりの形が変わるとふりこの長さが変わったことになる。	●振り子の長さが変わると1往復する時間が変わるというきまりを活用して作るように助言する。 ☆科学的な思考・表現 振り子の長さは糸の長さではなく、支点からおもりの中心までの長さであると考えることができる。 (発言分析)

7 本時の学習（6／6時間）

(1) 本時で育てたい活用する力

本時では、ブロックで好きな形のおもりを作って1秒間で往復する振り子を作る。振り子の1往復する時間はおもりの重さには関係なく、振り子の長さのみに関連していることを学習した後の活動であることから、児童は、1秒間で振れる振り子の長さは同じであると考ええる。特に振り子の長さをおもりまでの糸の長さと捉えている場合には実験の結果に意外性がある。この結果を考える活動を通して、「振り子の長さは支点からおもりの中心までである」ということについて定着を図ることができる。

(2) 本時の目標

振り子の長さは糸の長さではなく、支点からおもりの中心までの長さであると考え、表現している。(科学的な思考・表現)

(3) 展開

○学習活動	●活用への支援 ☆評価
ブロックを使って1秒間で1往復するふりこを作るにはどうしたらよいだろうか。 ○振り子の振れる1往復の時間を変える要因について確認をする。 ・振り子の長さが変わると1往復の時間が変わる。 ・振り子を長くするとゆっくりになる。 ・振り子を短くすると速くふれる。 ・おもりの重さや振れ幅は1往復の時間には関係ない。	●1往復の時間を変える要因は振り子の長さであったことを確認する。
○ブロックを使って振り子を作る。 ・自分で作ったおもりで振り子を作り、1往復する時間を測定する。 ・糸の長さを調節して1秒間に1往復する振り子を作る。 ○できた振り子について記録をする。 ・糸の長さや振り子の長さについて記録をする。 ○できた振り子について発表し、考察をする。 ・振り子の糸の長さはおもりの形によっては変えることがあった。 ・おもりの真ん中くらいまでの長さはほとんど変わらなかった。 ふりこの長さは支点からおもりの中心までの長さである。おもりの形が変わるとふりこの長さが変わったことになる。	●振り子の長さは糸の長さではなく、おもりの中心辺り（重心）までの長さであることを再確認する。 ☆科学的な思考・表現 振り子の長さは糸の長さではなく、支点からおもりの中心までの長さであると考えることができる。（発言分析）

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 問題解決の過程に、「活用する力」を意図的に位置付け、指導の改善を図ることで、児童が学んだことの定着を図ることができる。

第4学年の「金属・水・空気と温度」では、学習のまとめとして、空気と水の温度による体積変化の違いを考えられるよう、噴水の仕組みを説明させた。児童は学習の中で「金属、水及び空気を温めると、それらの体積は膨張し、冷やすと収縮する。その体積の変化の様子は金属、水及び空気によって違いがある。」ことは学んできている。しかし、噴水の仕組みについて、単元のまとめで考える場をつくることで改めて空気の体積の変化に気付き、学習したことが確認できた。このように、改めて学んだことを適用できる事象を説明させる場面を意図的に作ることが、学んだことを確認し、定着を図ることにつながった。

(2) 問題解決の過程で、分析した「活用する力」を意図的に育てていくような学習活動を展開することは、問題解決の能力を育てるのに有効である。

第5学年の「振り子の運動」では、条件制御について、第5学年で学んできたことを確認しながら、振り子の運動の変化とその要因を整理させた上で、「変化させる条件」「変化させない条件」を考えて実験計画を立てさせるようにした。また、実験結果の捉え方についてグラフを活用させるなどしてきた。そして、学習のまとめに、おもりを付ける位置などを変えた振り子を提示し、学んだことを使って「1秒振り子を作る」活動を通して、振り子の動きを変える要因について確認するようにした。

学んできたことを問題解決の過程で位置付け、意図的に指導することによって、児童の学習への取組が円滑になるとともに、問題解決の能力を伸ばすことにつながった。

2 今後の課題

本研究では、問題解決の過程において児童が身に付けている力を活用することで、実感を持った理解をさせ、学ぶ有用感をもつことにつなげることを目指してきた。具体的には、主に児童が単元で学んだことを学習のまとめにおいて適用して考える学習を意図的に位置付けることで学んだことを再確認して定着を図るとともに、学んだことが活用できる実感をもたせようとした。

しかし、児童が学んだことを活用できる場面は、問題解決の過程で活用場面を分析したとおり他の場面も考えられる。観察・実験の計画を立てたり、観察・実験の結果を分析したりする場面においてなど、児童が身に付けてきた力を更に活用できるようにする指導方法を考えていくことは、課題である。

また、活用する力を高めるための指導は、発達段階によって学習経験や生活経験が異なるため、学年によっても働き掛けが違ってくる。学年に応じた指導方法を更に開発していく必要がある。

【資料１】各単元において活用できると考えられる既習事項や体験・経験の例

* アンダーラインが引いてある項目は理科で学習する内容を表し、○囲みの数字は学年を表す。

第３学年

単元名	風やゴムの働き		光の性質	
	風の働き	ゴムの働き	光の反射・集光	光の当たり方と明るさや暖かさ
予想・仮説を立てる場面	台風・風・扇風機・うちわ	輪ゴム・ゴムでっぽう	下敷きなどの反射光	<u>太陽と地面の様子③</u> ・太陽熱温熱器
学んだことを活用する場面	風車・自動車		平面鏡を使った装置・虫眼鏡	

単元名	磁石の性質		電気の通り道	
	磁石に引き付けられる物	異極と同極	電気を通すつなぎ方	電気を通す物
予想・仮説を立てる場面	筆箱の磁石・黒板の磁石	磁石の性質を使ったおもちゃ	電池を使う家庭用機器	電気を使う家庭用機器
学んだことを活用する場面	自動車・船・魚釣りゲーム・方位磁針・折れた磁石・スチール缶とアルミ缶		スイッチ・豆電球を使ったおもちゃ・通電テスター・スチール缶	

単元名	物と重さ		昆虫と植物	
	形と重さ	体積と重さ	昆虫の成長と体のつくり	植物の成長と体のつくり
予想・仮説を立てる場面	体重測定・重さ(算数)	<u>形と重さ③</u>	<u>身近な自然の観察③</u> ・飼育経験・生活科	<u>身近な自然の観察③</u> ・栽培経験・生活科
学んだことを活用する場面	てんびんばかり・形を変えた缶の重さ		昆虫の体の模型・飼育活動・栽培活動	

単元名	身近な自然の観察		太陽と地面の様子	
	身の回りの生物の様子	身の回りの生物と環境のかかわり	日陰の位置と太陽の動き	地面の暖かさや湿り気の違い
予想・仮説を立てる場面	野外体験・飼育体験・栽培体験・生活科	野外体験・飼育体験・栽培体験・生活科	影遊び	<u>光の性質③</u>
学んだことを活用する場面	飼育活動・栽培活動		カーテン・ブラインド・洗濯物	

第 4 学年

単元名	電気の働き		空気と水の性質	
	乾電池の数となぎ方	光電池の働き	空気の圧縮	水の圧縮
予想・仮説を立てる場面	電気の通り道③・電池を使った家庭用電気機器	乾電池の数となぎ方④	ボール・風船・タイヤ	空気の圧縮③
学んだことを活用する場面	自動車・メリーゴーラウンド ・電子オルゴール ・豆電球やモーターを使ったおもちゃ		空気でっぽう・水でっぽう・ポット・ペットボトルロケット	

単元名	金属・水・空気と温度			人の体のつくりと運動	
	温度と体積変化	温まり方の違い	水の三態変化	骨と筋肉	骨と筋肉の働き
予想・仮説を立てる場面	水の三態変化④	温度と体積変化④・エアコン やストーブ・風呂の水	水の自然蒸発と結露④・ 温度と体積変化④・湯沸し・氷	体のけがなど	運動
学んだことを活用する場面	鉄道のレール・ペットボトル噴水・温度計・へこんだボール・ソーラーパルーン・飲料水の温度と容器			動物の骨格との比較・運動	

単元名	季節と生物		天気の様子	
	動物の活動と季節	植物の成長と季節	天気による 1 日の気温の変化	水の自然蒸発と結露
予想・仮説を立てる場面	身近な自然の観察③・太陽と地面の様子③	身近な自然の観察③・太陽と地面の様子③	太陽と地面の様子③	水の三態変化④・水溜りの水・風呂場や窓の結露
学んだことを活用する場面	自然環境の保全		結露・凍結・洗濯物	

単元名	月と星		
	月の形と動き	星の明るさ・色	星の動き
予想・仮説を立てる場面	太陽の動き③・星の動き④	野外観察体験	日陰の位置と太陽の動き③・月の形と動き④
学んだことを活用する場面	太陽・月の動きとの比較・野外観察活動		

第5学年

単元名	振り子の運動		電流の働き	
	振り子の運動		鉄心の磁化・極の変化	電磁石の強さ
予想・仮説を立てる場面	1秒振り子・メトロノーム		<u>磁石の働き③</u> ・ <u>電気の働き④</u>	<u>電気の働き④</u>
学んだことを活用する場面	簡易メトロノーム・おもりの形を変えた振り子		モーター	

単元名	物の溶け方		
	物が水に溶ける量の限度	物が水に溶ける量の変化	重さの保存
予想・仮説を立てる場面	物を溶かす活動・調理	物を溶かす活動・調理	<u>物と重さ③</u>
学んだことを活用する場面	結晶づくり		

単元名	植物の発芽・成長・結実			
	種子の中の養分	発芽の条件	成長の条件	植物の受粉・結実
予想・仮説を立てる場面	栽培体験	<u>季節と生物④</u>	<u>季節と生物④</u>	<u>身近な自然の観察③</u> ・ <u>季節と生物④</u>
学んだことを活用する場面	<u>動物の誕生⑤</u> ・自然環境の保全・生命尊重			

単元名	動物の誕生			天気の変化	
	卵の中の成長	水中の小さな生物	母体内の成長	雲と天気の変化	天気の変化と予想
予想・仮説を立てる場面	<u>植物の発芽・成長・結実⑤</u> ・飼育経験	<u>身近な自然の観察③</u> ・ <u>季節と生物④</u>	<u>卵の中の成長⑤</u>	<u>天気の様子④</u> ・ <u>季節と生物④</u>	<u>天気の様子④</u> ・ 気象情報
学んだことを活用する場面	<u>植物の発芽・成長・結実⑤</u> ・自然環境の保全・生命尊重			天気の予想	

単元名	流水の働き		
	流れる水の働き	川の上流・下流と川原の石	雨の降り方と増水
予想・仮説を立てる場面	川遊び・川原の様子	川遊び・ <u>流れる水の働き⑤</u>	<u>天気の変化⑤</u> ・ <u>流れる水の働き⑤</u> ・ <u>川の上流・下流と川原の石⑤</u>
学んだことを活用する場面	実際の川との比較・防災教育		

第 6 学年

単元名	てこの規則性			電気の利用			
	てこのつり合いと重さ	てこのつり合いの規則性	てこの利用	発電・蓄電	電気の変換	電気による発熱	電気の利用
予想・仮説を立てる場面	てこを利用した道具	てこのつり合いと重さ	てこのつり合いと重さ⑤・てこのつり合いの規則性⑤	電気の働き④・充電電池・ダイナモ	電気の働き④・電流の働き⑤	電流の働き⑤・ショート回路・電気ストーブ	充電電池・乾電池
学んだことを活用する場面	てんびん・てこを利用した道具			蓄電器を利用した自動車・風力発電など・LED・コンデンサー・豆電球・モーターなどを組み込んだ回路・環境への影響など			

単元名	燃焼の仕組み	水溶液の性質		
	燃焼の仕組み	酸性・アルカリ性・中性	気体が溶けている水溶液	金属を変化させる水溶液
予想・仮説を立てる場面	水溶液の性質⑥・キャンドル・ファイアー・アルコールランプ	物の溶け方⑤	物の溶け方⑤・炭酸飲料	物の溶け方⑤・燃焼の仕組み⑥
学んだことを活用する場面	防災教育	炭酸飲料・洗剤の種類と使い方・環境への影響など		

単元名	人の体のつくりと働き				植物の養分と水の通り道	
	呼吸	消化・吸収	血液循環	主な臓器の存在	でんぶんのでき方	水の通り道
予想・仮説を立てる場面	飼育経験・運動時の呼吸	飼育経験・食事・排泄	動物の誕生⑤・脈	病気・消化・吸収・血液循環	栽培経験・植物の発芽・成長・結実⑤	栽培経験・季節と生物④・植物の発芽・成長・結実⑤
学んだことを活用する場面	動物との比較・食育・健康的な生活				栽培活動	

単元名	生物と環境		土地のつくりと変化		
	生物と水・空気とのかわり	食べ物による生物の関係	土地の構成物と地層の広がり	地層のでき方と化石	火山の噴火や地震による土地の変化
予想・仮説を立てる場面	身近な自然の観察③・季節と生物④・植物の発芽・成長・結実⑤	身近な自然の観察③・季節と生物④・植物の発芽・成長・結実⑤	流水の働き⑤・ボーリング試料	流水の働き⑤	映像資料
学んだことを活用する場面	環境問題・自然環境の保全		自然災害		

単元名	月と太陽	
	月の位置と太陽の位置	月の表面の様子
予想・仮説を立てる場面	太陽と地面の様子③・月と星④	月と星④
学んだことを活用する場面	天体観測の活動	

＜小学校体育研究開発委員会＞

研究主題・副主題

進んで運動に取り組む姿が現れる体育学習

～ゲーム・ボール運動の中心的な楽しさを明確にした指導と評価の在り方～

I 研究主題設定の理由

小学校学習指導要領解説「体育編」において、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるためには、児童の能力・適性、興味・関心等に応じて、運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決するなどの学習が重要であることが示されている。

また、東京都教育委員会においては、平成25年2月に策定した「総合的な子供の基礎体力向上方策（第2次推進計画）」において、「今後は、これまで以上に、体育・保健体育の授業実践においては、児童・生徒が授業の内容を楽しく感じ、夢中になるような工夫が求められる。」としている。

このような体育学習の具現化を図るには、運動の楽しさや喜びを味わわせ、学習指導要領に示されている内容を、児童一人ひとりが確実に身に付けることのできる学習を工夫することが重要である。そして、そのような学習を展開することで現れる児童の姿を、本委員会の目指す児童像として「進んで運動に取り組む児童」とし、具体的には、「運動する楽しさを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動に取り組む児童」と捉えた。そこで、このような児童の姿が現われるような授業を全ての小学校教員が展開できる学習指導及び資料作成を目的に、本研究主題を設定した。

なお、現行の学習指導要領では、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、基礎的な身体能力や知識を身に付け、生涯にわたって運動に親しむことができるように、発達の段階のまとまりを考慮し、指導内容が整理し体系化が図られている。特に、ボール運動系の内容は、種目固有の技能ではなく、攻守の特徴（類似性・異質性）や「型」に共通する動きや技能を系統的に身に付ける視点から、「ゴール型（ゲーム）」、「ネット型（ゲーム）」、「ベースボール型（ゲーム）」として種目が新たに整理されている。

そこで、本委員会では、新たに整理されたボール運動系の学習に焦点を当てた研究開発を進めることとした。そして、児童に運動の楽しさを十分に味わわせるために領域の内容の中心的な楽しさを明確にし、その楽しさを味わわせる指導と評価を工夫し授業を展開することにより、児童が進んで運動に取り組む姿が現われると考え、本副主題を設定した。

II 研究の視点

1 ゲーム・ボール運動の中心的な楽しさの明確化

- ・ ゲーム・ボール運動の領域の内容ごとの中心的な楽しさの分析・考察

2 ゲーム・ボール運動の領域の内容に応じた指導計画の作成

- ・ 教材化の視点の明確化と提示する教材の工夫
- ・ 教材に応じて現われる児童の具体的な姿の明確化
- ・ 6年間を見通した領域の内容に応じた指導計画の作成

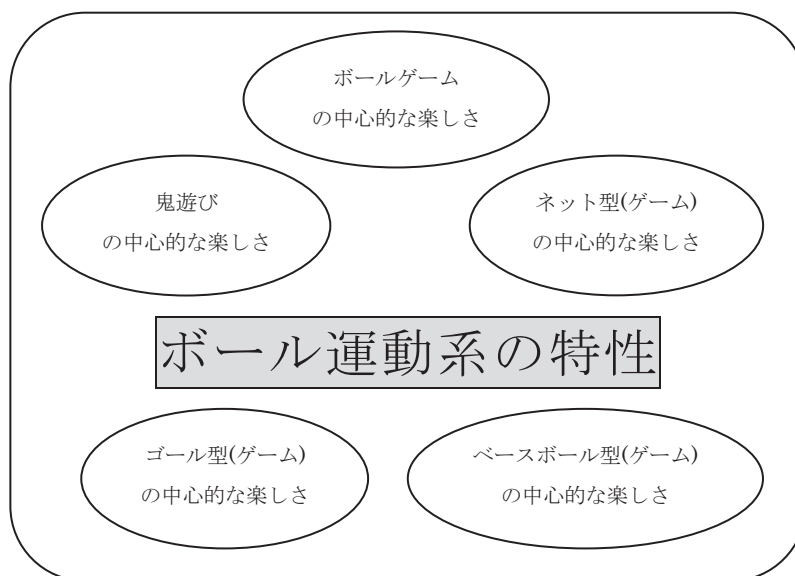
Ⅲ 研究の内容

1 ゲーム・ボール運動の指導の考え方

(1) ゲーム・ボール運動の領域の内容に応じた中心的な楽しさの明確化

体育科の運動領域では、それぞれの運動が有する特性を味わわせる授業を展開することが大切である。

ボール運動系の領域の特性は、「チームで協力して練習をしたり、ルール（規則）や作戦を工夫したりして、集団対集団の攻防によって競争することを楽しむことや喜びを味わうことができること」である。そのことを図に表すと、右図のように特性が学習内容の中心に位置付く。



さらに、ボール運動系の領域の内容は、それぞれのゲームの構造が異なることから、図のように、それぞれが有する楽しさ（中心的な楽しさ）にも違いがある。したがって、ボール運動系の学習指導に当たっては、この中心的な楽しさを基軸にして、取り上げるゲームのルール（規則）、場、指導や評価の方法などを工夫し学習を展開することが重要である。そこで、それぞれの領域の内容に応じた中心的な楽しさを以下のように分析した。

<領域の内容に応じた中心的な楽しさ>

学年	領域の内容	ゲームの構造	中心的な楽しさ
1・2	ボールゲーム	ボールを投げたり蹴ったりして、的に当てるなどして勝敗を競い合う。	ねらったところにボールを投げたり、蹴ったりすること。
	鬼遊び	攻守が入り交じった区域の中で逃げたり、追いかけたり、相手の陣地を取り合ったりして勝敗を競い合う。	相手から逃げたり、相手を追いかけてたりすること。
3～6	ゴール型（ゲーム）	攻守が入り交じったコートの中で、ゴールにシュートしたり、陣地を取り合ったりして得点を競い合う。	連携してボールを運び、シュートしたり、陣地を取ったり、それを防いだりすること。
	ネット型（ゲーム）	攻守が分離したコートの中で、ボールをコントロールさせないように攻撃して得点を競い合う。	連携してラリーを続けたり、相手の捕りづらいところへボールを返したりすること。
	ベースボール型（ゲーム）	攻守を規則的に交代し合い、ボールを打つなどして進塁することで得点を競い合う。	攻撃側の走塁が速いのか、連携した守備側が速いのかを競い合うこと。

(2) 教材化の基本的な考え方

ゲーム・ボール運動において、それぞれの領域の内容に応じた中心的な楽しさを味わうことができるようにするため、発達の段階における領域ごとの内容等を整理した。そして、「易しいゲーム」「簡易化されたゲーム」の考え方を明らかにし、教材の工夫の仕方を開発した。

ア 教材化のめやす

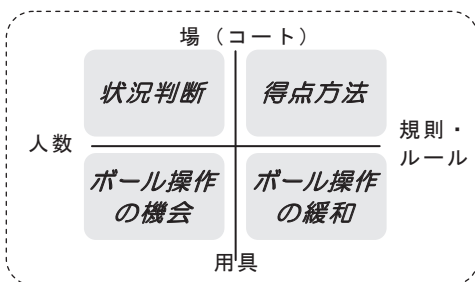
学習指導要領解説等から、次のように各学年の領域の内容を整理して特徴を捉え、教材化のめやすを明らかにした。

	1・2年	3・4年	5・6年
学習の中心	ゲーム 規則を工夫したり作戦を立てたりすることを重視しながら、簡単な動きを身に付けて、ゲームを一層楽しくしていくことが学習の中心	ボール運動 型に応じた技能を身に付けてゲームをしたり、ルールや学習の場を工夫したりすることが学習の中心	
内容	「ボールゲーム」 「鬼遊び」	「ゴール型（ゲーム）」 「ネット型（ゲーム）」 「ベースボール型（ゲーム）」	
内容の特徴	型を超えて幅広く学ぶ 簡単なボール操作や簡単な規則で行う易しいゲームを通して、型を超えて幅広くボール運動系の技能の基礎を培う。 ・ボール遊び ・ボールゲーム（投げ・蹴り） ・鬼遊び	型に応じた課題を学ぶ ゴール型→コート内で攻守が入り交じり、手や足などを使って攻防を組み立て、一定の時間内に得点を競い合うこと ネット型→ネットで区切られたコートの中で攻防を組み立て、一定の得点に早く達することを競い合うこと ベースボール型→攻守を規則的に交代し合い、一定の回数内で得点を競い合うこと	
技能の要点	ボール操作 ・基本的なボール操作 ボールを持たないときの動き ・ボールが来る方向に動く	ボール操作 ・得点につながるボール操作 ボールを持たないときの動き ・ボール操作しやすい位置に動く	ボール操作 ・得点につながるボール操作 ・ゲームの組み立てに必要なボール操作 ボールを持たないときの動き ・ボール操作しやすい位置に動く ・相手の攻撃を防ぐための動き
教材化のめやす	 「型」を超えて幅広く、ボール運動系の基礎を楽しく培うゲームをする。 ・簡単なボール操作 ・簡単な規則 ・個人対個人→集団対集団へ →児童が楽しくできるように工夫 基本的なボール操作	 「型」のもつ中心的な楽しさを味わうために「易しいゲーム」をする。 「易しいゲーム」 ・簡単なボール操作 ・比較的少人数 ・身体接触を避ける など →児童が取り組みやすいように工夫 得点にかかわること	 「型」のもつ中心的な楽しさを味わうための組み立てを楽しむために、ルールや形式が一般化されたゲームを修正した「簡易化されたゲーム」をする。 「簡易化されたゲーム」 ・プレイヤーの数 ・コートの広さ ・プレー上の制限 ・運動用具や設備 など →学習課題を追求しやすいように工夫 組み立てて得点すること

イ 内容ごとの教材の視点

ゲーム・ボール運動の内容ごとに、教材を易しくしたり簡易化したりする視点を、次のように分析した。

(ア) 用具、人数、場（コート）、規則・ルールを「教材化の観点」とした。また、それぞれを軸として区切られた四つの特徴を「教材の要素」として下図のように捉えた。



(イ) 教材化に必要な視点（「教材の視点」）を、教材化の観点及び教材の要素に照らして具体化した（右図）。

ウ 教材化の視点と段階

規則・ルールを段階的に変化させることで、中心的な楽しさを味わわせながらゲームを発展させることができる教材の視点を、上記イで設定した視点の中から「教材化の視点」として選定した（右図網掛け）。また、その視点ごとに、具体的な段階とその内容を明確にし、次ページのように整理した。

なお、本委員会では、各教材の特徴を、教材化の視点を軸としたチャート図として示した。チャート図は、領域の内容及び選定した教材の視点によって異なるが、ゲーム内容の発展に応じてチャート図が広がるように設定した。

内容	教材の視点
ボールゲーム・鬼遊び	<pre> graph TD A[場(コート)] --> B[ゴール] B --> C[広さ、方向] C --> D[攻守交代・分離] D --> E[ボール] E --> F[的] F --> G[用具] H[人数] --- I[少人数] I --- J[ボールの数] J --- E D --- K[規則・ルール] </pre>
ゴール型（ゲーム）	<pre> graph TD A[場(コート)] --> B[ゴール] B --> C[ゴールキーパー] D[広さ] --> E[攻守交代] E --> F[ボール] F --> G[ドリブル] G --> H[タグ・フラッグ] H --> I[用具] J[人数] --- K[少人数] K --- L[アウトナンバー] L --- D E --- M[規則・ルール] N[コート工夫] --- A </pre>
ネット型（ゲーム）	<pre> graph TD A[場(コート)] --> B[ネットの高さ] B --> C[得点ゾーン] D[広さ] --> E[返球回数] E --> F[ボール] F --> G[返球の仕方] G --> H[用具] I[人数] --- J[少人数] J --- D E --- K[規則・ルール] </pre>
ベースボール型（ゲーム）	<pre> graph TD A[場(コート)] --> B[内・外野ゾーン] B --> C[アウトゾーン] D[広さ、方向] --> E[得点の仕方] E --> F[ボール] F --> G[バットなど] G --> H[打ち方] H --> I[用具] J[人数] --- K[少人数] K --- D E --- L[規則・ルール] </pre>

<教材化の視点と段階>

ボールゲーム

学年	1 年		2 年	
ゲーム	的当てゲーム		シュートゲーム	
段階	1	2	3	4
ボールの数	1 人 1 個			チームで 1 個
攻守（守備）	なし	なし→あり	ゾーンあり	ゾーンあり→なし
攻守（攻撃）	攻守交代	攻守交代	攻守交代	攻守入り交じり

攻守交代・分離（守備） (例) 第 2 学年

ボールの数 **攻守交代・分離（攻撃）**

鬼遊び

学年	1 年	2 年
ゲーム	しっぽ取り鬼	ボール運び鬼
段階	1	2
少人数	個人対個人→集団対集団	集団対集団
広さ、方向	どこでも	陣地に走りこむ
攻守交代・分離	誰でも	攻守交代

少人数 (例) 第 1 学年

広さ、方向 **攻守交代・分離**

ゴール型（手を使ったゴール型）

学年	3・4年		5年		6年	
ゲーム	セストボール		バスケットボール			
段階	1	2	3	4	5	
ゴール	セストゴール		バスケットゴール			
コートの工夫	ハーフコート	グリッド	ハーフコート	オールコート		
アウトナンバー	あり				なし	
ボール	ドッジボール				バスケットボール	
ドリブル	なし				あり	
攻守交代	攻守交代	攻守切替	攻守交代	攻守切替		

(例) 第5学年

コートの工夫

オールコート

ゴール

バスケットゴール

アウトナンバー

あり

切替

攻守交代

ドリブル

ボール

なし

ドッジボール

ネット型

学年	3 年	4 年	5・6 年
ゲーム	フロアボール	アタックプレル	キャッチバレー
段階	1	2	3
ネットの高さ	40cm(ネット下)	70cm	180cm
返球の仕方	転がす	ワンバウンド	ノーバウンド
少人数	3 人		4 人

ネットの高さ (例) 第 3 学年

少人数 **返球の仕方**

ベースボール型

学年	3 年			4 年		5 (6) 年	
ゲーム	ベースランニングゲーム			フリーバッティングゲーム		ソフトボール	
段階	1	2	3	4	5	6	7
得点の仕方	1 つ				4 つ		
打ち方	なし	投げ 入れる	手で 打つ	ラケットや バットから選択		味方が 投げる	相手が 投げる
広さ、方向	3 6 0 度				9 0 度		

得点の仕方 (例) 第 4 学年

打ち方 **広さ、方向**

(3) 指導と評価の計画

ゲーム・ボール運動の領域の内容の中心的な楽しさや、それに基づいて教材化したゲームを踏まえて、次のように指導と評価の計画として構想した。

ア 単元計画の考え方

時	前半	→	後半
学習内容	ゲームの理解・工夫		
	作戦を立ててゲームに楽しく 取り組んだり課題解決を図ったりする		
	きまり・規則・ルール・マナーを守る、協力		

単元計画は、以下のような考え方に基づいて、一単位時間の授業を組み立てる。

- ・ 単元前半は、単元で扱うゲームの行い方を知り、そのゲームをより楽しむためのルールを工夫することに、単元後半は、チームで作戦を立ててゲームに取り組むことを重点とする。
- ・ 児童の実態や学習経験等を考慮し、取り上げる教材や時数を計画する。
- ・ 取り上げるゲームの中心的な楽しさや、学習状況に応じて課題を設定する。例えば、学習の進展状況に応じて「シュートできる場所を見付けよう」など指導者が課題を提示したり、チームごとに自分たちのチームの状況や特徴に応じて作戦として設定したりする（学習課題の具体例は、領域の内容ごとの指導計画を参照。）。
- ・ 「集団対集団」で取り組む領域の特性から、公正や協力などの態度の内容については、単元全体を通して重点とする。

イ 一単位時間の考え方（教師のかかわり）

ゲーム・ボール運動領域でのチームの目的は、ゲームに「勝つこと」である。児童は「勝つ」ために、作戦を立ててゲームに臨んでいく。そのため、児童が自ら作戦を立てることができるようにするには、児童がチームや自らの課題を把握できるようにしなければならない。また、作戦がゲームの中で有効だったのかを振り返り、作戦を修正し、修正した作戦で再度取り組めるよう、一単位時間を計画することが必要である。

(ア) 一単位時間の流れ

一単位時間の流れを次のように「ゲームー振り返りーゲームー振り返り」とした。

学習活動	活動のねらい
ゲーム前	・ 前時の振り返り②で立てた作戦を確認する。 (児童が思考・判断する内容を焦点化するために、「チームのめあて＝作戦」とする。)
ゲーム①	・ 作戦を意識してゲームに取り組む。 ・ ゲームをする中で、作戦が実行できたか確認し、課題を見付ける。
振り返り①	・ ゲーム①で見付けた課題を基に、作戦を考えたり練習したりする。
ゲーム②	・ 修正した作戦を意識したり、練習したことを生かしたりして、ゲームに取り組む。
振り返り②	・ ゲーム①とゲーム②を通してできるようになったことを確認したり、次時に向けて作戦を考えたりする。

(イ) 教師の支援

児童自身が自己の状況を客観的に見つめ、適切な課題を設定するには、教師の適切な支援が必要である。そこで、ゲーム中と振り返り場面における教師の関わり方の例を、以下のように整理した。

＜ゲーム中の教師の関わり方（ゴール型ゲームを例に）＞

児童の思考・判断の力を高めるためには、本時の学習課題や学習内容につながる児童の活動に関連する適切な発問が重要である。発問をするタイミングは、得点した直後やボールがコート外に出たときなど、プレーが一旦中断されたときに行うようにする。

学習活動	教師の支援例
パスがつながり、シュートが成功した場合	称賛 「ナイスパス！うまくパスが通ったね。」 発問 「どうして今のパスは通ったんだと思う？」 ・パスがつながった理由を聞く。 指導 「なるほど。次も今みたいなパスが出来ると作戦がうまくいきそうだね。」
「相手がマークする前に、素早いパスができたからだと思う。」	

学習活動	教師の支援例
パスがつながらなかった場合	発問 「どうして今のパスは通らなかったんだと思う？次はどうすればいいかな？」 ・パスがつながらなかった理由を聞いた後に、どうすれば成功するか聞く。 指導 「今の場面は、他の友達がフリーだったから、まわりを良く見てみよう。」 ・児童から考えが出ない場合は、直接動き方を指導する。
「相手に邪魔されたからだと思う。でもどうすればいいのかな？」	

＜ゴール型（ゲーム）単元前半における学級全体での振り返り＞

全体での振り返りの場面は下表のように進める。チームごとの振り返りでは、チームの状況から、重点支援チームを決め、全体での振り返りと同様の流れで指導していく。

学習活動	教師の支援例
「パスがまわらないから、ボールを運べない。」	課題の把握（自己の状況の確認） 「うまく攻められた？」 ・今の状況がどうだったかを聞く。 「同じようなことを思った人はいるかな？自分たちは、うまく攻められたというチームはあるかな？」 ・同じような状況のチームがあるかを聞く。
「人がいない所に動くとパスがつながりやすいよ！」	分析・価値付け（振り返ったことの整理） 「どうしたから、うまくいったと思う？」 ・どうしてそうなったのか原因と考えられることを聞く。 「なるほど！ということは、ボールを持たない人の動き方がとても大事だね。」 ・児童から引き出したり、直接教師が教えたり、練習をさせたりする。
「パスしたらすぐに走る作戦にしよう！それを身に付けるために、練習しよう。」	促進（作戦の修正と実行） 「次はどんな作戦にする？今の考えたことをもとにして、チームで作戦を考えたり、練習をしたりしてみよう！」 ・作戦を成功させるための課題を与える。

ウ 評価と支援の考え方

児童一人ひとりの進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすとともに、学習指導要領に示す内容が確実に身に付いたかどうかを評価するために、国立教育政策研究所の「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」を基に、評価を次のように行う。

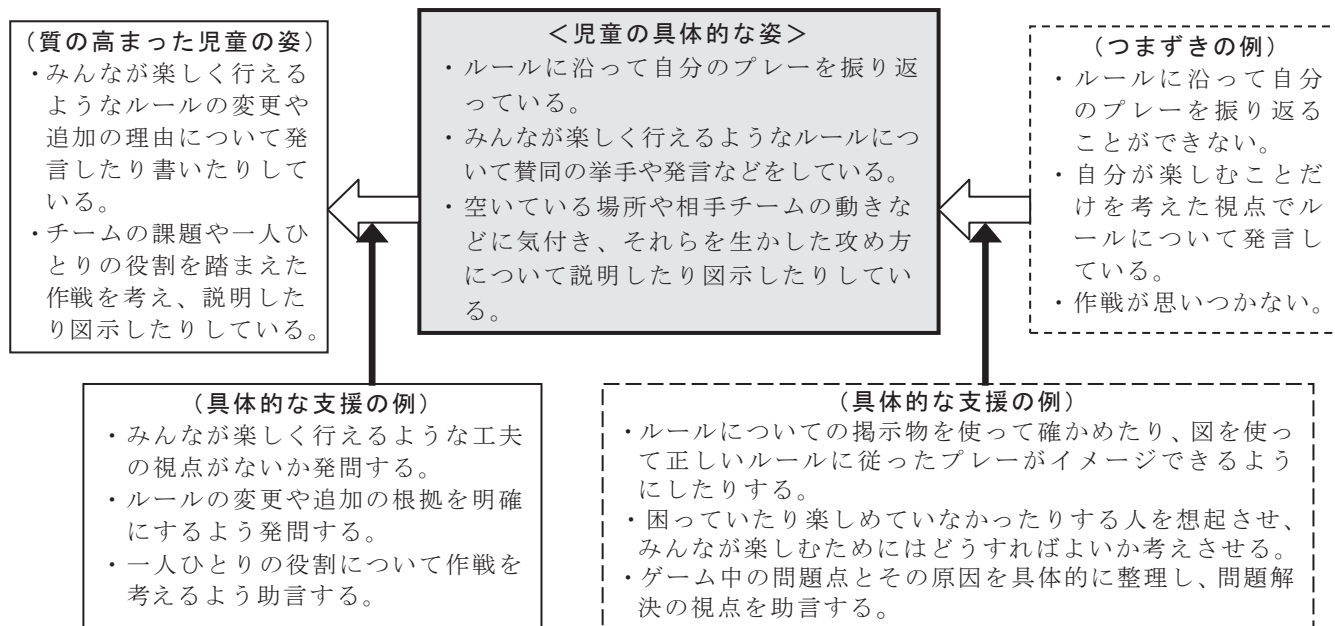
- 1 単元の評価規準を設定する。
- 2 学習活動に即した評価規準を設定する。
- 3 評価規準を「指導と評価の計画」に位置付ける。
- 4 「児童の具体的な姿」を想定する。

〈例〉第5学年ゴール型「バスケットボール」における児童の具体的な姿

観点	児童の具体的な姿
運動への関心・意欲・態度	・ゲーム中、プレーに関わろうとして動いている。 ・勝敗に対して望ましい態度をとっている。 ・仲間に励ましの言葉掛けをしている。 ・友達と一緒に用具を運んでいる。 ・用具などを決められた場所に片付けている。
運動についての思考・判断	・ルールに沿って自分のプレーを振り返っている。 ・みんなが楽しく行えるようなルールについて賛同の挙手や発言などを行っている。 ・空いている場所や相手チームの動きなどに気付き、それらを生かした攻め方について説明したり図示したりしている。
運動の技能	・フリーになっている味方を見付けてパスを出している。 ・フリーゾーンやゴールの近くでパスを受けてシュートしている。 ・相手チームが近くにいないフリーゾーンを見付けて移動している。 ・守備者が間に入らないパスのもらえる場所へ移動している。

- 5 「児童の具体的な姿」を基に、つまずきの例やそれに応じた支援の例を考える。

〈例〉第5学年ゴール型「バスケットボール」における「運動についての思考・判断」に関する「児童の具体的な姿」を生かした評価と支援



なお、以上のような学習評価を効果的・効率的に行うために、1単位時間内に1、2項目の評価が行えるよう評価項目の重点化を図る。

2 ゲーム・ボール運動の領域の内容ごとの指導計画

ボール運動系の内容には、下表のように、ゲーム領域とボール運動領域がある。

発達の段階	各種の運動の基礎を培う時期		多くの領域の学習を経験する時期
領域	A 1・2年	3・4年	5・6年 B
内容	ボールゲーム・鬼遊び	ゴール型（ゲーム）・ネット型（ゲーム） ベースボール型（ゲーム）	

この二つの領域には、Aのように「ゲーム領域において学ぶ内容が違う低学年と中学年」と、Bのように「異なる領域で学習内容が型として共通している中学年と高学年」がある。したがって、低学年・中学年・高学年それぞれの発達段階に応じた取り上げ方を明らかにして指導する必要がある。そこで、6年間を見通して、「領域の内容ごとの指導計画」（教材・学習内容・児童の具体的な姿）を作成した（p10～17 参照）。

領域の内容ごとの指導計画は、まず、図①のように領域の内容に応じた「各学年で取り上げるゲーム例」（教材）を示した。このゲーム例により、具体的なゲームの内容、規則・ルールやゲームの発展が分かり、計画的に単元や授業を進めることができるようにした。

また、図②のように、ゲーム例に対して「技能」「態度」「思考・判断」のそれぞれの項目における「児童の具体的な姿」を明らかにした。このことにより、児童をどのような姿に育てるのかを明確にし、児童の実態を踏まえながら計画的な指導ができるようにした。

なお、「技能」の「ボール操作」と「ボールを持たないときの動き」は、現行の学習指導要領から明確に示され、特に「ボールを持たないときの動き」は、ゲームと密接に関わって、領域の内容の中心的な楽しさに関連する重要な動きであるため、図③のように、それぞれについて「児童の具体的な姿」として示した。

さらに、図④のように、「態度」は、運動内容を越えて身に付ける項目であること、学級の実態に応じて指導の順序や重点が変わることなどから、2学年のまとまりで示した。

＜領域の内容に応じた指導計画＞

①

【4】ベースボール型（ゲーム）の指導計画

②

学習領域	児童の具体的な姿		
	技能	態度	思考・判断
ボール操作	ボールを持たない動き		
投げたり捕ったりして遊ぶ	・ボールを素早く握っている。 ・ボールを次の動作に役立てている。	・次進が投げたボールに合わせて正面に動いている。	・ゲームの行い方を知っている。
走り方を考える	・ボールを素早く握っている。 ・ボールを次の動作に役立てている。	・ボールの方向に合わせて素早く移動し、ボールの正面に動いている。	・ゲームのルールを知っている。
打ち方を考える	・ボールを素早く握っている。 ・ボールを次の動作に役立てている。	・ボールの方向に合わせて素早く移動し、ボールの正面に動いている。	・ゲームのルールを知っている。
走り方でチームの次進のよさを見付ける	・ねらったところにボールを打っている。 ・ボールを素早く握っている。	・ボールの方向に合わせて素早く移動し、ボールの正面に動いている。	・ゲームのルールを知っている。
打ち方でチームの次進のよさを見付ける	・ボールを素早く握っている。 ・ボールを次の動作に役立てている。	・ボールの方向に合わせて素早く移動し、ボールの正面に動いている。	・ゲームのルールを知っている。
打ち方・走り方でチームの次進のよさを見付ける	・ボールを素早く握っている。 ・ボールを次の動作に役立てている。	・ボールの方向に合わせて素早く移動し、ボールの正面に動いている。	・ゲームのルールを知っている。

③

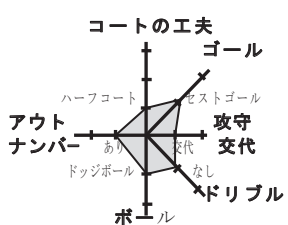
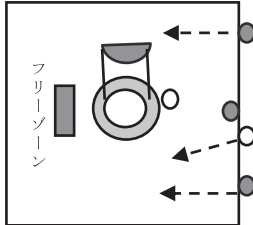
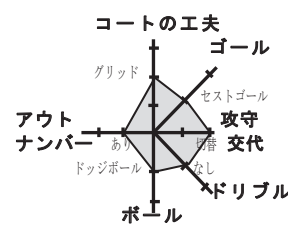
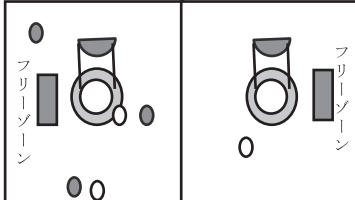
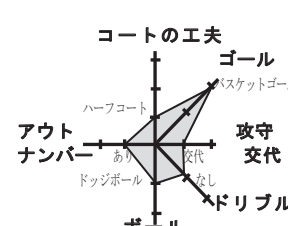
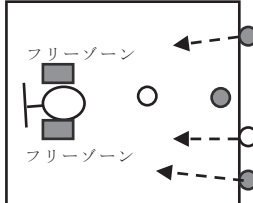
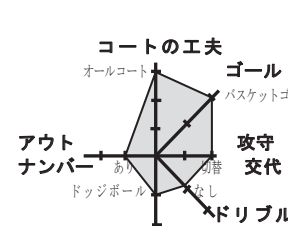
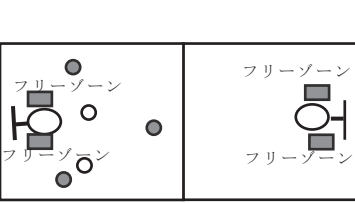
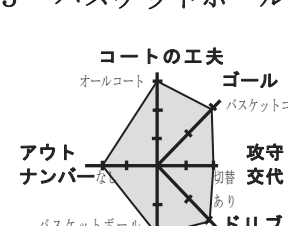
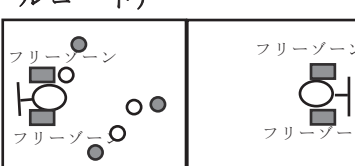
④

(1) ボールゲーム、鬼遊びの指導計画

領域	学年	取り上げるゲーム例	
ボールゲーム	1	＜ボール遊び＞ 的当て遊び 攻守（守備） いろいろな △ □ ◎	・3人対3人 ・的を選んでボールを投げる（蹴る）。 ・当たったら得点。 ・チームの合計点で競う。 規則の工夫 ・いろいろな ・いろいろなボール ・的までの距離 ・守りをつける
		＜ボールゲーム＞ 的当てゲーム 攻守（守備） 的	・3人対3人 ・真ん中に並んでいる的にボールを投げる（蹴る）。 ・チームで協力して的を押し出す ・どちらの陣地に的が多くあるかで競う。 規則の工夫 ・真ん中に並んでいる的にボールを投げる（蹴る）。 ・チームで協力して的を押し出す ・どちらの陣地に的が多くあるかで競う。
	2	＜ボールゲーム＞ 攻守交代 攻守（守備） フリーゾーン 守りゾーン	・3人対3人 ・ボールは1人1個 ・敵に取られないようにフリーゾーンに行行ってシュートする。 ・当たったら得点。合計点で競う。 規則の工夫 ・フリーゾーンの広さ ・ディフェンスの人数 ・得点方法
		＜ボールゲーム＞ 攻守入り交じり 攻守（守備） 的	・3人対3人 ・ボールはチームで1個 ・敵に取られないように味方と協力してシュートする。 ・当たったら得点。合計点で競う。 規則の工夫 ・ディフェンスゾーン ・ディフェンスの人数 ・得点方法
鬼遊び	1	＜鬼遊び＞ しっぽ取り鬼 少人数 個人対個人 どこでも 誰でも 広さ・方向 攻守交代・分離	・個人対個人 ・しっぽを相手にとられないように逃げる。 ・たくさんしっぽをとった人の勝ち。 規則の工夫 ・個人→2チーム→3チーム ・コートの広さ
	2	＜鬼遊び＞ ボール運び鬼 少人数 ボールを運ぶ 守りゾーン	・2チームに分かれる。 ・決まった守りゾーンの敵をよけてボールを運ぶ。 ・攻守を交代して、たくさん運べたチームの勝ち。 規則の工夫 ・鬼ゾーンの広さ、数 ・鬼の人数 ・コートの広さ

学習課題	児童の具体的な姿			
	技能		態度	思考・判断
	ボール操作	ボールを持たない動き		
シュートの仕方を考えて、たくさん点をとる。	・いろいろなボールでつく、転がす、投げる、当てる、蹴る。		・ゲーム中、運動に関わろうとして動いている。 ・きまりや規則を守って、学習に取り組んでいる。 ・友達と一緒に運動している。 ・勝敗を受け入れている。 ・友達と一緒に担当の用具を運んでいる。 ・用具などを決められた使い方で使っている。	・的に当たったら得点ということが分かってゲームに取り組んでいる。 ・得点の方法など規則について考え、賛同の挙手や発言などを行っている。
チームで協力して、的を押し出す。	・ねらったところにボールを投げたり蹴ったりしている。	・すぐに攻撃できるように、ボールが飛んだり、転がったりしてくるコースに入っている。		・チームで協力して的を押し出すゲームの行い方を理解し、ゲームに取り組んでいる。 ・得点の方法などの規則について考え、賛同の挙手や発言などを行っている。
相手をかわしてフリーゾーンに行き、シュートする。	・的（ゴール）に向かってボールを投げたり蹴ったりしている。	・相手に抜かれないように手を広げて守っている。		・フリーゾーンまで行くための動き方を考え、ゲームに取り組んでいる。 ・攻め方について考え、チームで話し合っている。 ・楽しく行える規則について、賛同の挙手や発言などを行っている。
チームで協力して攻め方を考えて、シュートする。	・的（ゴール）に向かってボールを投げたり蹴ったりしている。 ・得点を防ぐためにボールを捕ったり止めたりしている。	・得点を防ぐために、相手のパスコースの間に入っている。 ・パスをもらったり、シュートしたりしやすい位置に動いている。		・シュートしやすい場所を考え、ゲームに取り組んでいる。 ・攻め方について考え、チームで話し合っている。 ・楽しく行えるような規則について、賛同の挙手や発言などを行っている。
相手にしっぽを取られないように逃げる。		・相手にタッチされたり、自分のマークを取られたりしないように、逃げたり身をかわしたりしている。 ・逃げる相手を追いかけてマークを取っている。	・ゲーム中、運動に関わろうとして動いている。 ・きまりや規則を守って、学習に取り組んでいる。 ・友達と一緒に運動している。 ・勝敗を受け入れている。 ・友達と一緒に担当の用具を運んでいる。 ・用具などを決められた使い方で使っている。	・鬼遊びの行い方を理解し、しっぽの取り方を工夫している。 ・みんなが楽しめる得点の方法などの規則を考え、賛同の挙手や発言などを行っている。
攻め方を相談しながら得点ゾーンにボールを運ぶ。		・相手をかわし、相手のいない場所にかこんでいる。 ・2～3人で連携して、相手をかわしたり、走り抜けたっている。		・ボールを運ぶための動き方を理解し、ゲームに取り組んでいる。 ・攻め方について考え、チームで話し合っている。

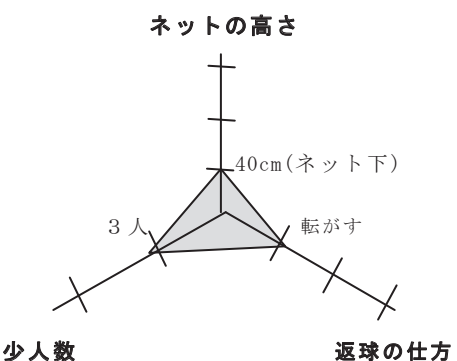
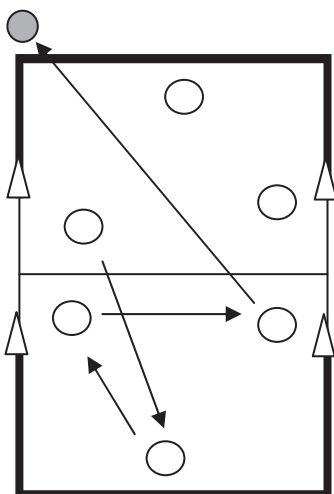
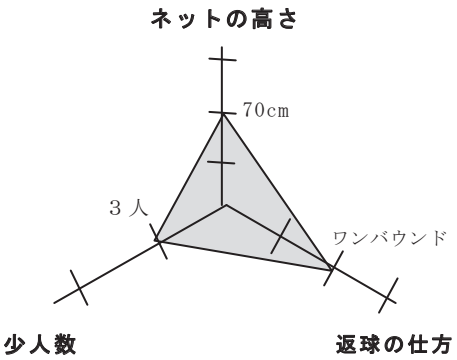
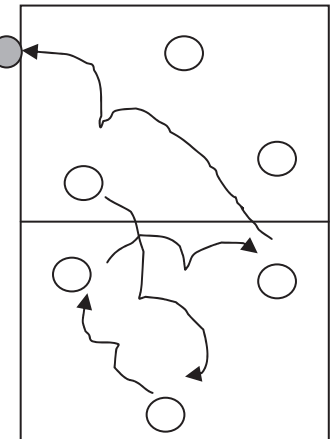
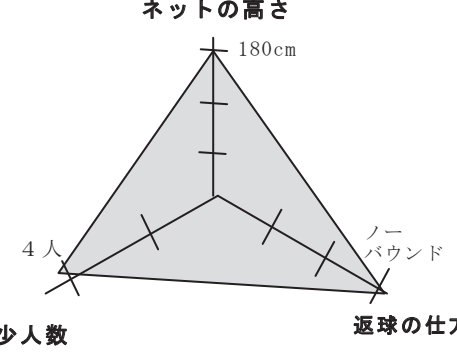
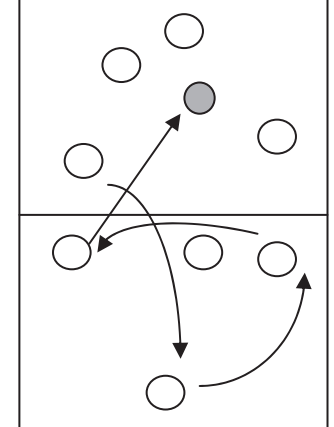
(2) ゴール型（ゲーム）の指導計画《手を使ったゴール型》

学年	取り上げるゲーム例		
3	1 セストボール（ハーフコート、アウトナンバー） 		・3人対2人 ・守備側は再開ごとにローテーション。 ・攻守は時間で交代。 ・スタートラインからリターンパスでスタートする。守備者の一人もスタートラインからスタートする。 ・リングにボールを入れると得点。 ・守備者は相手が保持しているボールを奪い取ることはできない。 ・守備者はフリーゾーンに入って守備をすることはできない。
4	2 セストボール（横グリッドによるアウトナンバー） 		・3人対3人 ・得点されたらセンターラインから再開。 ・リングにボールを入れると得点。 ・攻撃専門の人は、センターラインより自陣側へ戻れない。 ・守備者は相手が保持しているボールを奪い取ることはできない。 ・守備者はフリーゾーンに入って守備をすることはできない。
5 (委員会での検証授業)	3 バスケットボール（ハーフコート、アウトナンバー） 		・3人対2人 ・守備側は再開ごとにローテーション。 ・攻守は時間で交代。 ・スタートラインからリターンパスでスタートする。守備者の一人もスタートラインからスタートする。 ・リングにボールを入れると得点。 ・守備者は相手が保持しているボールを奪い取ることはできない。 ・守備者はフリーゾーンに入って守備をすることはできない。
	4 バスケットボール（オールコート、アウトナンバー） 		・3人対2人 ・守備側は攻守が入れ替わるごとにローテーション。 ・得点されたらエンドラインから再開。 ・リングにボールを入れると得点。 ・守備者は相手が保持しているボールを奪い取ることはできない。 ・守備者はフリーゾーンに入って守備をすることはできない。
6	5 バスケットボール（オールコート） 		・3人対3人 ・得点されたらエンドラインから再開。 ・リングにボールを入れると得点。 ・守備者は相手が保持しているボールを奪い取ることはできない。 ・守備者はフリーゾーンに入って守備をすることはできない。

※動きの質が高まった時には、フリーゾーンをなくす。

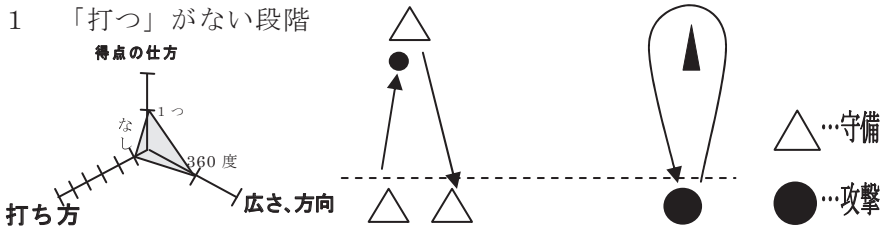
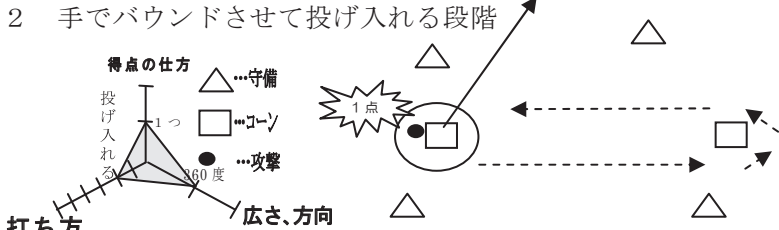
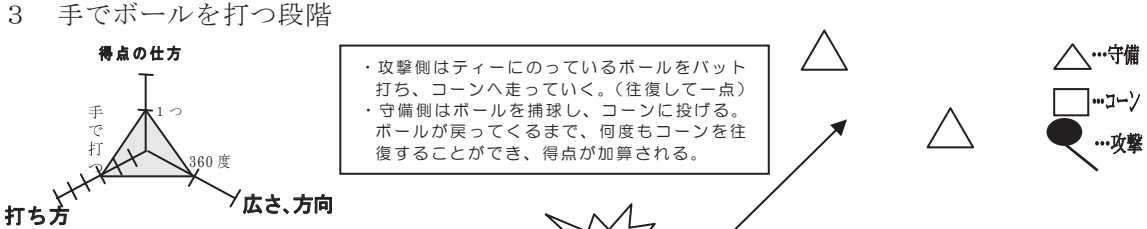
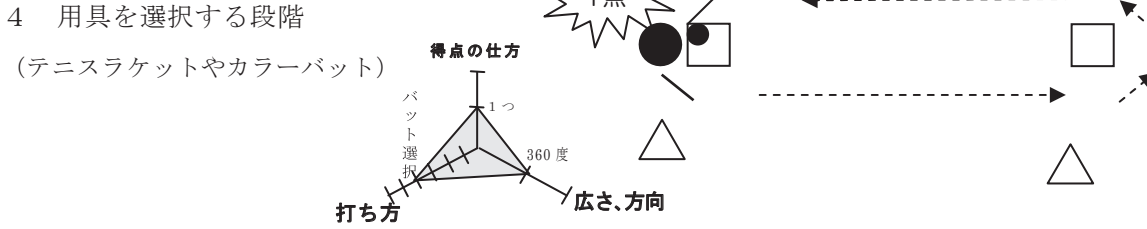
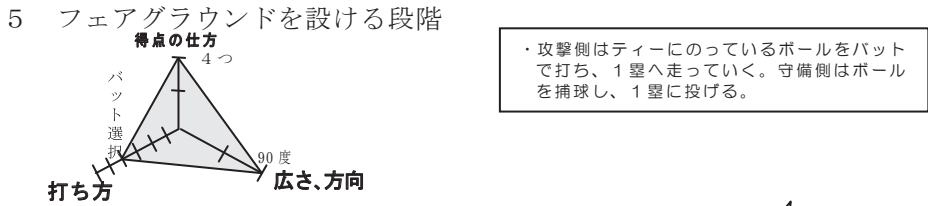
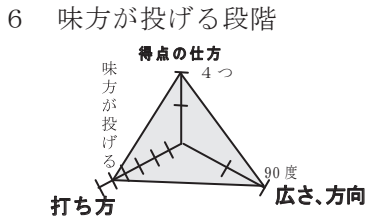
学習課題	児童の具体的な姿			
	技能		態度	思考・判断
	ボール操作	ボールを持たない動き		
パスをもらってシュートする。	・ボールを持った時に体や顔をゴールに向けている。 ・ゴールに向けてシュートしている。 ・パスをする方向へ足を踏み出してパスをしている。 ・両手を使ってボールを正面で捕っている。	・ボールの方向を見極めて、その方向に移動している。 ・シュートを打つのに有効な場所を見付けて移動している。	・ゲーム中、プレーに関わろうとして動いている。 ・規則を守ってゲームに取り組んでいる。 ・同じチームの友達に励ましの言葉掛けをしている。	・ルールに沿って自分のプレーを振り返っている。 ・みんなが楽しく行えるような規則について賛同の挙手や発言などをしている。 ・空いている場所や相手チームの動きなどに気付き、それらを生かしたシュート場面の作り方について説明したり図示したりしている。
守りをかわしてパスをつなぎ、シュートする。	・ボールを持った時に体や顔をゴールに向けている。 ・ゴールに向けてシュートしている。 ・パスをする方向へ足を踏み出してパスをしている。 ・両手を使ってボールを正面で捕っている。	・守備者がそばにいない空いている場所に動いている。 ・攻めになったときにゴール方向に走り出している。	・勝敗に対して望ましい態度をとっている。 ・友達と一緒に担当の用具を運んでいる。 ・用具などを決められた場所に置いてあるか確認している。	・ルールに沿って自分のプレーを振り返っている。 ・みんなが楽しく行えるような規則について賛同の挙手や発言などをしている。 ・空いている場所や相手チームの動きなどに気付き、それらを生かしたボールの運び方やシュート場面について説明したり図示したりしている。
パスをもらって得点しやすい位置でシュートする。	・フリーゾーンにいる味方を見付けてパスを出している。 ・フリーゾーンでパスを受けてシュートしている。	・ゴール下の相手チームが近くにいないフリーゾーンを見付けて移動している。	・ゲーム中、プレーに関わろうとして動いている。 ・練習するときに仲間に声掛けをしている。 ・ルールやマナーを守ってプレーしている。	・ルールに沿って自分のプレーを振り返っている。 ・みんなが楽しく行えるようなルールについて賛同の挙手や発言などをしている。 ・空いている場所や相手チームの動きなどに気付き、それらを生かしたシュート場面の作り方について説明したり図示したりしている。
ゴール近くまでボールを運び、シュートする。	・フリーになっている味方を見付けてパスを出している。 ・フリーゾーンでパスを受けてシュートしている。	・守備者が間に入らない場所へ移動している。 ・ボール保持者の前に立ち、手を上げている。 ・攻めになったときにゴール方向に走り出している。	・勝敗に対して望ましい態度をとっている。 ・仲間に励ましの言葉掛けをしている。 ・分担された役割を確認している。 ・友達と一緒に用具を運んでいる。	・ルールに沿って自分のプレーを振り返っている。 ・みんなが楽しく行えるようなルールについて賛同の挙手や発言などをしている。 ・空いている場所や相手チームの動きなどに気付き、それらを生かしたボールの運び方やシュート場面の作り方について説明したり図示したりしている。
相手をかわしてゴール近くまでボールを運び、シュートする。	・フリーの味方の動きに合わせてパスをしている。 ・ゴールの近くでフリーになってシュートしている。 ・相手から遠い位置でドリブルしている。	・仲間からのボールが届く、相手チームのいない場所に動いている。 ・ボール保持者の前に立ち、手を上げている。 ・攻守の切り替えに合わせて動いている。	・練習・ゲーム時のボールが散乱しないようにしている。 ・用具などを決められた場所に片付けている。	・ルールに沿って自分のプレーを振り返っている。 ・みんなが楽しく行えるようなルールについて賛同の挙手や発言などをしている。 ・空いている場所や相手チームの動き、マークを外す動きなどに気付き、それらを生かした攻め方について説明したり図示したりしている。

(3) ネット型（ゲーム）の指導計画

学年	取り上げるゲーム例
3 (委員会での検証授業)	フロアボール ネットの高さ  40cm(ネット下) 3人 転がす 少人数 返球の仕方  ・ 3人対3人 ・ ネット下の高さ 40cm。 ・ ネット下を転がってくるボールを必ず3回の触球で返す。(同一プレイヤーは複数回触れない。) ・ 得点ライン(左図の太線。実際のコートには、得点ラインがわかるようコーンを設置。)を直接ボールが抜けたり、返球ができなかったりした場合に得点。 ・ バドミントンコート。
4	アタックプレル ネットの高さ  70cm 3人 ワンバウンド 少人数 返球の仕方  ・ 3人対3人 ・ ネットの高さ 70cm。 ・ ボールをワンバウンドかノーバウンドで味方につなぎ、3回の触球で返す。(同一プレイヤーは複数回触れない。) ・ 相手コートにボールを2バウンドさせるか、ボールが自陣に返球されなかったら得点。 ・ 1人目はボールをキャッチ、3人目はノーバウンドでアタックしてよい。 ・ バドミントンコート。
5 (6)	キャッチバレー ネットの高さ  180cm 4人 ノーバウンド 少人数 返球の仕方  ・ 4人対4人 ・ ネットの高さ 180cm。 ・ ボールを相手コートに落とすか、ボールが自陣に返球されなかったら得点。 ・ 1人目2人目はボールをキャッチする。3人目はボールをはじく。 ・ 3回でボールを相手コートに返す。 ・ ブロックに限って1回で返してもよい。 ・ バドミントンコート。

学習課題	児童の具体的な姿			
	技能		態度	思考・判断
	ボール操作	ボールを持たない動き		
得点できる方法を考えて攻める。	・踏み込んでアタックしている。	・ボール操作している友達の方向に体を向けている。	・ゲーム中、プレーに関わろうとしている。 ・規則を守って、ゲームに取り組んでいる。 ・同じチームの友達に励ましの言葉掛けをしている。	・規則に沿って自分のプレーを振り返っている。 ・みんなが楽しく行えるような規則について賛同の挙手や発言などを行っている。 ・アタックの方向や強さについて、発言したり書いたりしている。
得点を防ぐ方法を考えて守る。	・転がるボールをレシーブしている。	・相手コートから返球されたボールの方向に体を向けている。		・得点を防ぐための方法を、発言したり書いたりしている。
たくさん得点をする方法を考えて攻める。	・アタッカーの前か横にパスをしている。	・ボール操作しやすいように、ボールに向かって移動している。		・パスの方向やポジションについて、図示したり説明したりしている。
チームの作戦を意識してゲームをする。	(上記の3つの姿)	(上記の3つの姿)		・作戦を考えるために、図示したり説明したりしている。
得点できる方法を考えて攻める。	・タイミングを合わせて踏み込んでアタックしている。	・ボール操作している友達の方向に体を向けている。	・勝敗に対して望ましい態度をとっている。 ・友達と一緒に担当の用具を運んでいる。 ・用具などを決められた場所に置いてあるか確認している。	・規則に沿って自分のプレーを振り返っている。 ・みんなが楽しく行えるような規則について賛同の挙手や発言などを行っている。 ・アタックの方向やバウンドさせる場所などについて、発言したり書いたりしている。
友達と協力して得点する方法を考えて攻める。	・ネット際にパスしている。	・ボール操作しやすいように、姿勢を変えている。		・味方へのパスやポジショニングなどについて話している。
たくさん得点をする方法を考えて攻める。	・相手のいないところにアタックしている。	・ボール操作しやすいように、ボールに向かって移動している。		・作戦を考えるために、図示したり説明したりしている。
チームの作戦を意識してゲームをする。	(上記の3つの姿)	(上記の3つの姿)		・作戦を考えるために、図示したり説明したりしている。
相手コートにボールを落とす。	・ボールを力強くアタックしている。	・アタックするためにネット際に走り込んでいる。	・ゲーム中、プレーに関わろうとして動いている。 ・練習するときに仲間に声掛けをしている。 ・ルールやマナーを守っている。 ・勝敗に対して望ましい態度をとっている。 ・仲間に励ましの声掛けをしている。 ・分担された役割を確認している。 ・友達と一緒に用具を運んでいる。 ・練習・ゲーム時のボールが散乱しないようにしている。 ・用具などを決められ場所に片付けている。	・ルールに沿って自分のプレーを振り返っている。 ・みんなが楽しく行えるようなルールについて賛同の挙手や発言などを行っている。 ・様々なアタックの方法について、発言したり書いたりしている。
ボールを落とされないようにする。	・相手コートから来るボールを両手でキャッチしている。	・ボールの落下点に移動している。		・ポジショニングやかまえ方などについて、発言したり書いたりしている。
チームで協力して攻める。	・味方が受けやすいようにパスしている。	・いっつスがきてもいいように、ネット際に走り込んでいる。		・作戦を考えるために、図示したり説明したりしている。
チームの特徴を生かした作戦を考えてゲームをする。	(上記の5つの姿)	(上記の3つの姿)		・チームの友達のよさを生かした作戦を、図示したり説明したりしている。

(4) ベースボール型（ゲーム）の指導計画

学年	取り上げるゲーム例
3	1 「打つ」がない段階  得点の仕方 1つ なし 360度 打ち方 広さ、方向 △…守備 ●…攻撃 ・守備側がキャッチボールをしてボールが戻ってくる間に、攻撃側が走って戻ってきたら1点
	2 手でバウンドさせて投げ入れる段階  得点の仕方 1つ 投げ入れる 360度 打ち方 広さ、方向 △…守備 □…コーン ●…攻撃 ・攻撃側はバウンドスペースに手でボールを投げ、コーンへ走っていく。（往復して一点） ・守備側はボールを捕球し、コーンに投げる。 ・ボールが戻ってくるまで、何度もコーンを往復することができ、得点が増える。
	3 手でボールを打つ段階  得点の仕方 1つ 手で打つ 360度 打ち方 広さ、方向 △…守備 □…コーン ●…攻撃 ・攻撃側はティーにのっているボールをバット打ち、コーンへ走っていく。（往復して一点） ・守備側はボールを捕球し、コーンに投げる。ボールが戻ってくるまで、何度もコーンを往復することができ、得点が増える。
4 (委員会での検証授業)	4 用具を選択する段階 (テニスラケットやカラーバット)  得点の仕方 1つ バット選択 360度 打ち方 広さ、方向 △…守備 □…コーン ●…攻撃 ・攻撃側はティーにのっているボールをバットで打ち、1塁へ走っていく。守備側はボールを捕球し、1塁に投げる。
	5 フェアグラウンドを設ける段階  得点の仕方 4つ バット選択 90度 打ち方 広さ、方向 △…守備 □…コーン ●…攻撃 ・攻撃側はティーにのっているボールをバットで打ち、1塁へ走っていく。守備側はボールを捕球し、1塁に投げる。
5 (6)	6 味方が投げる段階  得点の仕方 4つ 味方が投げる 90度 打ち方 広さ、方向 △…守備 □…ベース ●…攻撃 ・攻撃側はティーにのっているボールをバットで打ち、1塁へ走っていく。守備側はボールを捕球し、1塁に投げる。
	7 相手がやさしく投げる段階  得点の仕方 4つ 相手が投げる 90度 打ち方 広さ、方向 △…守備 □…ベース ●…攻撃 ・攻撃側はティーにのっているボールをバットで打ち、1塁へ走っていく。守備側はボールを捕球し、1塁に投げる。

学習課題	児童の具体的な姿			
	技能		態度	思考・判断
	ボール操作	ボールを持たない動き		
投げたり捕ったりして得点する	・ボールを取っている。 ・ボールを友達の胸元に投げている。	・友達が投げたボールに合わせて正面に動いている。		・規則に沿って自分のプレーを振り返っている。
守り方を考えて得点を防ぐ	・ボールを強く地面にたたきつけている。 ・ボールを捕っている。 ・ボールを友達の胸元に投げている。	・ボールの方向に合わせてすばやく移動し、ボールの正面に動いている。	・ゲーム中、プレーに関わろうとしている。 ・規則を守って、ゲームに取り組んでいる。 ・同じチームの友達に励ましの言葉掛けをしている。	・相手が打つ方向を考えてチームでポジションを考えている。 ・みんなが楽しく行えるような規則について賛同の挙手や発言などを行っている。
攻め方を考えて得点する	・ねらったところに手で打っている。 ・ボールを捕っている。 ・ボールを友達の胸元に投げている。	・ボールの方向に合わせてすばやく移動し、ボールの正面に動いている。 ・友達の動きに合わせて、ベースに着いたり、ボールの中継地点でボールがくるのを待ったりしている。	・勝敗に対して望ましい態度をとっている。 ・友達と一緒に担当の用具を運んでいる。 ・用具などを決められた場所に置いてあるか確認している。	・相手が打つ方向を考えてチームでポジションを考えている。 ・相手のいないところをねらう方向や、打球の方向に応じた一人一人の動き方を、説明したり図示したりしている。
チームで協力して得点をとる	・ねらったところにバットで打っている。 ・ボールを捕っている。 ・ボールを友達の胸元に投げている。	・ボールの方向に合わせてすばやく移動し、ボールの正面に動いている。 ・友達の動きに合わせて、ベースに着いたり、ボールの中継地点でボールがくるのを待ったりしている。		
チームの作戦を意識してゲームをする				
チームの特徴を生かした作戦を考えてゲームをする	・味方が投げたボールを打っている。 ・ボールを捕っている。 ・ボールを友達の胸元に投げている。	・ボールの方向に合わせてすばやく移動し、ボールの正面に動いている。 ・友達の動きに合わせて、ベースに着いたり、ボールの中継地点でボールがくるのを待ったりしている。 ・塁間を打球の状況に応じて走塁している。	・ゲーム中、プレーに関わろうとして動いている。 ・練習する時に仲間に言葉掛けをしている。 ・ルールやマナーを守っている。 ・勝敗に対して望ましい態度をとっている。 ・仲間に励ましの言葉掛けをしている。 ・分担された役割を確認している。 ・友達と一緒に用具を運んでいる。 ・練習やゲーム時のボールが散乱しないようにしている。 ・用具などを決められ場所に片付けている。	・規則に沿って自分のプレーを振り返っている。 ・みんなが楽しく行えるような規則について賛同の挙手や発言などを行っている。 ・相手のいないところをねらう方向や、打球の方向に応じた一人一人の動き方を、説明したり図示したりしている。

IV 研究のまとめ

1 成果

(1) 中心的な楽しさの明確化

- ・ ゲーム・ボール運動の領域の特性と内容ごとの「ゲームの構造」を踏まえ、領域の内容ごとの「中心的な楽しさ」を明確にすることにより、今後のゲーム・ボール運動の領域の指導を行う際の基盤となる考え方を示すことができた。

(2) ボール運動系の指導計画の作成

<教材化>

- ・ 「教材の観点」、「教材の要素」、「教材の視点」を明確にするとともに、教材の工夫・開発を行うための段階とその具体的内容を分析し整理した。そして、今後、各学校で教材の工夫・開発を行う際に、系統적かつ効果的な教材の具現化を可能にする「教材化の段階表」を示すことができた。
- ・ 各学年で取り扱う教材を「教材化の視点と段階」を基に工夫・開発し、ゲーム例（教材）として具体的に提示できた。

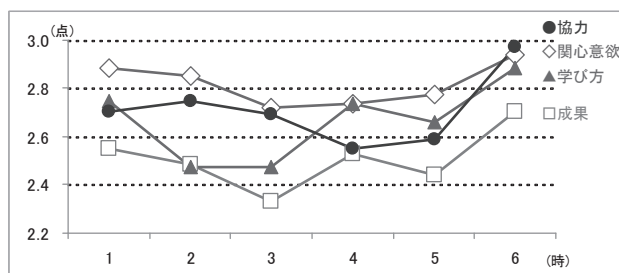
<児童の具体的な姿の明確化>

- ・ ゲーム例（教材）ごとに、学習課題を明確にするとともに、「技能」「態度」「思考・判断」それぞれの「児童の具体的な姿」を明確にした。このことにより、学習課題に応じた「児童の具体的な姿」を基準にして、児童のつまずきや質の高まった姿を想定し、児童の学習状況に応じた支援を具体化できた。
- ・ ゲーム中の活動のほとんどを占める「ボールを持たないときの動き」の具体的な姿を明らかにした。このことにより、ボール操作に至るための動きや守備にかかわる技能への的確な指導を行うことができた。

<進んで運動に取り組む児童の育成>

- ・ 6年間を見通した指導計画の作成により、ゲーム領域、ボール運動領域を通した系統的な指導の方向性が明らかになり、ボール運動系の領域の中心的な楽しさを味わわせる指導の在り方を具現化することができた。
- ・ 検証授業の際に「形成的授業評価」の手法により授業分析を行った結果、全ての項目点が上昇した。特に、「意欲・関心」と「協力」に関する項目の点数が高く、本研究により、児童が進んで運動に取り組む姿を具現化できた。

<形成的授業評価の推移(第5学年「バスケットボール」)>



2 課題

- ・ 本委員会で研究開発を行った本年度の内容を、より多くの学校が活用できるよう、様々な場面を通して研究内容の普及啓発を図るとともに、ボール運動系の領域の中心的な楽しさを味わわせるより効果的な指導内容・方法のさらなる研究開発を行う。
- ・ 評価内容、評価場面や時期等の妥当性や精度を高めること、陣地を取り合うゴール型を含めた指導計画や児童の具体的な姿を検討すること等について研究開発を行う。

＜小学校道徳研究開発委員会＞

研究主題

自己の生き方についての考えを深める道徳授業の創造

～東京都道徳教育教材集を効果的に活用する指導法の開発を通して～

研究の概要

本研究は、児童が道徳の時間を通して、将来にわたって自分の夢や希望をもち、それを実現しようとするよりよい生き方を探究できるような指導法を開発することを目的とする。平成25年3月に配布された「東京都道徳教育教材集」の特色である「先人の言葉や生き方」などがもつ魅力を生かし、資料分析や発問構成などの指導法の工夫を通して、よりよい生き方を見つめ、自己を高める児童を育てたい。

I 研究の目的

学習指導要領が改訂されて3年が経過した。道徳の時間においては、全教育活動で行われる道徳教育の要として位置付けられ、また、「自己の生き方についての考えを深める」ことが新たに付け加えられた。これは、「道徳の時間の特質である道徳的価値の自覚を一層促し、そのことを基盤としながら、児童が自己の生き方に結び付けて考える」という趣旨を一層、重視してのことである。本部会ではこのことを、児童一人ひとりがねらいとの関わりにおいて自己を見つめ、道徳的価値の自覚を深め、道徳的实践力を主体的に身に付けていくという「道徳の時間の特質」を更に深めていくことと捉えた。また児童が、自己を見つめて現在や将来の生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めていくことであると捉えた。そして、このことを踏まえた授業を行っていくためには、どのような授業設計をしていくのが効果的であるのかを追究したいと考え、本研究主題を設定した。

小学校学習指導要領解説道徳編には、「児童は、道徳的価値の自覚を深める過程で同時に自己の生き方についての考えも深めているが、特にそのことを強く意識して指導することが重要である。」と示されている。このことを踏まえ、本部会では、道徳の時間に用いる資料が「学習の深まり」を図る上で、大変重要になると考えた。資料には、児童が人間としての在り方や生き方などについて多様に感じ、考えを深め、互いに学び合う共通の学習材としての重要な役割があるからである。道徳的価値の自覚を深め、自己の生き方についての考えを深めるためには、児童の感性に訴え、感動を覚えるような魅力的な資料を選定、開発していくことが大切であると考えた。

平成25年3月に東京都教育委員会は「東京都道徳教育教材集」を作成、配布した。この教材集は、「先人の言葉、生き方」を中心に構成されている。この機を捉え、本部会では、道徳の時間にこの教材集を効果的に活用し「先人の生き方を見つめることを通して、自己の生き方についての考えを深めていく」指導法を探究することが大切であると考え、上記の副主題を設定し、研究を深めていくこととした。

Ⅱ 研究の内容と方法

1 先人の伝記を道徳の時間の中心資料とすることについて

(1) 先人の伝記を道徳の時間に生かすことの意義等

先人の伝記を取り上げる意義について小学校学習指導要領解説道徳編では、「先人の伝記には、多様な生き方が織り込まれ、生きる勇気や知恵などを感じることができるとともに、人間としての弱さを吐露する姿などにも接し、生きることの魅力や意味の深さについて考えを深めることができる。」とある。また東京都道徳教育教材集活用のための指導資料には、「先人の伝記からは、その多様な生き方を通して、生きる勇気や人生の知恵などを感じたり学んだりすることができる。また、生きることの魅力や意味について考えを深めることもできる。」、「道徳の時間では、この『伝記読み物資料』を中心資料として活用し、児童・生徒が道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、内面的資質としての道徳的実践力を主体的に身に付けていくようにする。」と示している。

以上のことを踏まえ、本部会では、道徳の学習で先人の伝記を中心資料として活用する意義を次のように考えた。

ア 伝記は、「困難なことにぶつかり苦しんだり悩んだりするが、最後には夢が叶ったり名声を得たりする。」流れになっていることが多いので、読めば前向きな気持ちになることができる。

イ 「努力は報われる。」、「信じれば夢は叶う。」など、自分の生き方を重ね合わせて考えることができ、児童は「自分にもできるかもしれない。」、「きつとなれる。」、「自分も頑張ろう。」と夢や希望、目標をもつことができる。

ウ 伝記は、実話でリアリティーがあるため、その内容によっては、児童が実現可能な夢や希望、目標をもつこともできる。

エ 素晴らしい先人の生き方を自分の生きる指針(モデル・型・手本)とし、自分の生き方と照らし合わせながら、客観的に自分自身の生き方を見つめ、「自分も近付きたい。」、「あやかりたい。」、「感動したい。」という気持ちになることができる。

道徳の時間の中心資料は、道徳的価値の自覚を深めていくための手掛かりとして極めて大きな意味をもっている。その中心資料が「伝記読み物資料」のように児童にとって魅力的で、自己の生き方について考えることができるものであるならば、自己の生き方についての考えを深める道徳授業を創造していく上で、大きな力になると考える。

2 先人の伝記を効果的に活用し、児童に自己の生き方についての考えを深めさせることについて

- 研究主題に迫るための資料活用の視点として、以下の3点を設定した。

視点① 効果的な資料活用のための資料分析の工夫

視点② 資料分析に基づいた発問計画の工夫

視点③ 展開後段で自己を振り返る場面の工夫

(1) 視点①「効果的な資料活用のための資料分析の工夫」について

ア 資料分析の意義

資料分析をすることによって、授業者が資料に含まれる道徳的価値について整理し、授業のねらいを焦点化する。また、児童が先人の生き方から心を動かされる場面等を明確にすることで、発問の設定や精選へとつなげる。

イ 資料分析の手順

順番	段階	手順の詳細
①	場面分け	中心となる登場人物の心の動きや、時間的な変化、状況の変化などに着目して、いくつかのまとまりに分ける。
②	心の動きと道徳的価値の分析	場面ごとに、登場人物の行為を支える心の動き（気持ち）を分析する。また、そこに含まれる道徳的価値（中心的価値・関連的価値）を明らかにする。
③	心が動く場面の分析	児童が先人の生き方に心を動かされるであろう場面を明らかにする。
④	発問設定	学習のねらいに迫ることができるように、心を動かされるであろうと考えられる場面を考慮しながら発問を設定する。

(2) 視点②「資料分析に基づいた発問計画の工夫」について

ア 「発問計画表」作成の意義

資料分析を基に、詳細な「発問計画表」を作成する。「発問計画表」には、教師の発問とともに予想される児童の反応、及びそれに対する補助発問や切り返しの発問をA4用紙1枚に納めて明記することで、より一層、本時のねらいとする価値に迫る話し合いとなるようにする。【※1参照】

イ 「発問計画表」作成に当たっての留意点

(ア) 伝記のもつ魅力により、児童は深く心を揺さぶられるであろう。それゆえ、登場人物の気持ちについては、発問を焦点化して深く考えさせていきたい。また、45分という限られた時間についても考慮しなくてはならない。そこで、本部会では、発問の設定を次のように行った。

① 資料提示の後、初発の感想を話し合ったり、資料の内容を確認したりする。



② 児童が先人の生き方に触れ、心を揺さぶられるであろう場面の一つ又は二つに絞り、発問を精選する。

(イ) より話し合いが深まるように、予想される児童の反応を踏まえて事前に補助発問や切り返しの発問を考え、計画に明記しておく。

(ウ) 資料には、ねらいとする価値以外の価値も含まれているので、話し合いがねらいに沿ったものとなるように、登場人物の心の動きも予想しておく。

(3) 視点③「展開後段で自己を振り返る場面の工夫」について

ア 展開後段で自己を振り返る場面を工夫する意義

展開後段は、特に自己を振り返る場面として、本時のねらいに迫り、自己の生き方についての考えを深めるために大切にしたい。そこで、自己を振り返るための手だてとして「展開後段の発問」と「書く活動」に焦点を当て、授業を組み立てる。

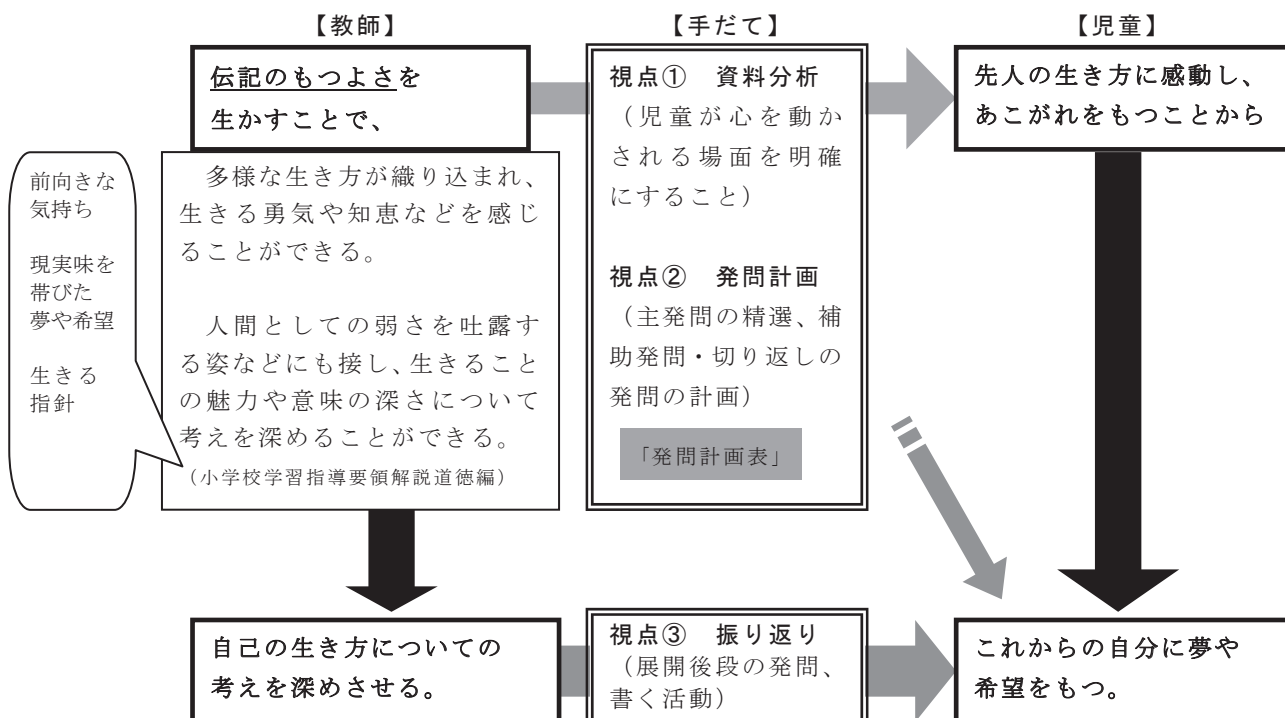
イ 展開後段の「自分の生き方についての考えを深めることができる」発問の設定

展開前段での先人の生き方への深い感動を生かすために、展開後段では、前段で学んだことを整理し、児童に夢や希望をもたせ、今後の自分の生き方についての考えを深めることができる発問を設定する。

ウ 展開後段の書く活動の工夫

書くことには、「見つめる（認知）」、「考える（思考）」、「伝える（伝達）」といった意義がある。このことを踏まえ、自己の生き方についての考えを深めるために、書く活動を通して「自己を見つめて、自己の内面と深く対話をし、他者に伝える時間」を大切にすべきであると考え。したがって、授業で用いるワークシートについても、形式や書く分量などを吟味し、よりねらいに迫るために適切なものとなるように工夫する。

3 研究構想図



※ 1 発問計画表の一例

資料名 「みんなのために」（東京都道徳教育教材集）

※フローレンス・ナイチンゲールの伝記

（➡ は、発問設定までの資料分析の流れを表している。）

場面	登場人物の心の動き	道徳的価値 中心価値 他価値
① フローレンスがお母さんと一緒に服や食べ物を配る活動をしている。	・みんなが喜んでくれてうれしい。 ・もっと仕事をした	思いやり 生命尊重 勤労
② フローレンスがキースさんの家に行き声をかけると、断りの言葉が返ってきた。	・どうして喜んでくれないんだろう。 ・病気で苦しいのかな。	思いやり 勤労
③ フローレンスが窓の外を眺めながら、キースさんが喜ぶことを考えている。	・おじいさんは、何をしてほしいのか。 ・おじいさんに、喜んでもらいたい。	勤労 思いやり
④ キースさんに対して、フローレンスが歌を歌っている。	・キースさんが喜んでくれるといい。 ・早く病気が治るといい。	思いやり 勤労
⑤ フローレンスの歌を聞いたキースさんの目からは、涙があふれてきた。	・キースさんが喜んでくれて嬉しい。 ・キースさんのほしかったものはこれだったんだ。	思いやり 勤労
⑥ フローレンスの歌声を聞いて、キースさんがにっこりした。	・喜んでくれてよかった。 ・みんなが喜ぶことをしてあげたい。	勇気 勤労
⑦ フローレンスは、その人のことを思って、話し相手になったり、家の掃除をしたりしている。	・みんなの役に立ちたい。 ・いつもその人のことを思って仕事をしよう。	勤労 思いやり 勤勉努力

発問の意図と発問 発問計画

【特に心が動くであろう場面】
→ ② ③ ④

【発問の意図】

相手のために何ができるのかを考えるフローレンスに共感させることで、人のために働くことについて考えさせる。

【発問】

窓の外の景色をながめながら、フローレンスはどんなことを考えていたのでしょうか。

【発問計画】

- 児童の反応
→ 切り返しの発問
- おじいさんは、何をしてほしいの
だろう。
→ フローレンスは、おじいさんの気持ちを不思議に思っただけでしょうか？
- おじいさんによるこんでもらいたい。
→ おじいさんに喜んでもらえるためにフローレンスは、どんなことを考えたのでしょうか。
- 何をしてあげることがいいの
だろう。
→ おじいさんが服やパンでは喜ばなかったことについて、フローレンスは、どのように考えたのでしょうか。

Ⅲ 実践事例

1 第3学年「不撓不屈」の指導

主題名	あきらめずにやりとげる	内容項目	1－(2)
資料名	わたしの命は音楽とともに —ルートビヒ・バン・ベートーベン—	出典	東京都道徳教育教材集

(1) 主題設定の理由

ア ねらいとする道徳的価値について

人間が自立し、よりよく生きていくためには、自分がやらなければならないことや、自分でやろうと決めたことをしっかりやり抜くことが大切である。そのためには、何事にも粘り強く取り組み、努力し続ける忍耐力も求められる。

努力し続ける過程では、辛くなったり、挫折感を味わったりすることも少なくない。そこであきらめずに粘り強くやり遂げることで、自分の夢や希望の実現ができることに気付かせ、自分でやろうと決めたことをやり遂げようとする心情を育てていきたい。

イ 児童の実態について

児童は、自分の夢や目標に向かって頑張り、その実現を図ろうとする気持ちをもっている。一方で、その夢や目標が実現できずに失望したり、実現のために伴う努力の辛さに耐えられなかったりして、夢や目標を諦めるという経験もしてきている。

そこで先人の、困難なことがあっても、諦めずにやり抜くことができたすがすがしさや達成感に共感させ、粘り強くやり遂げようとする心情を育てていきたい。

ウ 資料について

本資料は、ベートーベンが音楽家として活躍し、有名になり、自分自身が一番輝いていた時に、原因不明の耳の病気にかかり、音楽家としての絶望を味わう。しかし、最後と思って弾いたピアノで心の中から音楽が聞こえ、あきらめずに曲を作り続け、後世にまで残る有名な曲である交響曲第九番を作曲した実話に基づいた資料である。

ベートーベンの曲は、いろいろな場面で児童が耳にしている。音楽室にも写真が飾られていたり、交響曲第九番は年末に演奏され、児童も演奏したり歌ったりするなど身近なものとなっている。伝記としてもよく読まれる人物である。本資料を通して、児童にとって、偉大な人物が困難に遭い、その中で苦しみながらもあきらめずに作曲を続けた気持ちに共感させ、自分でやろうと決めたことをやり遂げようとする心情を育てていきたい。

(2) 自己の生き方についての考えを深めるための工夫

ア 資料分析をした結果、ねらいに迫るためには、長い年月をかけていろいろな思いの中で作った交響曲第九番の演奏会で、オーケストラのみんなや観衆から賞賛された場面が一番児童の心を響かせるところであると考え、この場面を中心発問とした。

イ 書く活動は、展開の後段で行い、ベートーベンの生き方を通して大切だと思ったことは何かを考えさせることで、自己の生き方を考えさせる。

ウ ベートーベンのような不^{とう}撓不屈の体験は、児童には、実感をもって捉えることは難しいので、普段、児童があきらめないで頑張っている姿と、欧米の名言「意思のあるところに道は開ける」をしおりに書いて一人一人に渡し、自己の生き方を振り返ることができるようにした。

(3) 発問計画表

場面	登場人物の心の動き	道徳的価値 中心価値 他価値	発問の意図と発問計画
①目を覚ました時異変を感じた。	・ どうしたのだろう。		【心が動くであろう場面】 →⑦⑧⑨ 【発問の意図】 絶望の中で希望を見だし、不安がありながらもあきらめずに曲作りをしようとする気持ちに共感させ、あきらめずに頑張ることについて考える。 【発問】 心の中の音楽を聴きながら曲を作っていた時、ルートビヒはどんなことを考えていたでしょう。
②音楽家として活躍していた。	・ 音楽家としてどんどん成長したい。	個性伸長	
③耳の病気にかかり、少しずつ音が聞こえなくなった。	・ 何でこんなことになってしまうんだ。	生命尊重	
④耳の病気にかかり何年も医者を探し診てもらいが耳が聞こえなくなり希望を失う。	・ ずっと治らないのか。 ・ もう音楽家としてはやっていけない。	生命尊重	
⑤弟に手紙を出し、自分の弱点をさらけ出せた。	・ 弟に素直に言えて少し楽になった。 ・ 夢も希望もない。		
⑥最後だと思い、けんばんにふれ、心の声が聞こえてきた。	・ なぜだろう。 ・ これからも曲を作れるかも。		
⑦心の中から音楽が聞こえた。	・ きっと曲を作れる。 ・ あきらめないぞ。	不撓不屈	【発問計画】 ●児童の反応 →切り返しの発問 ●今までのようには作れないかもしれない。 →そのような不安やイライラをどんな思いで乗り越えたのでしょうか。
⑧自分の心の音を聞きながら、試行錯誤をして、工夫や努力を重ねた。	・ 曲を絶対作りたい。 ・ あきらめないぞ。 ・ 努力すれば大丈夫。 ・ 昔のように作れない。	不撓不屈	
⑨長い年月をかけて「交響曲第九番」を仕上げた。	・ 努力を实らせたい。 ・ 今まで以上の曲を作りたい。	不撓不屈	【特に心が動くであろう場面】 →⑫ 【発問の意図】 いろいろな思いをしながらあきらめずに努力することの大切さを共感させる。 【発問】 ルートビヒは、オーケストラや観客が拍手してくれている姿を見て、心の中にどんな思いがあふれてきたでしょう。
⑩交響曲第九番を仕上げ、自分で指揮をした。	・ 絶対に成功させたい。 ・ 聞こえないから、指揮は無理かもしれない。	不撓不屈	
⑪指揮を終えた。	・ 成功したのかな。 ・ みんなの反応は…。		【発問計画】 ●児童の反応 →切り返しの発問 ●うれしい。 →今までのどういう思いがあつて、うれしかったのでしょうか。 ●頑張つてよかった。 →ルートビヒは、どんなことが大切だったのでしょうか。
⑫みんなが賞賛してくれて、大きく両手をあげてこたえた。	・ 満足いく曲ができた。 ・ 頑張つてきてよかった。 ・ 努力が報われた。	不撓不屈	

(4) 本時

ア ねらい

音楽家として絶望的な状況の中にも、かすかな希望の光を見出し、あきらめずに努力して交響曲第九番を作り上げたルートビヒの気持ちを考えることを通して、自分でやろうと決めたことを粘り強くやり遂げようとする心情を育てる。

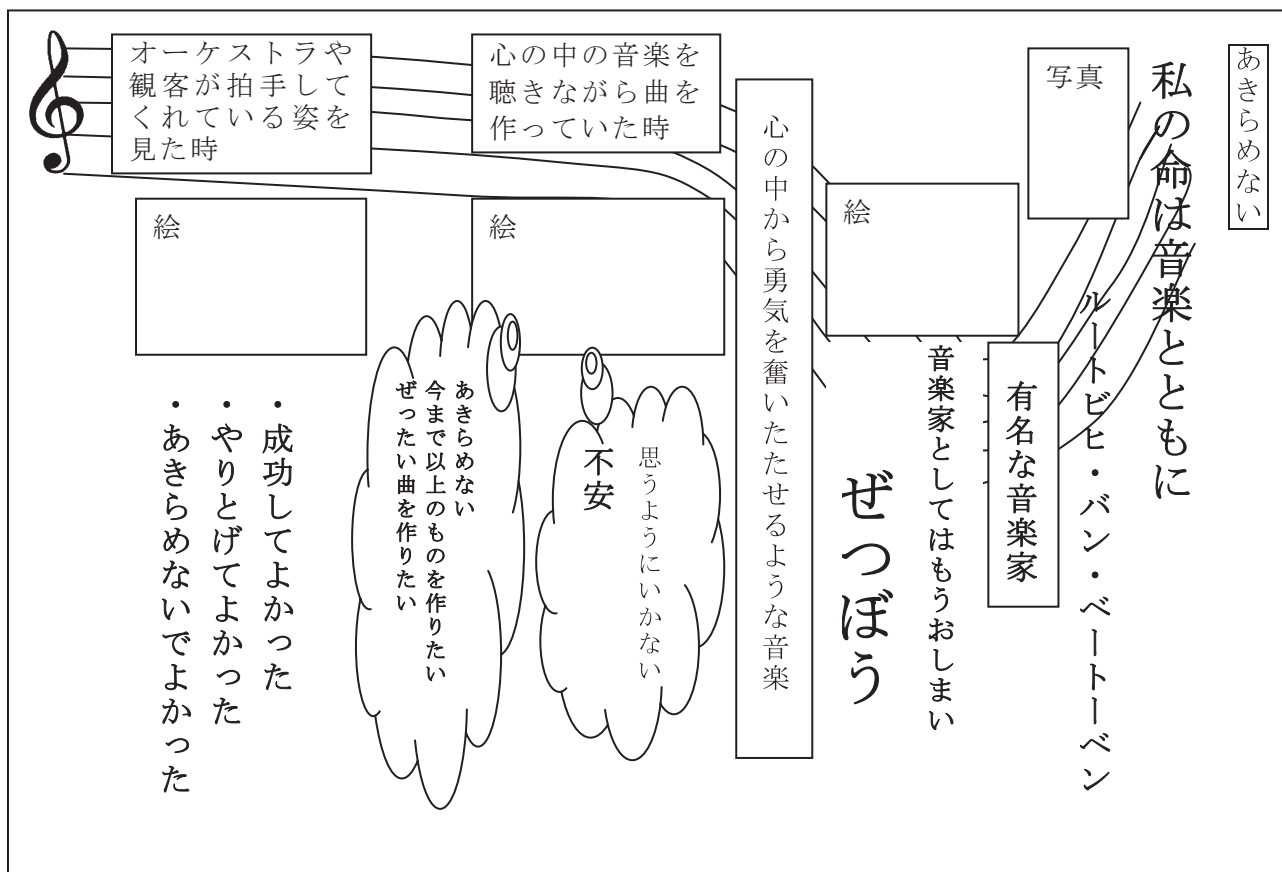
イ 展開

	○発問 ◎中心発問・予想される児童の反応	◆指導上の留意点
導入	1 「交響曲第九番」の演奏を視聴し、ベートーベンの説明を聞くことで、資料に関心をもつ。 ○ この曲は、何という曲でしょう。 ○ 誰が作ったと思いますか。	◆児童の身近に聞いている曲の中にもベートーベンが作曲した音楽がよくあることに気付かせ、ベートーベンの説明をする。また、児童にベートーベンのことで知っていることを問う。 ◆この曲は聴力を失ってから長い年月をかけて作ったことをおさえ、価値への導入に結び付ける。
展開	2 資料「わたしの命は音楽とともに」を読んで話し合う。 ○心の中の音楽を聴きながら曲を作っていた時、ルートビヒはどんなことを考えていたでしょう。 ・絶対曲を作って見せるぞ。 ・耳が聞こえていた時に負けない曲を作りたい。 ・あきらめないぞ。 ・今までのようには作れないかもしれない。 ◎ルートビヒは、オーケストラや観客が拍手してくれている姿を見て、心の中にどんな思いがあふれてきたでしょう。 ・こんなにうれしいことはない。 ・あきらめずに頑張ってきてよかった。 ・あきらめていたらこの思いにならなかった。 ・努力すれば、夢がかなう。 3 自分を振り返る。 ○ルートビヒの生き方を通して、あなたが大切だと思ったことは何ですか？ ・何があってもあきらめないこと。 ・努力すれば、自分の夢をかなえられる。	◆範読は、児童の様子を見て、指揮棒などの小道具を使いながら語り、最後の演奏会のところは交響曲第九番の演奏を流す。 ◆音楽家にとって聴力がとても大切であり、音が失われていった時のルートビヒの絶望感を考えさせる。 ◆小さな音であるが、勇気を奮い立たせるような音であったことをおさえてから第一発問に入る。 ◆うれしいという意見が出た場合は、補助発問で今までどのような思いでやってきたからなのかを発表させる。 ◆ワークシートに書かせる。 ◆BGMで交響曲第九番を流す。
終末	4 教師から励ましの言葉をもらう。	◆名言と児童一人ひとりの頑張っていることを書いたしおりを渡す。 ◆最後に歓喜の歌を歌う。

ウ 評価

- ・ ルートビヒが困難を乗り越え、交響曲を作り、観客に喜んでもらえた時の気持ちに共感することができたか。（発言・ワークシート）
- ・ あきらめずに努力し、やりとげることの大切さを実感することができたか。（ワークシート）

(5) 板書計画



(6) ワークシート

わたしの命は音楽とともに

ルートビビ・バン・ベートーベン

名前 ()

☆ ルートビビ・バン・ベートーベンの生き方を通して、大切な
と思ったことは何ですか？

(7) 考察

- 「効果的な資料活用についての視点①～③に関するもの」と「視点以外に関するもの④」に分類して考察した。

① 効果的な資料活用のための資料分析の工夫に関するもの

- ・ 資料分析に基づいて、児童の心が動くであろう場面を事前に把握して資料提示をした。その場面では、さらに気持ちを込めたり、動作化を入れたりするなど、工夫して資料を提示したことで、児童を資料の世界へと自然と引き込むことができた。しかし、発達段階を考えて、音声だけでなく視覚からも入るように、適宜、場面絵などを用いれば、資料理解を一層促すことができたと考える。



② 資料分析に基づいた発問計画の工夫に関するもの

- ・ 発問計画表を作成したことで、授業の見通しをもつことができ、より児童の反応を的確に捉えながら授業をすることができた。
- ・ 中心発問をする前に「心の中の音楽を聴きながら曲を作っていた時、ルートビビはどんなことを考えていたでしょう。」と発問をしたことによって、「よし、やるぞ!」という前向きな気持ちと、「できるだろうか…」という不安な気持ちを押さえ、中心発問で、より登場人物の気持ちを深く考えることができた。
- ・ 中心発問では、児童の反応として最初は「うれしい」、「やったぞ」など、ルートビビの現在の気持ちのみについて考えていたが、発問計画表で準備をしていた補助発問をすることにより、児童からは、ルートビビが取り組んできた過程に関する「できるかどうか不安だったけど、頑張ってたよかった。」、「負けなくて頑張ってきたよかった。」などの意見も出された。



③ 展開後段で自己を振り返る場面の工夫に関するもの

- ・ 振り返りで、児童にとって、生きる指針となるように「大切だなと思ったことは何ですか。」と発問をしたことで、児童からは「あきらめないでやっていきたい!」など、自己の生き方について見つめ、考える発言を得ることができた。



④ 視点以外に関するもの

- ・ 終末で価値内容に関わる先人の名言を取り上げたことは、ねらいとする価値に関わる意識の継続化を図る上で効果的だった。
- ・ 自分の生き方をふり振り返りやすいように、指導者が、一人ひとりの児童の「あきらめないで頑張っているところ」を見付け、それを名言が書かれたカードの裏に記して手渡したことは、ねらいとする価値を強く印象付けることにつながった。



2 第5学年「不撓不屈」の指導

主題名	目標を立ててくじけず努力する	内容項目	1－(2)
資料名	「カタツムリの歩みのように － 北村 西望 －」	出典	東京都道徳教育教材集

(1) 主題設定の理由

ア ねらいとする道徳的価値について

小学校高学年の時期になると、理想主義的な傾向が強くなると言われている。ある人物の生き方にあこがれたり、自分の夢や希望がふくらんだりする。同時に、自信がもてなかったり、夢と現実との違いを意識したりする時期でもある。このような時期であるからこそ、様々な生き方への関心を高めるとともに、計画的に努力目標を立て、くじけずに希望と勇気をもって取り組み、その理想に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力を育てたい。

イ 児童の実態について

高学年になると、委員会活動や行事などで自主的に目標を立て、実行することが増える。しかし、高い目標を設定しても、その過程で思いどおりにならずに失敗してしまうと、意欲を失い、投げ出してしまうことも多い。

1 1月には移動教室があり、一人一人の目標や班の目標、係の目標などを立て、試行錯誤しながらも児童は目標に向かって取り組んできた。また、1 2月には、学芸会が行われた。これらで経験したことを生かし、日々の生活や行事に対しても、一人一人が目標を立て、くじけずに希望と勇気をもって取り組もうとする心情を育てたい。

ウ 資料について

本資料は、長崎の平和祈念像を制作した彫刻家、北村西望の若いころの話である。彼には二人のライバルがいた。二人とも西望よりも早くから高い評価を受けていた。西望は、二人のライバルを目標に努力し続けたが、なかなか自分の作品が評価されず挫折することもあった。しかし諦めず努力し続け、彫刻界の第一人者となった。西望は平和祈念像制作中のエピソードを基に、自分の半生をカタツムリの歩みに置き換え振り返っている。

本資料を通して、西望の人生の挫折感に共感させるとともに、目標に向かって努力する大切さに気付かせたい。

(2) 自己の生き方についての考えを深めるための工夫

ア 児童が先人の生き方に触れ、心を揺さぶられるであろう場面を一つに絞り、発問を精選した。資料分析をした結果、ねらいに迫るためには、制作中にカタツムリを見つけ、今までの自分の歩みとカタツムリとを重ね合わせて、一句書き留めた場面が一番児童の心に響くと捉え、中心発問とした。

イ 書く活動は、展開の後段で行い、北村西望の生き方を通して、何が自分のこれからの生活を支えていくと思うかを考えさせることで、指針を見付けさせる。

(3) 発問計画表

場面	登場人物の心の動き	道徳的価値 中心価値 他価値	発問の意図と発問 発問計画
① 幼少の頃から、個性的で大胆な作品を作り、いつも周囲を驚かせていた。	・自分には、才能があるぞ。 ・自分は、みんなから認められているんだ。	個性伸長 努力	【特に心が動くであろう場面】 → ③ ⑤ ⑦ ↓
② 西望と仲間2人はそろって作品展で入選したが、仲間2人は、3等賞までに入り、世間の注目を浴びた。	・2人は、輝いているな。 ・何で、自分だけ入選しないのか…。	友情 努力	【発問の意図】 若いころ二人のライバルを目標に、粘り強く努力したときの気持ちを考えさせる。
③ 西望の努力は、なかなか報われず、夜も眠れず、布団をかぶって泣いた。	・どうして、私の作品は評価されないんだ。 ・くやしい。 ・どうすればいい？	努力	【発問】 「そういえばわたしも・・・」と振り返ったときの西望はどんな気持ちだったでしょう。
④ 西望は、8回目の作品展に出品し、息詰まる思いで結果を待っている。	・これでだめなら、もうやめよう。 ・今度こそは、納得できる結果を出したい。	努力	↓
⑤ 2等賞に入選し、西望は新聞記者に取り囲まれた。	・うれしいな。 ・これまでの努力が報われた。 ・あきらめないでよかった。	努力	【発問計画】 ●児童の反応 → 切り返しの発問
⑥ 西望は、日本彫刻の第一人者として、後輩の育成の傍ら、平和祈念像の制作を決意した。	・全世界の人々の平和を願う気持ちを込めた、シンボルとなるような力強い記念像にする。	努力 勤労 国際理解	●自分もこのカタツムリのように一歩一歩努力してきた。 → 西望は、これまでどのように努力してきたのでしょうか。
⑦ 制作中に、カタツムリを見つけ、今までの自分の歩みとカタツムリを重ね合わせて、一句書き留めた。	・みんなの役に立ちたい。 ・いつもその人のことを思って仕事をしよう。	努力 勤労 自然愛	●あの二人のライバルを目標に、諦めないで努力してきたよかった。 → 西望は、どのようなことがよかったと思ったのでしょうか。

(4) 本時

ア ねらい

彫刻家としてなかなか自分の作品が評価されず挫折することがあった中、諦めず努力し続けて、彫刻界の第一人者となった北村西望の気持ちを考えることを通して、より高い目標を立て、困難にくじけず粘り強く一步一步努力しようとする心情を育てる。

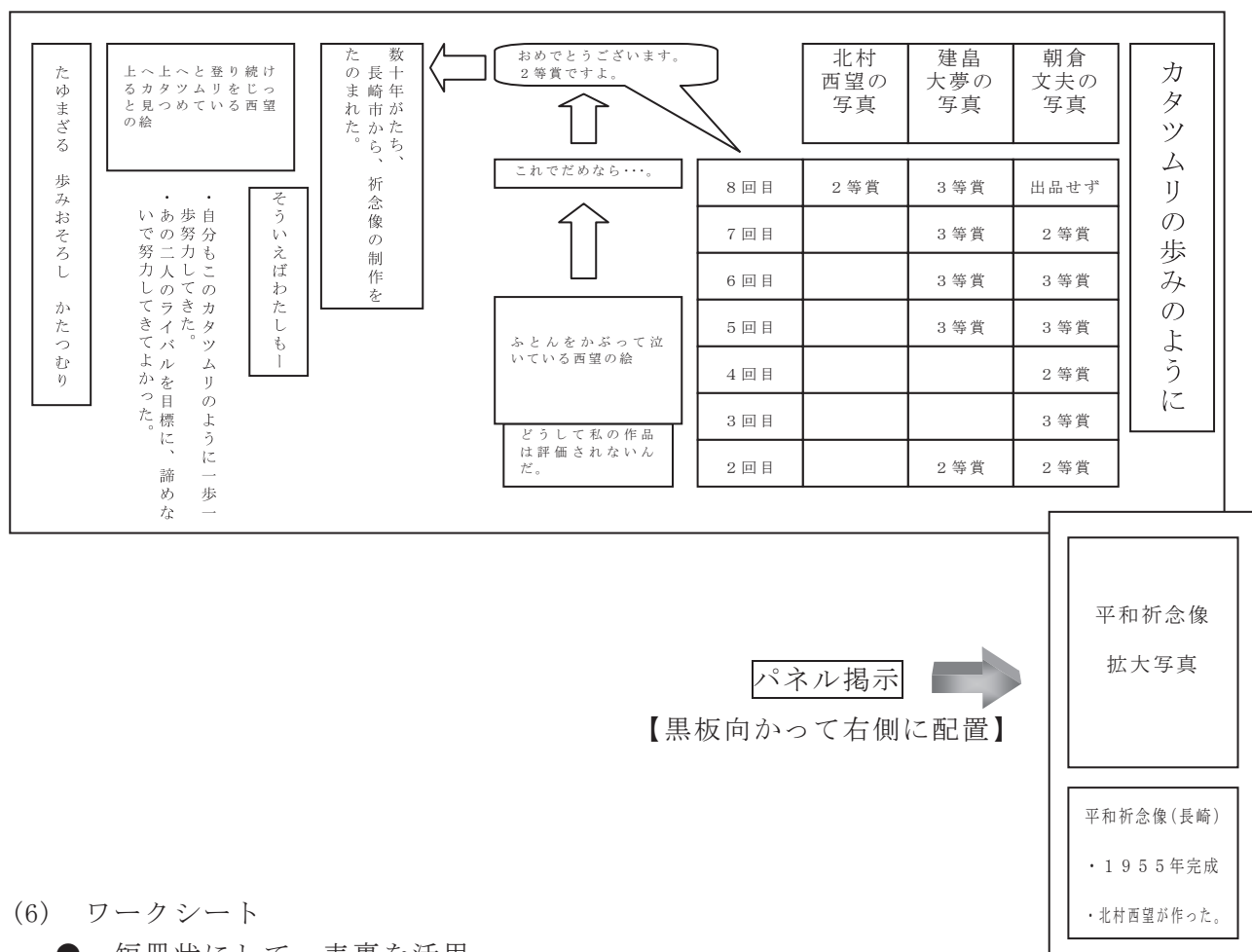
イ 展開

	○発問 ◎中心発問・予想される児童の反応	◆指導上の留意点
導入	1 北村西望と平和祈念像について知り、資料に関心をもつ。 ○この像を作った人を紹介します。	◆北村西望を紹介するとともに「平和祈念像」の拡大写真を見せ、資料への興味・関心を高める。
展開	2 資料「カタツムリの歩みのように」を読んで話し合う。 ◎「そういえばわたしも・・・」と振り返ったときの西望はどんな気持ちだったでしょう。 ・自分もこのカタツムリのように一步一步努力してきた。 ・あの二人のライバルを目標に、諦めないで努力してきてよかった。 3 自分の生活を振り返る。 ○西望の生き方の何があなたのこれからの生活を支えていくと思いますか。一言でまとめましょう。 ・あきらめないこと。 ・努力すること。 ・一つ一つきちんと行うこと。 ・継続して行うこと。	◆物語の世界に十分浸らせることができるように、場面絵などを活用し、声の調子や抑揚に配慮して範読する。 ◆西望の挫折からあきらめずに努力し続け、彫刻界の第一人者になっていく過程を、補足資料や板書で示す。 ◆若いころ二人のライバルを目標に、粘り強く努力したときの気持ちを考えさせるためにワークシートを活用する。 ◆自己を見つめさせるため、ワークシートの裏面（短冊）を活用する。 ◆西望の生き方から感じたこと、考えたことを短い言葉でまとめさせる。 ◆意見を全体で共有できるように、全員分の短冊をホワイトボードに貼る。
終末	4 教師の説話を聞く。	◆書道の作品作りで、何度も練習を重ね、諦めずに取り組み、展覧会で大きな賞をいただいた経験を話し、たゆまず努力する意識の継続化を促す。

ウ 評価

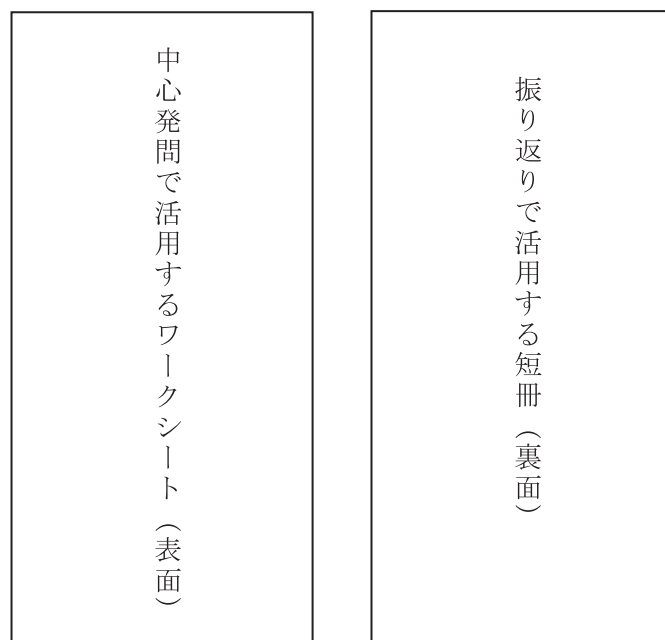
西望の生き方に共感し、高い目標を立て、諦めないで粘り強く続けようとする気持ちをもつことができたか。（発言、ワークシート）

(5) 板書計画



(6) ワークシート

- 短冊状にして、表裏を活用。



(7) 考察

- 「効果的な資料活用についての視点①～③に関するもの」と「視点以外に関するもの④」に分類して考察した。

① 効果的な資料活用のための資料分析の工夫に関するもの

- ・ 資料分析をしたことで、資料提示では、資料の理解を促すために場面絵などを用いて、児童の反応を確認しながら行うことができた。また、2等賞や3等賞といった作品展の結果が書かれている表を提示したことで、児童は資料の内容について、さらに興味・関心を持続しながら理解することができた。



② 資料分析に基づいた発問計画の工夫に関するもの

- ・ 中心発問に至るまでに、いかに資料の内容を児童の心に響かせることができるかが肝心である。資料を提示した時や資料提示後に、補足説明をしながら内容を理解させることが、発問を一つにした指導過程では特に大切である。その際、「心が動くであろう場面」を発問計画に示していたことが有効だった。「心が動くであろう場面」を把握していたことで、その場面を中心に児童に考えさせたり、補足説明したりすることができた。

③ 展開後段で自己を振り返る場面の工夫に関するもの

- ・ 展開後段では、「西望の生き方の何があなたのこれからの生活を支えていくと思いますか。」という発問に対して、これからの自分の生活の指針となるような意見を短い言葉で表現させた。児童からは、「頑張ろう」、「あきらめない」などの様々な言葉が出た。また、これらの言葉を活用して、目標に向かってコツコツと努力する大切さを学んだと考える。



④ 視点以外に関するもの

- ・ 導入で平和祈念像の大きな写真を提示したことで、資料への関心を高める導入ができた。
- ・ 先人の生き方について、多くのことを教師が知っておくことは大切なことである。資料の研究として、取り上げる先人の業績などを詳しく調べたり資料館を訪ねたりすることは、自信をもって授業に臨むための一助となると考える。
- ・ 教室の後ろのスペースを終末で使い、西望の生き方から学んだことを掲示し、児童に見られるようにした。座席の前後転換をして授業に変化をもたせたことは、児童の授業への集中を高めることができた。
- ・ 終末では、教師の体験談（書道で県知事賞を受賞）を通して、児童は「教師の地道な努力」を知ることができ、「自分も目標をもって地道に努力すれば、夢がかなえられる」という価値への関心の継続化を図ることができたのではないかと考える。

IV 成果と課題

1 研究の成果

(1) 伝記を資料として扱うことについて

道徳の時間を通して、先人の生き方と道徳的価値について触れた児童は、自分の生活と照らし合わせながら振り返ったり、これからの自分の生活を進んで考えたりしていた。このことは、夢や希望を抱くことの大切さを感じ、自己の生き方について深く見つめる契機となった。人の生き方を扱った「伝記読み物資料」のよさを確認することができた。

(2) 視点①「効果的な資料活用のための資料分析の工夫」に関するもの

ア 綿密な資料分析

ねらいに基づく資料分析を綿密にしたことで、教師の資料への理解が深まった。さらに、本時で中心的に取り上げたい「心に響く」場面が明確になり、発問計画表の考案につながった。

イ 資料提示

事前の綿密な資料分析により、資料の内容や特徴を把握した。このことを生かして資料提示を行った。その際、資料の内容が児童の心に響くように、ゆっくりと時間をかけて丁寧提示したり、場面絵やBGMなどを活用したりした。これらのことにより、場面状況や主人公の心情が臨場感をもって児童が捉えられるよう、資料提示をすることができた。

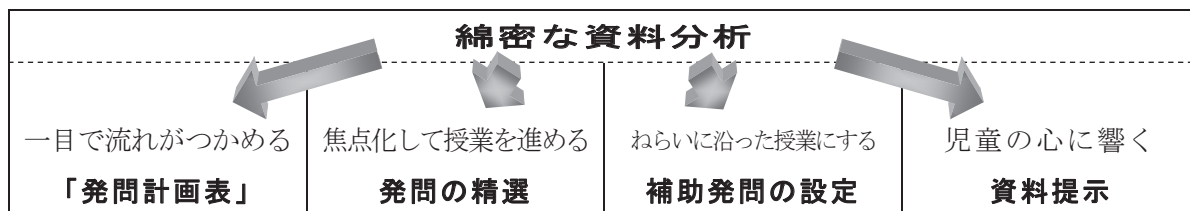
(3) 視点②「資料分析に基づいた発問計画の工夫」に関するもの

ア 「発問計画表」の作成

「発問計画表」には、資料分析と共に、発問とその意図、及び補助発問をA4用紙1枚にまとめたことで、指導する教師が一目で授業全体の流れをつかむことができた。

イ 発問の精選と補助発問の設定

資料分析をしたことによって、発問についても精選することができた。本研究では、伝記の登場人物の生き方について全体的に問う発問を一つ又は二つにしたことで、児童に最も考えさせたい内容を焦点化して授業を進めることができた。また、あらかじめ補助発問も作成したことで、教師が、ねらいに沿った授業を落ち着いて展開することができた。



(4) 視点③「展開後段で自己を振り返る場面の工夫」に関するもの

ア 自己の生き方についての考えを深めるような発問

展開後段では、人の生き方を扱った「伝記読み物資料」の特色を生かし、研究主題である「自己の生き方についての考えを深める道徳授業」を創造することができるよう、発問の内容や言葉を工夫した。このことで、児童は自分を見つめながらより一層前向きな気持ちを抱いていたことが、発言やワークシートから見取ることができた。

イ 書く活動

自分を振り返る場面では、書く活動を取り入れた。その際、児童の発達段階や発問の内容に応じてワークシートの形式や書く分量を工夫したことによって、より一層、児童が自分を見つめて、自己の内面と深く対話をする契機となった。

2 今後の課題

(1) 発問について

発問の数を精選することはできたが、数が少ないので、より深く自己の生き方を振り返られるような発問の文言を含め、さらに吟味していく必要がある。

(2) 時間配分について

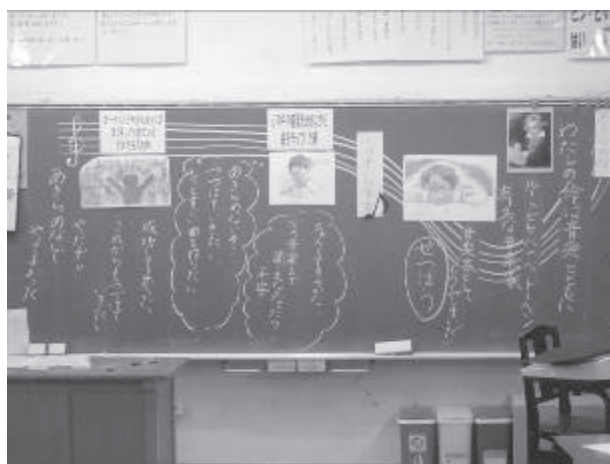
伝記を扱った資料は内容が豊富なので、資料提示に多くの時間がかかり、話合いが深まらない場合もあるので、複数の時間で扱うことも考慮する。

(3) 自作による伝記資料の作成

児童が夢や希望を抱き、自己の考えを深める道德の時間を創造していくためには、教師自身が感銘を受けた人物について、読み物として資料化していくことが大切である。



「第九を指揮しているベートーベンになりきって、資料提示をした。」



「『わたしの命は音楽とともに』
板書の実際」



「終末では、教師の体験談
(書道で県知事賞を受賞)を語った。」



「『カタツムリの歩みのように』
板書の実際」

＜小学校外国語活動研究開発委員会＞

研究主題・副主題

「外国語活動におけるコミュニケーション能力の素地を養うための指導の在り方」

～A L Tの有効活用による指導の改善・充実～

研究の概要

平成 23 年度から、小学校において本格実施されている外国語活動は、異文化への体験的理解、コミュニケーションへの積極的な態度の育成、外国語への慣れ親しみを通して「コミュニケーション能力の素地を養う」ことを目標にしている。そして、児童の実態を把握している学級担任等による指導計画の作成や授業の実施が求められている。また、児童の外国語への興味・関心やコミュニケーションへの意欲を高めるために、ネイティブ・スピーカーや外国語に堪能な地域の人々（以下 A L T [Assistant Language Teacher] という）を活用し、指導体制の充実を図ることも必要とされている。

文部科学省では、平成 22・23 年度は「英語ノート 1・2」を、平成 24 年度は“Hi, friends! 1・2”を希望する全ての小学校第 5・6 学年の児童に配付し、外国語活動の質的水準の確保を図っている。しかし、指導体制の充実に向けた取組は、各地区教育委員会の裁量に任されている。特に、A L Tをどのように配置するかについては、35 時間全て配置という地区もあれば、10 時間程度という地区もある。また、ネイティブ・スピーカーではなく、外国語に堪能な日本人を A L Tとして配置する地区もあるなど、地区間で違いがあるのが現状である。

外国語活動の授業において児童が A L Tと関わることは、小学校外国語活動の目標である「外国語への慣れ親しみや異文化理解、積極的なコミュニケーションへの態度の育成」に大きく関係があり、国際理解教育の推進においても重要である。本委員会では、外国語活動の授業において、特に A L Tをどのように活用すべきかについて研究・開発を行った。同時に、A L Tの活用方法を明確にするため、開発委員が、英語が堪能な日本人指導者（以下、日本人指導者）とチームティーチングで検証授業を行い、A L Tとチームティーチングを行う授業との比較検証も行った。

本報告書を通して、小学校教員が A L Tを活用して児童のコミュニケーション能力の素地の育成に生かすことを期待する。

I 研究の目的

小学校学習指導要領解説外国語活動編には A L Tの活用について、「第 2 章 第 1 節 3 指導計画の作成と内容の取扱い」において以下のように記されている。

第 3 指導計画の作成と内容の取扱い

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(5) 指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施に当たっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること。

外国語活動では、児童自らが外国語を使って「言いたい。」「聞きたい。」と思うような必然性のある活

動を、教師が意図的・計画的に設定することが大切である。小学校学習指導要領にも記されているとおり、児童の外国語への興味・関心を高め、外国語への慣れ親しみ、異文化理解を図るために、活動の中で児童がALTと関わる場面を設定し、授業における指導体制を充実させることが必要である。

そこで本委員会では、ALTを有効活用しつつ、児童の外国語活動への興味関心を高め、単元ごとの英語表現に慣れ親しませるためには、各単元の第1時が重要であると考えた。各単元の第1時は、新しい英語表現に初めて出会う時間である。英語表現をどのようにインプットしていくか、ALTにどのような役割を担わせるかについて、約9割の学校で活用している“Hi, friends!1・2”の各単元の内容と照らし合わせて、研究を進めた。

Ⅱ 研究の方法

1 外国語活動の指導形態と使用教材

外国語活動が高学年において全面実施となり、3年目を迎える。これまでの実践を生かして、指導形態に幅をもたせ、各教育委員会で作成した教材を活用する地区も少なくない。

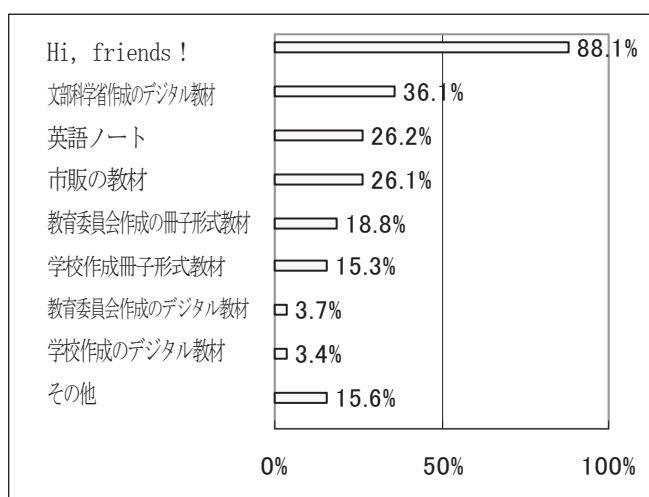
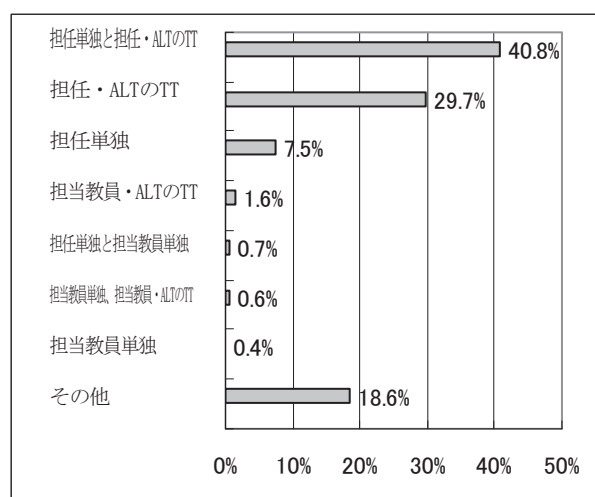
資料1「平成24年度小学校外国語活動に関する調査結果（平成24年度8月実施）」より、外国語活動の指導者は、学級担任単独と担任・ALTのTTが40.8%、担任・ALTのTTが29.7%と、約70%が学級担任とALTによるティームティーチングで実施していることが分かった。「資料2 外国語活動の状況 指導形態（平成24年度）」より、外国語活動における主な使用教材をみても、複数回答の調査ではあるが、“Hi, friends!”を活用している割合は、88.1%と高く、各教育委員会で作成した教材を活用している割合も18.8%と8項目の回答の中で、5番目に挙げられている。

これらの指導形態や教材を使った授業展開が、現在の外国語活動の実態である。

そこで、本研究では、学級担任とALTや外国語の堪能な地域の人々によるティームティーチング形式の活動と“Hi, friends!”や各教育委員会で作成した教材を中心として研究を進めた。

資料1 平成24年度小学校外国語活動に関する調査結果（平成24年度8月実施）より作成

資料2 外国語活動の状況 指導形態（平成24年度実施）より作成



2 検証授業

検証授業では、コミュニケーション能力の素地を養うため、以下の点に焦点を当てて指導案を作成した。

(1) A L Tの児童への関わり方の工夫

児童にとって、A L Tとの関わりは、言語が異なる相手とコミュニケーションを図る大事な場面である。A L Tに話せること、答えてもらえること、褒めてもらえることなど、いずれの関わりもコミュニケーション能力の素地を養う意欲へつながるものである。この意欲が、外国語への慣れ親しみ、言語や文化に関する気付きへつながる。

(2) A L Tと学級担任の役割分担

活動形態や使用教材の実態を考慮して、どの指導案にもA L Tと学級担任の役割分担を記した。役割を示すことで、学級担任とA L Tの互いの動きが明確になるメリットがある。ただ、学級担任は活動をうまく展開するためのマネジメントに徹しているだけではない。児童の自己評価カードや授業観察の記録から、学級や児童の実態を知り、本時の目標にどのような方法でせまっていくかを探る役割も担っている。活動全体のマネジメントは学級担任の役割である。

(3) 正しい外国語の音声を聞かせる工夫

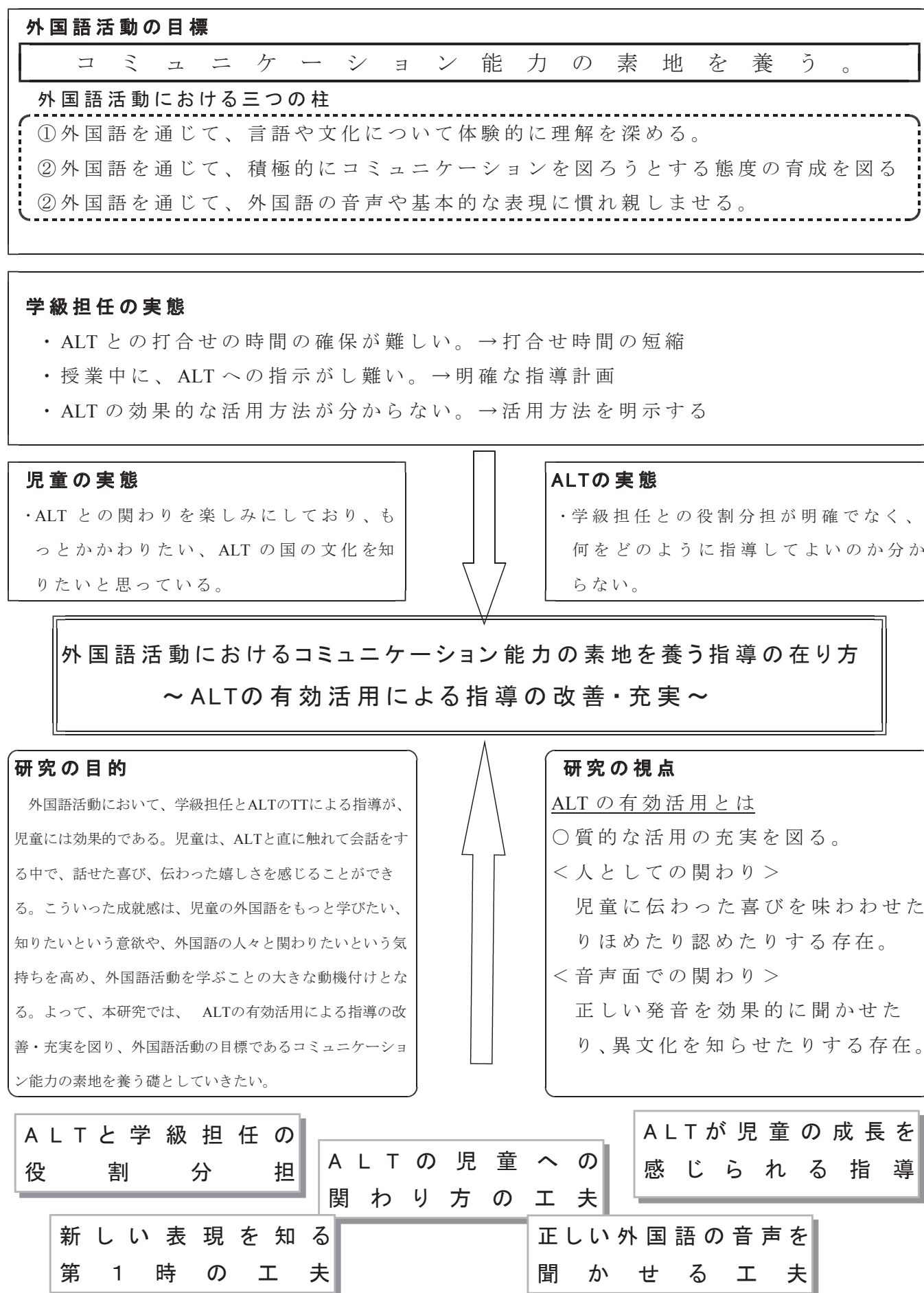
A L Tと直接話すこと、A L Tの話を推測すること、A L Tの発音を真似ることなど、毎時間の活動のどの部分でA L Tと児童に関わらせるかを、担任が明確にすることで、さらに本時のねらいに迫り、コミュニケーション能力の素地を養う意欲の継続や向上を図る。

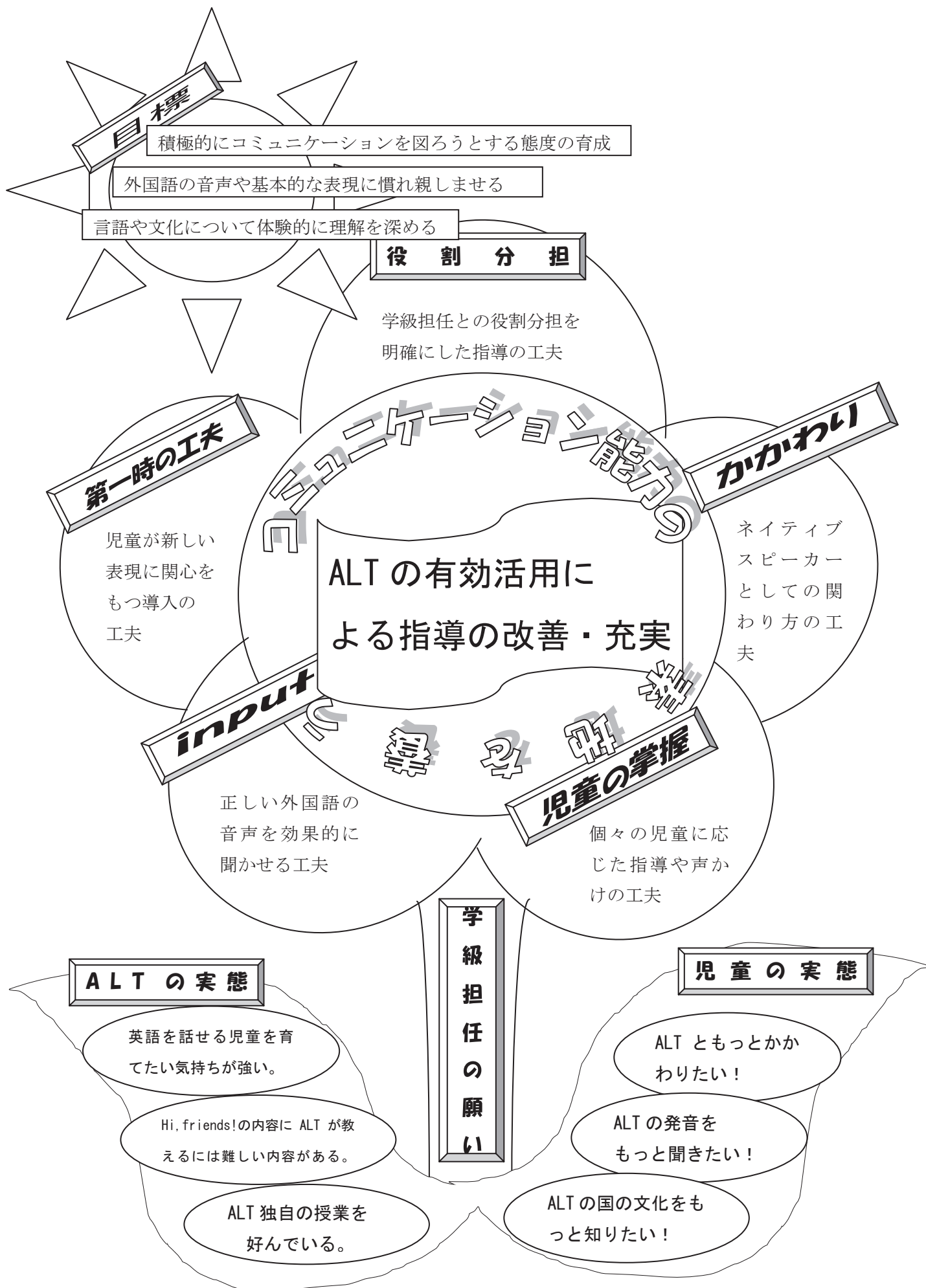
(4) 新しい表現を知る第1時の工夫

各単元の教材や素材との出会いである第1時への児童の関心は高い。この第1時での導入が、外国語を使ってみたい、もっと知りたい、言語や文化を比べてみたいなど、次時への意欲付けになっていく。外国語を聞かせる、活動を推測させる、音や言語・文化の違いに気付かせるなど、意欲を継続し高めていくために、単元のねらいに沿った導入の工夫を図る。

(5) A L Tが児童の成長を感じられる指導

学級担任は、評価をするので児童の記録を重ねている。そのため、児童の実態を把握した上で、ポイントをおさえた支援や賞賛ができる。また、A L Tに褒められることは、自分の言葉が相手に通じたという実感がもてるので、児童の意欲向上に特に大きな影響を与えるものである。そこで、打ち合わせの際に、学級担任とA L Tが支援や賞賛のポイントを確認できれば、毎時間において児童の変容を見取りながら指導できる。





Ⅲ 研究の内容

検証授業①

第1学年において、次に示す検証授業を行った。

1 単元名 「これは何色？」

2 単元の目標

- 色の言い方に慣れ親しむ。
- 色の言い方を使ったやりとりを楽しむ。

3 単元の内容

(1) 主としてコミュニケーションに関する事項

- ア 簡単なゲームを通して、丁寧な表現でコミュニケーションを図ること。
- イ 簡単なゲームを通して英語を使い、自分が欲しいものを伝えること。
- ウ 簡単なゲームを通して英語を使い、相手が欲しいものに答えられること。

(2) 主として外国語の音声や基本的な表現の慣れ親しみに関する事項

- ア ゲームを通して、欲しい色の伝え方や丁寧な表現に慣れ親しむこと。
- イ 絵本の読み聞かせを通して、色の言い方について音が異なることを知ること。

(3) 表現や語彙

What color is this? / Red.

red / blue / yellow / green / white / purple / brown / black

4 評価規準

ア コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	イ 外国語への慣れ親しみ	ウ 言語や文化に関する気付き
・色の言い方を使ったやりとりを楽しんでいる。 ・自分が欲しいものを丁寧に伝えたり、相手が欲しいものに答えたりしようとしている。	・色の言い方を聞いたり言ったりしている。 ・色の言い方を聞いたり言ったりして、慣れ親しんでいる。	・日本での色の言い方と外国語での言い方が異なることを知って、発音やリズムに気を付けている。

5 研究主題との関連

(1) 正しい外国語の音声を聞かせる工夫

ア A L Tによる読み聞かせの場面

本単元では、児童にとって聞きなれた色を表す言葉を活用している。

しかし、日常生活で使っている言葉は、英語の音やアクセントとは明らかに異なることが分かる。

本時では、児童はA L Tが発音する色の言い方をよく聞いて、その違いに関心をもつこと。英語によ

る言い方をインプットするだけでなく、アウトプットする際には、英語の音やアクセントの違いを楽しんで表現することをねらいとして、ALTの効果的な活用場面を、絵本の読み聞かせにおいて設定した。また、児童が英語の音やアクセントの違いを意識して、色を表す言葉を発音した時に、ALTが賞賛の言葉をかけ、絵本の次のページに進んでいくことをALTと事前に打ち合わせておいた。

(2) 新しい表現を知る第1時の工夫

ア 聞こえた言葉を発表するとう目的をもたせ、聞くことの意識を高める。

CDを聞いた後に聞こえた言葉を発表することを伝え、児童の「聞くこと」への意識を高める。次に、「知っている言葉が出てくるかな。」と付け足すことで、さらに好奇心を高めさせる。それらの働きかけを行った上、CDを聞かせることで、よく知った言葉が聞こえ、安心感をもって取り組めると考える。この安心感が本時の基盤となり、色を表す英語の音やアクセントの違いを聞き分け、自信をもって発音することが期待できる。

(3) ALTと学級担任の役割分担

ア 指導案上にそれぞれの役割を位置付ける。

外国語の音声を聞かせたり音の違いに気付かせたりする場面は、ALTが主に担当する。ALTが、発音の良い児童や発言を試みた児童を褒めることを通して、児童の意欲を高めていく。学級担任は児童を観察したり、評価したり、支援したりする。学級の実態を把握しつつ、前時の自己評価カードなどから読み取れた自信がもてない児童や発言を試みていない児童へ声をかけながら、活動への達成感を味わわせる。ALTと学級担任の両方で、児童の発話を褒めたりゲームの見本を見せたりする。

(4) 外国語活動との関連性

外国語活動が高学年において完全実施となる以前から、各地区によっては小中一貫教育に取り組んできている。そのため、低学年においても外国語活動の機会を設けている地区がある。検証授業1の地区においては、繰り返し（スパイラル）を重視することで、1年から6年までの長いスパンで「外国語に親しませる」ことを目指している。この繰り返しの重視は、扱う教材だけではなく活動における成功体験（褒められること）を繰り返し味わうことで、自他を肯定的に捉える環境を育んでいる。

本時の「色」は、“Hi, friends! 1” Lesson5 I like apples. 好きなものを伝えよう、の中で取り扱われている。ここでは、リスニングによりTシャツを見付ける手だてとして、色が用いられている。色については、正しい外国語の音声を聞かせる工夫（研究主題との関連）において、日常生活で使っている言葉の一つでもある。低学年から外国語活動を取り入れている環境であれば、簡単なクイズや物語の読み聞かせなど、各学年で繰り返し扱われる素材であり、児童は抵抗感なく取り組める。

また、日常生活で使い抵抗感なく取り組める外国語だからこそ、音声に注目してカタカナ的な発音のイエローと英語によるYellowのような音の異なりを楽しませたい。この音の異なりを味わう活動は、コミュニケーションの素地に大きく関わるものである。なぜなら、異なったものを楽しむためには、異なりに気付かなければならないためである。こうした「異なり」に気付くことに低学年のうちから慣れておけば、言語だけでなく文化の違いへの気付きにもつながる。そして、異なりは私たちの身近な場面にもある。まず、隣に座る友達、隣の学級の担任、地域の方々など、こうした人々とともに生活していくために、コミュニケーションの素地を養っていく必要がある。低学年における外国語活動は、コミュニケーションの素地の環境づくりを担っていると考えられる。

6 単元の指導計画（2時間扱い）

	学習内容・学習活動	評価規準（評価方法）	態	慣	気
1	・色の言い方を聞いたり言ったりする。 ①CD ♪Colors を聞きながら、色カードをさす。 ②絵本 “Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?” を聞く。 ③出てきた色を発表する。 ・色の言い方を使ったやりとりを楽しむ。 ④カラータッチゲームをする	・色の言い方を聞いたり言ったりしている。 ・色の言い方を使ったやりとりを楽しんでいる。 （行動観察・振り返りカード）	○	◎	○
2	・色の言い方を聞いたり言ったりして、慣れ親しむ。 ①CD ♪Colors を聞きながら、色カードを提示する。 ②絵本 “Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?” を聞いて、色や繰り返し出てくるフレーズを言う。 ③出てきた動物を発表する。 ・色の言い方を使ったゲームをする。 ・丁寧な表現で、自分が欲しい色を伝える。 ・友達が欲しい色に応える。	・色の言い方を聞いたり言ったりして、慣れ親しんでいる。 ・自分が欲しいものを丁寧に伝えたり、相手が欲しいものに応えたりしようとしている。 （行動観察・振り返りカード）	◎	○	

7 本時の学習

(1) 本時の目標

ア 色の言い方を聞いたり言ったりして、慣れ親しんでいる。

イ 色の言い方を使ったやりとりを楽しむ。

(2) 本時の展開 ＜活動形態 A L Tと学級担任によるチームティーチング＞

過程 (分)	児童の活動	指導者の活動		●指導上の留意点 ・教材 ◎評価
		学級担任	A L T	
導入 (4)	1. 挨拶をする。 2. ♪Hello ♪	・児童と一緒に気持ちよく挨拶をし、雰囲気をつくる。		・CD NEW “Let’ s sing together”
展開 (5)	3. ♪Colors ♪ ①CD を聞く。 ②聞こえた言葉を発表する。 イエロー！ ③歌える部分を一緒に歌う。	新しい表現を知る第1時の工夫 ・CD を聞いた後、聞こえた言葉を発表することを伝える。 ・前時の自己評価カードなどから見取った自信がも ・児童が発表した言葉のモデルを言う。 ・A L Tの主体性を生かして、活動を進行して		・CD NEW “Let’ s sing together” ・色カード(提示用) Red / Blue / Yellow / Green / White / Purple / Brown / Black Yellow.

(20)	正しい外国語の音声を聞かせる工夫 4. 絵本 “Brown Bear Brown Bear, What Do You See?” を聞く。 ①どんな色が出てきたか発表する。 しろ ②言えるところを一緒に声に出しながら読み聞かせに参加する。	てない児童や発言を試みていない児童に発言を促す。 That's right! 白ですね。 It's White. ・繰り返し出てくるフレーズなど、読み聞かせに参加させる。 ・児童や発言を試みていない児童に発言を促す。	いく。 ・児童の反応に合わせて、絵本を読む。 ・どんな色が出てきたか尋ねる。 ・発音やリズムを意識した色の言い方をした時に、次のページに進む。	・絵本 ○児童が日本語で色を言ったときは、否定せずに正しい英語を示す。 What color is this? It's White. ☆色の言い方を聞いたり言ったりして、慣れ親しんでいる。 ☆色の言い方について、発音やリズムに気を付けている。
	A L Tと学級担任の役割分担			
展開 (10)	5. カラータッチゲームに慣れる ・A L TやH R Tの指定する色を探してタッチする。 カラータッチゲームをする。 ①やり方を知る。 ②グループごとに取り組む。 ③慣れてきたら、A L Tや学級担任が、児童のうちから数人を指名して、指定する色を探してタッチする。	・ゲームのモデルをみせる。 ゲームのやり方 代表児童6人が前に出て、ALT に背をむけて立つ。 ALT: What color is this? (色カードを示す) HRT と残りの児童: Red ! 指名された児童: Touch something red ! (指定された色のものをさわる) ALT: Very good ! ・本時の活動で、指名されていない児童を代表に選ぶようにする。		・色カード ○やり方が分かるように、色カードと実物を合わせて示す。 ☆色を使ったやりとりを楽しんでいる。

まとめ (6)	6. ♪Good Bye Song♪ 7. 挨拶をする。 8. 簡単な振り返りカードを書く。 (時間がなければ、活動終了後でもよい)	・児童と一緒に歌う。 ・児童と一緒に挨拶をする。 ・振り返りカードを配る。	・児童と一緒に歌う。 ・児童と一緒に挨拶をする。	・CD NEW “Let’ s sing together” ・振り返りカード
------------	---	---	---------------------------------	--

8 資料

- (1) 使用教材 絵本 “Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?” 作 エリック・カール
 ・CD NEW “Let’ s sing together” (著作) 阿部・フォード 恵子
- (2) 振り返りカード

ふいかえりカード なまえ ()

あてはまるものを、○で かこみましょう。

1. えいごを きいたり いったり した。



よくした



もうすこし

2. ともだちや せんせいと えいごを たのしめましたか。



とてもよくたのしめた



たのしめた



もうすこし

3. えいごを つかって いろの なまえを いったときに
 きづいたこと、わかったこと、おもったこと をかいて ください。

検証授業②

1 単元名 Hi, friends! 2 Lesson 5 Let's go to Italy. 「友だちを旅行にさそおう」

2 単元の目標

- 友達の行ってみたい国について積極的に尋ねたり、自分の行ってみたい国や理由について答えたりしようとする。 【積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度】
- 行きたい国について尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。 【音声や基本的な表現への慣れ親しみ】
- 世界にはいろいろな国があり、様々な文化があることに気付く。 【言語や文化についての体験的な理解】

3 単元の内容

(1) 主としてコミュニケーションに関する事項

- ア 積極的に自分の行ってみたい国や、その理由を尋ねたり、答えたりすること。
- イ 自分の思いがはっきり伝わるように、尋ねたり答えたりし、友達との交流を楽しむこと。

(2) 主として言語や文化に関する事項

- ア 行ってみたい国やその理由を話す活動を通して、英語表現の音声やリズムに慣れ親しむこと。
- イ 行ってみたい国やその理由を話し合う活動を通して文化に対する理解を深めること。

(3) 表現や語彙

- 表現 Where do you want to go~? /I want to go to ~./ Le's go ~.
- 語彙 世界の国名：America, India, France, Japan, China, Australia, Egypt, Brazil, Greece, Spain, Italy
国の有名なものや場所：the Statue of Liberty, the Major League, the Grand Canyon, the Taj Mahal, elephant, curry, Mont Saint Michel, escargots, the Eiffel Tower, the Arch of triumph, Kiyomizu Temple, Mt. Fuji, the Great Wall, panda, gyoza, Ayers Rock, koala, kangaroo, the Sydney Opera House, the Sphinx, the Pyramids, camel, Iguazu National Park, the Parthenon, flamenco, Sagrada Familia, the Leaning Tower of Pisa 等

4 評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語への慣れ親しみ	ウ 言語や文化に関する気付き
・自分の行ってみたい国について、自分の思いが伝わるように、言おうとしている。 ・友達の発表を積極的に聞こうとする。	・自分の行ってみたい国について尋ねたり答えたりしている。 ・友達の行ってみたい国について聞いている。	・世界にはいろいろな国があり、様々な文化があることに気付いている。

5 研究主題との関連

(1) 日本人指導者と学級担任の役割分担・正しい外国語の音声を聞かせる工夫

ア 指導案に明示

日本人指導者と学級担任の役割分担をはっきりさせるために、指導案の本時の展開において、“日本人指導者の活動”、“学級担任の活動”の欄を設けた。こうすることによって、あいまいな部分をなくし、それぞれが各々の役割を意識して活動にのぞめるようにした。

イ 日本人指導者が発話する機会を多くもつ

第1時において“国旗クイズ”5問を行う際には、第1、3問目は学級担任が出題し、第2、4、5問目は、日本人指導者が出題するようにした。第1問目を学級担任が担当し、児童と日本人指導者に、クイズの出し方を示す。児童が英語のみでクイズの方法を理解することが難しい場合は、その場でしっかり補足することができ、児童に安心感をもって活動に取り組める環境を与えることができる。こういう場の設定によって児童は、国旗クイズの本来の目的である“聞く”活動により集中することができるのではないかと考えた。

第1時の“行きたい国クイズ”では、Where do you want to go?という問いかけの表現を学級担任と児童が一緒に発話し、答えの表現を日本人指導者が担当することにした。こうすることによって、児童は、本単元の最終の活動に生きる表現をたくさん耳

にする機会をもつことができ、第2時以降の活動にスムーズに入ることができる。

(2) 新しい表現を知る第一時の工夫

ア 日本人指導者と学級担任によるデモンストレーションで単元に興味をもたせる

第1時は、児童が初めて新しい表現に触れる大切な時間である。児童の興味・関心をかき立てるため、本単元では日本人指導者と学級担任によるデモンストレーションを取り入れた。デモンストレーションは、児童の興味・関心を喚起させるとともに、新しい表現の正しい発音を聞かせる機会にもなる。

イ 児童が聞き慣れた言葉を取り入れる

第1時のデモンストレーションでは、児童が聞き慣れた言葉を取り入れる。新しい表現であるので、どんな内容を言っているのか全てを明確に分からなくとも、『なんだか楽しいことをやりそうだな、知っている言葉があるな』と、児童が無理なく聞くことができる内容を構成していく。

ウ 繰り返しの効果

デモンストレーションの際には、一方が発話した言葉をもう一方が繰り返して発話するようにし、キーワードとなる言葉は、繰り返して聞かせるよう工夫した。

エ 視覚に訴えかけるデモンストレーション

児童が内容を視覚的に捉えやすいように、2回目は、カードやジェスチャーを交え、デモンストレーションを行うようにする。今回初めて出てくる“to see”では、双眼鏡のポーズをとったり、“to eat”では、食べるまねをしたりと、英語は聞き取れなくてもこんな内容のことを言っているのではないかと想像できるよう、大きく分かりやすいジェスチャーを心がける。ここで扱ったジェスチャーは、第2時以降、児童が自ら発話をしていく際にも意識的に取り入れ、言葉の意味を考えながら発話する一助としていく。

(3) 日本人指導者の児童への関わり方の工夫・日本人指導者が児童の成長を感じられる指導

ア 日本人指導者の支援を明確に

児童が活動をする際、日本人指導者がどの場所でどんな支援をすればよいか事前に打合せをしておく。全体指導において、一方が黒板の前で指示等を出す際は、一方は、児童の側につき、発話を促すようにする。第3時のチャンツをつくる等のグループ活動になる場合には、担当するグループを決めておく。発表の時間までそのグループを担当し、該当グループの児童の変容を見取ることができるようにする。第4時の空港ゲーム等、個人の活動になる場合は、それぞれが見る範囲を決めておくとともに、困った児童がいた場合、すぐに寄り添うことができる場所に立つようにしておく。

イ ねらいを意識した評価を

毎時間、授業の最後には、日本人指導者が児童へ英語でコメントを言う時間を設ける。日本人指導者には、「声が大きかった」や、「よくがんばったね」といったようなコメントだけではなく、例えば、本時においては、「国旗クイズでよく聞きながらこの国が当てようとしていましたね。」「世界の様々な国に興味をもってよく聞いていましたね。」等ねらいに沿ったコメントをしてもらうようにする。こうすることによって、日本人指導者にも、毎時間のねらいを意識し授業に臨んでもらうとともに、児童にとっても、毎時間のねらいを意識した振り返りの時間となるようにし、次時へつなげていく。

(4) 日常の取組の積み重ねにより児童の活動時間を確保し、ねらいに迫る

ア 活動隊形の工夫

活動の際には、児童は椅子に座り半円になり、机は使わない。互いの顔がよく見え、素早く様々な活動隊形になれる。

イ 効果的に音楽を利用する

児童が、活動を終える時や振り返りカードを書く際には、いつも決まった音楽を流し、スムーズに次の行動に移れるようにする。

ウ 視覚に訴えかけるチャンツ

チャンツの際には、フレーズごとにカードを用意し、児童が、聞いた言葉を少しずつでも唱えていける環境を整える。こうすることによって区切る場所が分かり、交代で唱える、班ごとで唱える等、バリエーションを替えて行うことができる。

エ 始めや終わりの歌にバリエーションをもたせる

始めの歌では、児童がなりきり自己紹介ができるようにし、友達にかかわる意欲を喚起する。終わりの歌では、児童が身に付けている物の色で、前に出て歌う子を決め、様々な子が中心となって歌やジェスチャーの中心になる機会をつくる。

6 単元の指導計画（４時間扱い）

時	ねらい	学習活動	語彙・表現・留意点	態	慣	気
第一時 本時	◇国名の言い方、各国の有名なものを知ろう。 ◆国名と国旗を一致させる。 <全体>	○国旗クイズをする。 ・国旗の色をヒントに、どの国の国旗かあてる。 H:What country? Three colors, white, red and blue.Six stars. C:It's Australia.	What country? 色の表現 国名 ●既習の国旗をクイズに出し、無理なく聞くことができるようにする。	○		◎
	◆ Where do you want to go?の言い方を知る。 ◆ 国とその国の有名なものを知る。 <全体>	○新しい表現を知る。 ・学級担任と日本人指導者のデモンストレーションを聞き、どんな内容の学習をするのか関心をもつ。 ○行きたい国クイズをする。 ・行きたい国クイズを聞きながら世界の国々の有名なものや場所に関心をもつ。 A:Where do you want to go? H:I want to eat pizza. I want to see the Leaning Tower of Pisa.	Where do you want to go? I want to go~ 国名 各国の有名なもの ●出題されたものから、カードで掲示し、視覚的に捉えやすいようにする。	○		◎
	◆ I want to~ の言い方に慣れる。 <全体>	○チャンツをする。 ・チャンツを聞き、聞こえた言葉を挙げる。 H:What words did you hear? C:Pizza. A:Anything else? C:Soccer. ・一緒に言える言葉をチャンツに合わせて唱える。 Let's go to Italy. Pizza,cheese,soccer. Nice country.Let's go!	Let's go to Italy. Pizza,cheese,soccer. Nice country. Let's go! ●慣れてきたらジェスチャーも取り入れ、体も使って新しい表現に慣れていくようにする。	○	◎	○
第二時	◇行きたい国について尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しもう。 ◆ I want to~ の言い方に慣れる。 <全体>	○チャンツをする。 ・前時で行ったチャンツを違う国バージョンで行う。 Let's go to Australia. Koala,kangaroo,AyersRock. Nice country.Let's go!	Let's go to ~ Nice country. Let's go! ●カードを用いて視覚的に捉えやすいようにする。 ●部分ごとにグループで担当する等、バージョンを変えて繰り返し行う。	○	◎	
	◆ Where do you want to go?の言い方に慣れる。 <グループ>	○ステレオゲームをする。 ①グループごとに前に出て、全員の問いに答える。 全：Where do you want to go ? グ：I want to go ~~~~ （それぞれが違う国を一斉に言う） ②キーパーソンがどこへ行きたいと言っていたかを、グループごとに答える。 ③全員でもう一度、前に出たグル	Where do you want to go? I want to go~ ●自分が行きたい国を発話するようにし、自分の思いをもって言えるようにする。	○	◎	

		ープの児童に Where do you want to go ?と尋ね、一人一人答える。			
	◆ Where do you want to go?I want to see~,I want to eat~ の言い方に慣れる。 ＜グループ＞	○絵カード合わせゲームをする。 ①グループごとに国旗カードと有名な場所・ものカードを裏にして並べる。 ②ペア対抗で絵合わせを行う。 A:Where do you want to go? B:国旗カードをめくりながら I want to go to ~. A:Why? B:有名な場所・ものカードをめくりながら I want to see~~ ③国と有名なもの・場所が一致したら、B チームは両方のカードをもらう。 ④ A チームと B チームが役割を交代しながら、繰り返す。	Where do you want to go? I want to go~ ● ペア対でペアで行い、無理なく発話できるようにしていく。 国カード 1 1ヶ国×2 名所カード 1 1ヶ国×2	○	◎
第三時	◇行きたい国について尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しもう。 ◆ I want to~ の言い方に慣れる。 ＜全体＞	○チャンツをする。 ・前時で行ったチャンツを違う国バージョンで行う。 Let's go to America. Hamburger,the Statue of Liberty, the Major League. Nice country.Let's go!	Let's go to~ 各国の有名なものや場所	○	◎
	◆ 国とその国の有名なものの言い方や I want to~の言い方に慣れる。 ＜グループ＞	○グループになり替えチャンツをつくる。 ①グループの代表が国旗カードを選ぶ。 ②選んだ国に合う有名なもの・場所を考え、画用紙に描く。 ③チャンツの練習をする。 ○各グループごとに替えチャンツを発表する。 Let's go to China. The Great Wall, panda, gyoza. Nice country. Let's go! Let's go to China. I want to see the Gerat Wall. I want to see pandas. I want to eat gyoza. Nice country. Let's go!	Let's go to~ 各国の有名なものや場所 I want to see~ I want to eat~ How about~? ● 有名なものや場所を英語で表現できない場合は、日本語でもよいこととし、I want to ~の表現に慣れさせていくようにする。	◎	
	◆ Where do you want to go?I want to~ の言い方に慣れる。 ＜ペア＞	○ペアマッチングゲームを行う。 ①ペアになり、自分たちの行きたい国、食べたいもの、見たいものを相談して決める。 ②ペア対ペアでマッチングゲームを行う。 ＜マッチングしない場合＞ A:Where do you want to go ? B:I want to go to Italy!	Where do you want to go? I want to go~ I want to see~ I want to eat~ I like~ Why? Me too.	○	◎

		Where do you want to go? A:I want to go to France. AB:Bye! <マッチングする場合> A:Where do you want to go ? B:I want to go to Italy! Where do you want to go? A:I want to go to Italy. 国が一致したので、理由を尋ねる B:Why? A:I want to eat Pizza. Why? B:I want to eat Pizza. 食べ物的一致したので、理由 2 を尋ねる A:Why? B:I like soccer. A:Me too!!!	●国数を限定し、マッチングしやすい環境を整える。			
第四時	◇行きたい国について尋ねたり言ったりする表現を用いて交流しよう。 ◆国とその国の有名なものの言い方に慣れる。 <全体> ◆ Where do you want to go?I want to~ を用いて交流する。 <個人>	○チャンツをする。 ・前回グループでつくったチャンツの中から、よかったものを紹介しながらみんなで唱える。 ○空港ゲームをする。 ①検査官グループ、旅行者グループの半分に分かれる。 ②検査官グループは、1～4列目に分かれて並ぶ。 ③旅行者が、スタンプをもらいに行く。 <u>1列目</u> 検:Where do you want to go? 旅:I want to go to Italy. 検:スタンプを押す。 <u>2列目</u> 検:Where do you want to go? 旅:I want to go to Italy. 検:Why? 旅:I like pizza. 検:スタンプを押す。 <u>3列目</u> 検:Where do you want to go? 旅:I want to go to Italy. 検:Why? 旅:I want to see コロッセオ. 検:スタンプを押す。 <u>4列目</u> 検:Where do you want to go? 旅:I want to go to Italy. 検:Why? 旅:I want to eat pizza, I want to see コロッセオ and I like soccer. 検:理由を3つ言えていたらスタンプを押す。 旅:スタンプをもらったら、学級担任にシールをもらいに行く。 ○誰がどんな所に行きたかったのかを紹介し合い、振り返りをする。	Let's go to~ 各国の有名なものや場所 I want to see~ I want to eat~ Where do you want to go? I want to go~ I want to see~ I want to eat~ Why? ●旅行者側には、4段階に分けたパスポートを用意する。スタンプを押してもらって進むという設定により、意欲をもって活動に取り組めるようにする。 ●検査官は、一人一役にし、自分でしっかり“尋ねて聞く”機会をつくる。 ●英語表現が難しいものは、日本語で言ってもよいこととする。 ●友達の行きたい国や理由を聞き、他者理解をはかる。	○	◎	

7 本時の指導 (1 / 4)

(1) 本時のねらい

- ・国名と、その国の有名なものについて知ろうとする。

【言語や文化についての体験的な理解】

- ・行きたい国について尋ねたり言ったりする表現に関心をもちながら聞こうとする。

【音声や基本的な表現への慣れ親しみ】

(2) 本時の展開

時間	児童の活動	学級担任の活動	JET の活動	●指導上の留意点 ◎評価
3	1. はじめの挨拶をする。 ・はじめの歌をうたう。 ・簡単な挨拶をする。	なりきりカードを出す。 You'll be a singer. 歌の途中の質問を投げかける。 Do you like France?	児童と一緒に動作をする。 挨拶をする Good afternoon, class! How's the weather today?	●なりきり自己紹介を取り入れる。 1回目 singer 2回目 newscaster 3回目 soccer player ●質問は、本単元に関連する内容にする。
10	2. 国旗クイズをする。 ・聞こえた言葉をペアで相談する。 ・出題されたクイズがどこの国の国旗か考え答える。 [ドボンゲーム]	国旗クイズ 1, 3 問目をする。 1 問目 < China 中国 > What country? Two colors, yellow and red. One big star and four small stars. 2 問目 < Brazil ブラジル > Four colors, white, green, blue and yellow. One circle and one diamond in the center. 3 問目 < Australia オーストラリア > Three colors, white, red and blue. Six stars. 4 問目 < Egypt エジプト > Four colors, red white, black and yellow. A bird in the center. 5 問目 < Greece ギリシャ > Two colors, white and blue. One cross in the left.	国旗クイズ 2, 4, 5 問目をする。	日本人指導者と担任の役割分担 ●既習 (Hi, friends! Lesson1) の国旗をクイズに出すとともに、国旗を掲示しておき児童が無理なく聞くことができるようにする。 ●最初は学級担任が行い、児童と日本人指導者に方法を示す。 ●クイズに慣れてきたら、日本人指導者が出題し、正しい発音を聞かせるようにする。
5	3. 本単元のデモンストレーションを見る。	J:Where do you want to go? H:I want to go to India. J:India? H:Yes, this is the flag of India (国旗をもって), orange, green and white. J:I see. Why do you want to go to India?		新しい表現を知る 第一時の工夫

		(Why India?) H: I want to see the Taji Mahal. J: Taji Mahal? H: Yes, this is the Taji Mahal. (写真を もって) J: Oh, that's beautiful. H: And I want to eat curry. J: Oh, that's nice. I like curry, too. H: Yeah, I want to go to India because I want to see the Taji Mahal.		●視覚的に捉えやすいようにカードやジェスチャーを交えデモンストレーションする。 ●児童が知っている言葉を入れて表現する。 ●本単元のターゲットセンテンスは、強調して発話するようにする。
		どんな内容であったか児童に尋ねる。	児童から挙げた言葉を繰り返して言う。	
17	4. 行きたい国クイズをする。 ・クイズを聞く。 ・世界の国々の有名なものを知る。 [まちがいさがし] [並べかえゲーム]	Where do you want to go? で全員で尋ねることを促す。 4 問目は以降は、児童に日本人指導者役を促す。 I want to see までは学級担任が言う。 有名な場所は、児童が言う。	① I want to see the Pyramids I want to see the Sphinx. <Egypt エジプト> ② I want to see koalas. I want to see kangaroos. <Australia オーストラリア>	正しい外国語の音声聞かせの工夫 ●様々なパターンで問題を出し、“聞く”意欲の持続につなげる。 ●出題された国と有名なものは掲示していき、視覚的に捉えられるようにする。
5	5. チャンツを繰り返し聞き、唱える。	チャンツを聞く際の視点を知らせる。 ・どこの国を話題にしたチャンツか? ・どんな食べ物が出てきたか? ・どんなスポーツが出てきたか?	チャンツに合わせて国旗カード、有名なもののカードを出していく。	正しい外国語の音声聞かせの工夫 ◎国名と、その国の有名なものについて関心を持ち聞くことができたか。 <行動観察>
5	6. 振り返りカードを書く。 7. 終わりの挨拶をする。 ・"Skidamarink Good-bye Song"を歌う。	机間指導をする。 日本人指導者の評価と合わせて、関わりの面で、よかった点を評価する。 前に出て歌う子に声かけをする。	ねらいに照らし合わせて、よかった点を英語で表現する。	●日本人指導者からのコメントは、全てを訳すのではなく、要点をまとめて伝えるようにする。

3 第1時における教材との出会わせ方

□第1時は新しい表現と出会う場である。

⇒出会いの場を工夫することで、児童に、新しい表現に関心をもたせる。

- ・意味を知りたい
- ・ちょっと分かる言葉があるからもっと先を知りたい
- ・自分も言ってみたい
- ・何を言っているか分からないけれどおもしろそう
- ・友達と話してみたい

1 Hi, friends!1の第1時の工夫（教材との出会わせ方）の例

(1) <Lesson4> I like apples. 「好きなものを伝えよう」

☆ALTに自分の好きなもの嫌いなものを用意してもらい、顔の表情を通して「like」の意味を伝える。

☆「I like ().」と言った後に、児童に「Do you like ()?」と言って聞いてしまう。自然な流れの中で、好きなものを聞く、答えるというやりとりを体験させる。

・ターゲットセンテンス：I like (apples). Do you like (apples)?

・ALT：①自分の好きな食べ物、動物、スポーツ、その他（趣味?）の絵カードと逆に同じ種類で嫌いなものの絵カードを用意する。※できれば実物がよい。

②好きなものを提示するときは笑顔で「I like ().」「Do you like ()?」

③嫌いなものを提示するときは本当に嫌だというような顔で「I don't like ().」「Do you like ()?」

④リズムカルに（チャンツ方式）で繰り返す。

(2) <Lesson6> What do you want? 「アルファベットをさがそう」

☆児童一人ひとりから「I want ().」と言ってものをもらい、「What do you want?」と尋ねながらステッカーを渡していく。やりとりを通して、「欲しいものを尋ねられている」ことに気付かせる

・ターゲットセンテンス：「What (color) do you like?」「I like (blue).」

・ALT：①児童に、おもむろに近づき「I want a pencil. OK?」などと言ってもらい、逆に「What do you want?」と言ってステッカーを選ばせる。

②①を繰り返す。

(3) <Lesson7> What's this? 「クイズ大会をしよう」

☆自分たちはよく分かっているけれど、分からないものを尋ねていることに気付かせる。

・ターゲットセンテンス：「What's this?」

・ALT：日本ならではのもの、もしくは児童がよく分かっているもの（実物がよいが、写真で可）をいくつか用意してもらい、一つずつ見せながら「What's this?」と尋ねていく。

2 Hi, friends!2 の第1時の工夫（教材との出会わせ方）の例

(1) <Lesson2> When is your birthday? 「友達の誕生日を調べよう」

☆特徴的な行事などがある月を選び、誕生日と行事について会話している様子を見せる。（担任とALT、もしくは日本人指導者との会話）

☆児童が、これまで耳にしたことのある単語や身近な表現を用いる。

・ターゲットセンテンス：「My birthday is (December).」 「When is your birthday?」

・やりとりの例

担任: My birthday is (December).

ALT : Oh, it's the cold season. It's the Christmas season, isn't?

担任: Yes, my birthday is December. It's almost Christmas day.

担任: How about you? When is your birthday?

ALT : My birthday is August thirtieth.

担任: It's a very hot season. But it's nice. We have summer holidays.

ALT : Yes, it's a hot season, but we can enjoy fireworks. I like August.

担任: (児童に向かって) What words did you hear? (もしくは) What were we talking about?

(2) <Lesson4> Turn right. 「道案内をしよう」

☆実際に道でたずねられている状況について会話している様子を見せる。

☆児童が、「自分も同じような状況になった場合に、きっとこのように悩んだり戸惑ったりするであろう…」と感じさせるようなやりとりを演出する。

・ターゲットセンテンス：「Where is the (station)?」 「go straight / turn right / turn left」

・やりとりの例

ALT : Excuse me, where is the station?

担任: Where ??? What are you saying? (何を言っているのだろう。)

ALT : (ゆっくりと) Where is the station?

担任: Station? (駅のこと言っているのかな?)

ALT : (今度は地図を見せながら) Where is the station?

担任: (なるほど、駅はどこって聞いているんだな。うーん、でも、どうやって答えれば。)
(動作をつけながら) Right or left?

ALT : Right. HRT : Oh, I see.

ALT : Straight? Turn? HRT : Straight.

ALT : Oh, I see. Go straight.

担任: 児童に、“Where is ~?” “go straight.” の意味を尋ねる。

Ⅳ 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) A L Tの児童への関わり方の工夫
 - ア 一人ひとりの児童がA L Tと関われる機会を、挨拶やゲームの中に設定することで、児童の意欲が高まった。
 - イ 日本人指導者はA L Tに比べて、その場で児童の反応に、臨機応変に対応できていた。
- (2) A L Tと学級担任の役割分担
 - ア 外国語を児童にインプットする場面やアウトプットする場面では、A L Tの主体性を生かして進行することで、児童の意欲を高めることができた。
 - イ 学級担任は、自信がもてない児童や発言を試みていない児童へ声を掛けながら活動への達成感を味わわせることを通して、児童の意欲を持続させることができた。
 - ウ A L Tと学級担任の活動を明確にし、学習指導案上に明記して指導することで、役割を意識して取り組みめた。
- (3) 正しい外国語の音声を聞かせる工夫
 - ア 児童はA L Tの発音を聞いて言葉をインプットし、その場ですぐにアウトプットすることを繰り返すことで、イエローとYellowなど言い方の違いに気付くことができた。
 - イ クイズをする際は、まず担任が示し、その後はJ E Tが進めていく展開は有効であった。
- (4) 新しい表現を知る第1時の工夫
 - ア デモンストレーションによって児童が単元に関心をもち、単元の見通しをもつことができていた。
 - イ 児童の興味や関心が高まるような、例えば旅行に行きたくなるような小道具やカードの精選・提示は、視覚的に捉えやすく、児童がデモンストレーションの内容をよく理解できていた。
 - ウ 絵本の活用は、視覚的に捉えやすく、児童の興味や関心を高めるために有効であった。
- (5) A L Tが児童の成長を感じられる指導
 - ア A L Tによる賞賛は、児童の意欲を高めるとともに、認められたという成功体験を増やすことへつながった。

2 研究の課題

外国語活動における児童の意欲は、特にA L Tに褒められることによって高まっていくことが分かった。児童は、日本語が通じないと捉えているA L Tに対し、インプットしたばかりの言葉で、コミュニケーションを図る。通じているのかいないのか、不安な気持ちを抱えた状況の中で、英語を母語とするA L Tからジェスチャーを交えた“Good job.”や表情豊かな“Great.”で褒められることは、自分が認められたという大きな喜びを得るとともに、意欲向上の源となる。ゆえに、児童が外国語によるコミュニケーションの楽しさを味わうことにおいて、A L Tの役割が極めて重要であると考え。外国語活動を進行する役割のA L Tに対し、褒めることが人を育てていく上で大切であることを、活動を運営する役割の学級担任は伝えていかなければならない。そのためにも、まず学級担任がどんな場面で褒めるのか、どんな児童の反応を褒めるのか、褒めることを通じて人を育てるという態度や姿勢を示していく必要がある。

外国語を媒介にして、人とつながるコミュニケーションだからこそ、学級担任だけでなくA L Tにも児童の成長を感じられる指導を目指していきたい。

平成25年度研究開発委員会 委員名簿

＜小学校国語研究開発委員会＞

学校名	職名	名前	備考
大田区立馬込第三小学校	校長	神野 雅博	委員長
文京区立青柳小学校	主任教諭	宇賀村康子	委員
大田区立蒲田小学校	主幹教諭	西田 佳子	委員
府中市立府中第五小学校	主幹教諭	柴田 紀子	委員
小平市立小平第六小学校	主任教諭	柿原 直昭	委員

担当者 東京都教職員研修センター研修部教育開発課 統括指導主事 海老江 直子

＜小学校社会研究開発委員会＞

学校名	職名	名前	備考
板橋区立板橋第十小学校	総括校長	石橋 昌雄	委員長
小平市立花小金井小学校	主幹教諭	山倉 尚	委員
武蔵野市立千川小学校	主任教諭	高丸 一哉	委員
日野市立夢が丘小学校	主任教諭	神野 幸隆	委員

担当者 東京都教育庁指導部指導企画課 統括指導主事 宮崎 直人

＜小学校算数研究開発委員会＞

学校名	職名	名前	備考
荒川区立汐入東小学校	統括校長	羽中田彩記子	委員長
世田谷区立駒沢小学校	主任教諭	内藤 信義	委員
北区立滝野川小学校	主任教諭	関 正浩	委員
練馬区立関町北小学校	主任教諭	鈴木 博之	委員
調布市立調和小学校	主任教諭	石津 孝介	委員
武蔵村山市立第二小学校	主任教諭	赤坂 弘樹	委員
西東京市立中原小学校	主任教諭	宮本恵美子	委員

担当者 東京都教育庁指導部指導企画課 統括指導主事 萩谷 磨
東京都教育庁指導部指導企画課 課務担当係長 岩崎 公慈

＜小学校理科研究開発委員会＞

学校名	職名	名前	備考
墨田区立二葉小学校	校長	永田 学	委員長
江戸川区東小岩小学校	主幹教諭	戸田 道寿	委員
府中市立小柳小学校	主幹教諭	河野 芳浩	委員
文京区立千駄木小学校	主任教諭	相蘇 好	委員
世田谷区立桜小学校	主任教諭	吉野 早織	委員
あきる野市立西秋留小学校	主任教諭	木月 里美	委員

担当者 東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課 統括指導主事 安部 貴史

＜小学校体育研究開発委員会＞

学校名	職名	名前	備考
千代田区立お茶の水小学校	校長	山田 茂利	委員長
江東区立東川小学校	主幹教諭	金指 大輔	委員
足立区立新田小学校	主幹教諭	関口 亮治	委員
八王子市立大和田小学校	主幹教諭	井口 幸恵	委員
昭島市立武蔵野小学校	主幹教諭	美越 英宣	委員
多摩市立聖ヶ丘小学校	主幹教諭	三浦 健仁	委員
調布市立第三小学校	主任教諭	小島 大樹	委員

担当者 東京都教育庁指導部指導企画課 統括指導主事 佐藤 洋士

＜小学校道徳研究開発委員会＞

学校名	職名	名前	備考
江戸川区立一之江小学校	校長	田代 敏博	委員長
江戸川区立二之江第二小学校	主幹教諭	時枝 智美	委員
小金井市立東小学校	主幹教諭	田上由紀子	委員
国分寺市立第二小学校	主幹教諭	田端 敦子	委員
西東京市立向台小学校	主幹教諭	原田 知樹	委員
練馬区立光和小学校	教諭	螺良 幸生	委員

担当者 東京都教育相談センター 指導主事 川島 直人

＜小学校外国語活動研究開発委員会＞

学校名	職名	名前	備考
新宿区立西新宿小学校	校長	大庭 裕	委員長
墨田区立第三寺島小学校	主任教諭	吉田 啓	委員
北区立滝野川小学校	主任教諭	吾郷 良子	委員
練馬区立関町北小学校	主任教諭	田村希代子	委員

担当者 東京都教育庁指導部指導企画課 統括指導主事 宮嶋 淳一

平成 2 5 年度
研究開発委員会指導資料集〔小学校〕

東京都教育委員会印刷物登録
平成 2 5 年度第 1 9 9 号

平成 2 6 年 3 月発行

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6836
印刷会社 松本印刷株式会社



古紙パルプ配合率70%再生紙を使用しています